風、その他

u_

風

　ずっと箱の中を覗いていて、気が付かなかったが、私の直ぐ頭の上は、とんでもない強い風が吹いていて、もし箱を覗くのを已めて頭を上げていたら、私は、一瞬で吹き飛ばされていただろう。しかし、その箱を抱えて、もう大分長い事、それを持て余していたのも確かだ。覗くと言っても、覗き穴がある訳でもなく、パックリと開いている箱に、頭を突っ込んでいる恰好だ。真四角の箱を、胸の上に抱えていて、ただでさえ持ち難いのに、箱の底は、丸ごと黒い石で出来ていて重い。持っていられるのが不思議なくらいだ。私は、箱を潰そうと、両腕で、それを強く挟み付けた。箱の側面は、ぐにゃりと曲がり、そのまま私は、丸め込む体勢に入った。何処もぐにゃりとしていて、もう、石で出来た底は抜けているのだ。私は、真っ黒な濡れた岩場に裸足で立っていた。穏やかな風は、月の光を受けて柔らかく輝くようだった。箱は、すっかり丸くなっていて、何時までも持っていられそうだが、足場が怪しかった。岩場は、どんどん丸く小さくなって、まるで、その上で玉乗りでもしているようではないか。

箱を丸くしてしまった事と係わりがあるに違いない。私は、箱を元に戻そうと、丸まった所が角張るように引っ張ろうとした。そうしてみて分かったが、箱は、四角の時よりも大きく口を開けていて、私は、殆ど箱の中に頭を突っ込んでいた。いっそ、そこで地面を蹴って、すっかり箱の中に収まってしまったらどうか。首を盛んに回して箱の内側を見回し、私は、着地出来そうな所を探した。丸く盛り上がった黒く光る岩場が目に入り、私は、直ぐに、そこに向かって飛び込んだ。しかし、私の体は、その上を通り過ぎて、箱の底の辺りを転がり、そのままずっと、転がっていなければならないようだった。それを止めるには、箱を抱えるしかないが、私は、その中に居るのだ。替わりに、箱の中の岩場を、抱え込めるだろうか。それしかない。転がりながら、周りに目を配ったが、何処も薄汚れたように白くて、黒光りするものは一つもなかった。転がる速さは、増す一方に感じられた。いずれ、頭に血が上って、顔中の穴から血が噴き出すだろう。仕方なく、私は、自らの腹を切り開いて、胴体を箱に仕立てた。

　私は、箱を持って、黒光りする岩場に立っていた。腹には、四角い大穴が開いていて、中は空っぽだった。その空っぽな中が、箱の中で、私は、そこにまた、首を突っ込んで、覗き込んだ。前のめりになりすぎて、前に転がった。当然、箱も一緒に転がる。弾みで、私は、箱の中に閉じ込められた。箱は、一度も開けた事がないように、すっかり閉じていた。私は、黒い岩場に、二本の足

で立ってはいられたが、どちらを向いても黒い岩場で、自分がその何処に立っているのか、分からなかった。どうしても私は、確かに立っていると分かる所に、立ちたかった。箱さえ覗ければ、私は、その箱を覗いている所に、確かに立っているのだ。しかしもう、箱に出来るものどころか、手に取れるものさえない。頭と手足だけがあって、それを振り回しては、風を起こそうとした。その風を岩場の何処かに乗せられれば、目印にはなるだろう。風は起こっただろうか。耳を澄ますと、風の音は、外から聞こえる。もっとはっきり聞き取ろうとすると、その風の中を、私の頭と手足が、粉々になって飛んでいかなければならなくなった。そして、その粉と粉が擦れ合うサラサラいう微かな響きは、ただ遠ざかるばかりだった。それは、決して、箱の中には響いて来なかった。私は、その遠ざかって行く方を向いて、尚その先にあるものを抱え込む真似をした。いや、どうして私にそんな真似が出来るのか。そんな真似が出来るのは、何もない箱の内側だけだろう。そうして私は、その閉じたままの箱から、居なくなった。それなら、今度は、私が、抱き抱えられる番に違いない。

　サラサラという響きの途切れた先は、濡れた黒光りのする岩場で、そこは、大きく口を開けた箱の中だった。箱は、何処かに、転がっていられる訳ではない。必ず、抱えられていなければならないし、抱えている者に、中を覗かれていなければならない。それは、見事な真四角だった。そんな風に何処にも歪な

所がないなら、まだ、誰にも、抱えられてはいないのだ。そのままでは、恐らく箱は、真四角過ぎるまま、箱でいられなくなってしまいそうだ。しかし、真四角な箱の他には何もない。箱自らが、声を上げて、求められているものを呼ぶしかなさそうだ。それとも、箱はもう声を上げているのか。ただもしそうなら、その声の分だけ、箱は、真四角ではないだろう。真四角にしか見えないのに、真四角でないなら、それは自ずと、見失われるしかない。見えている間は、まだ声を持っていないのだ。それとも、真四角なままであるだけで、もう見失われているのか。いや、　一体何処に、黒光りする岩場を見て取れるのだろう。

（二〇〇二年一月一日）

＊　＊　＊

砂地

　白い砂の平らに拡がる、小さな島の真ん中に居た。周りは、黒い岩肌を剥き出した崖が高く切り立っていて、海は何処にも見えなかった。崖の上の枯れ掛けた木々が、炎の形に見えた。その向こうの見えない空は、赤く焼けているに違いない。ずっと高い一ヶ所に、星が幾つも集まっていた。振り返ると、男達

が、崖のあちこちに耳を当てて、波の音を聞き取ろうとしていた。その音の一番大きく聞こえる所が、一番岩の厚みがないのだ。彼らは、そこを探し当てると、握り締めた大きな丸い石を打ち付けて岩を砕き、道を切り拓こうとした。船の繋いである岸辺に出るには、そうするしかない。そうしない事には、家には帰れない。

　島の真ん中の白い砂は、掘っても掘っても崩れて、穴になる前に埋まってしまう。一刻も早く家路に着きたい男達の援助など、あり得ないが、慌てる事はないのかも知れない。却って、陽が落ちてからの方が、星明かりが、何処を掘ればいいか教えてくれそうだった。男達は、一ヶ所に固まって、石を崖に打ち付けたが、岩は柔らかすぎて、砕けるよりも、鈍い微かな音を立てて凹むばかりで、先行きが思い遣られた。口々に、陽が暮れるまでに作業をし終えるよう励まし合っているようだが、虚しく聞こえる。しかし、ここには白い砂しかない筈なのに、彼らは、何処で丸い石を見付けたのだろう。恐らく、外から持ち込んだのだ。その石のせいで、白い砂は、私に穴を掘られるのを拒んでいるのではないのか。それを問い質そうと、男達の方に向かった。近付くと、崖は、それでも少しは削れて、人一人入れるくらいの窪みが出来ていた。その窪みの手前に、丸い石が扇形に並べられていて、男達の姿はなかった。一人ずつ、その石の下に埋もれてしまったに違いなかった。

　持ち上げようとしても、どの石をビクともしなかった。見えない石の下で、男達が、ガッシリと石を掴んでいるようだった。石の周りの砂を掻いて、石を掴む指を見付けようとしたが、そこでも砂は、最初の一掻きに流れ込んで、全く穴を掘らせなかった。

　窪みの暗い中に、窪みの奥に痩せた背中を預けて、男がしゃがみ込んでいた。彼の手にも丸い石があったが、他のよりも明らかに小さくて、しかも二つに割れて、その一つずつを両手に持っていた。近付いて見ると、その体は、萎れて干涸らびていた。その背中がザラザラと岩肌を擦ったが、簡単に持ち上げられた。小さな石は、掌の肉に食い込んでいるようで、落ちなかった。

　それを抱えたまま、扇形に並ぶ石を跨いで、また島の真ん中に来た。男の体は、風に当たったからか、更に小さく軽く細くなっていた。それを頭から砂に突き刺すと、ただ手を添えているだけで、スルスルと埋まっていった。最後に内に曲がった爪先を上から押すと、すっかり砂に隠れた。石も一緒に埋めてしまったが、それで良かったのだろうか。それとも、石のお陰で、砂は、男を受け入れたのだろうか。

　最後に爪先を押した所が、プックリと小さく盛り上がっている。掌で均そうとしても、砂は、掌を擦り抜けて盛り上がるままだった。それは、そこに埋まった男だけが、他の男達より飛び切り若いからかも知れない。掌を擦り抜ける

砂の素速さは、半端ではない。それを確かめようと、また扇形に石を並べた奥の、崖の窪みに引き返した。石の並びに、後、二、三歩まで近付くと、砂を踏む足が滑って、前に進めなくなってしまう。砂の下の男達の仕業に違いない。もう二度と、窪みに入り込んで欲しくないのか。引き返そうにも、引き返す所がない。手ぶらで、若い男の所に戻ったら、全てはそれきりだ。一握りの砂を、窪みの中に投げた。高い空に集まった星明かりが、その砂を、白く輝かせた。それが、窪みの奥の形を、朧に照らした。その形目掛けて、飛び込んだ。石の並びは、一つ飛びに、踏み越えられた。

　ぴったり、その形になって、窪みの奥に張り付いていた。陽が落ちたのか、辺りはみるみる暗くなった。それに連れて、乾いた風が次々に起こって窪みを撫でて行く。その形のまま、萎れて干涸らびるしかなかった。最後の水分が、涙のように、一滴だけ目に滲んだ。その一滴の中に、砂の真ん中に埋まった若い男の、砂を掻き分けて、そこから身を起こそうとしている姿が、映った。男は若かったが、それでも、乾いた風は彼には酷なようだった。それに、星明かりが眩しすぎた。男は先ず、目が見えなくなって、砂地の上を彷徨った。彷徨いながら、体はまた、萎れて干涸らびていった。

　目を覚ますと、私は、崖の天辺の、その島の一番高い所に横たわっていた。右を向けば、夜の海と、その対岸の幾つかも灯りも見えたし、左を向けば、黒

々とした崖に円く囲まれた、平らで真っ白な砂地も、隅なく見下ろせた。更にその手前に、切り立った崖を、私の方にせかせかとよじ登ってくる男達の、黒い影のような姿が、見て取れた。下の円い砂地には、誰も居なくて、足跡一つさえなく、真っ平らな白い鏡のようだった。男達の手には、丸い石はなかった。それは、私の手の中に幾つもあった。それを崖に転がすと、男達は、その石に当たっただけで、薄っぺらな紙のように、クシャクシャに丸まりながら崖を転げ落ちた。私は直ぐに後を追って、急な崖を、つんのめって駆け下りた。男達の身ではなく、男達が砂地まで転げていって、そこが真っ平らでなくなってしまうのを、案じたからだ。降りて行く途中、自分もまた、薄っぺらな紙になって行くのを感じた。しかし、彼らと違って、石を抱え込んではいない。私の体は、宙に浮いて、更に薄く拡がって、丸い砂地の真上の辺りをフワフワと漂った。砂地の縁まで転げ落ちた男達は、立ち上がって、石を握ったまま、頑強そうな肉体で盛んに歩き回って、砂地を足跡だらけにしながら、その上に浮かんだ私の姿を追い続けた。私は、更に薄く拡がって、円い砂の拡がりと同じ大きさにもなったろうか。すると、ゆるゆると降りて、砂地にすっかり覆い被さった。男達は皆、体の力を奪われたように、その下に埋もれた。薄く拡がりすぎた私は、砂の白い色に溶けた。

　小舟が一艘、島の岸辺に着いた。そこから降りた女が、辿々しい足取りで、

崖に掘られたトンネルを潜って、砂地に足を踏み入れた。その真ん中まで進むと、抱き抱えていた若い男の硬く干涸らびた体を、砂に埋めた。穴は、簡単に掘れた。砂は、少しだけ湿り気を帯びていて、ちょうどその女の手の力で、巧く掻き上げる事が出来た。それから、女は、その上に身を屈め、決して、トンネルの方を振り返らなかった。風も少しだけ湿り気を帯びていて、女の体は、冷えはしたが干涸らびはしなかった。私はまた、砂の色の上に薄く浮かび出て、その女の体を包もうとした。白い膜の私は、女の体を中心にした、逆さまの平べったい円錐形にまでは成ったが、それよりは、女の体を包む事は出来なかった。湿り気が、その私に染み通って、私はまた、砂の色の上に降りて沈んだ。真っ平らな砂地に、女の姿はなかった。トンネルは、生臭い風を筒状に送り込んで来ていたが、直に埋もれた。私もまた、砂に埋もれた。埋もれながら、その鏡のような砂地が乾き果ててゆくのを崖の天辺で見届けていた者を、独りで見送った。（二〇〇二年一月三日）

*　*　*

腕

　丸い石を一個、両手で胸の前に持って、その石に相応しい所に辿り着こうと歩いていた。縦に五つ並んだ穴を覗くと、石の中は、綺麗に丸く刳り抜かれていて、外側よりずっと肌理細かく磨き込まれている。外からの光を易々と通し、卵の殻のように薄かった。真っ直ぐな下りの道が急に途絶えた先には、膝くらいまである青い草が、びっしりと生えていた。踏み込むしかない。草を踏むと、草と草は、音を立てて激しく擦れ合い、私の足を押し戻した。草地の真ん中に、泳ぐような動作をしている人の後ろ姿が見えたが、直ぐに草に隠れて、その位置も見失われた。

　道と草地の境に、穴を埋めた跡がある。掘り返すと、草の根が剥き出された。その直ぐ下は、硬い岩盤だった。草の根の端を、指で摘んで軽く引っ張っただけで、その上の青い草の葉が、束になって、穴に零れ落ちた。どれも細長く、先がピンと尖って、触ると冷たく硬かった。また、草の根の端を、同じように引っ張った。草は、もう抜け落ちなかった。抜けただけの草を穴から掻き出すと、手は泥だらけだった。その替わり、その手で泥を全て拭い取ったかのように、草は、隅々まで艶々と青かった。草を掻き出した跡に目を凝らすと、そこはまた穴を埋めた跡だった。掘り返すと、白い玉砂利が、幾つも出て来た。もう終わりかと思って、穴の一番奥を覗き込むと、そこにまた一つだけ、白い玉砂利が見えた。取り出すと、土が崩れて、その奥にまた、一つだけ玉砂利が見

えた。同じ事が何度か続いて、玉砂利に導かれるように、穴に入り込んだ。

後ろでカサコソいう音は、草たちが、穴を塞いでいるのだ。その音を聞くと、玉砂利は絶えて、暗くて何も見えなくなった。体の幅しかない穴が、更に両側から締め付けてくる。草の根が、成長しているに違いない。その草の根を受け入れてしまうと、締め付けは緩くなり、体は、穴よりも脹れて、土の中を拡がろうとさえした。そのままで居る訳にはいかない。起き上がると、そこは草地の真ん中で、泳ぐようにしていた人の姿を探すと、目に入った草から順に、抜けて舞い上がった。それらは、一斉に私に突き刺さって来るようだったが、互いに擦れ合って、殆どは途中で細かく裂けて、直ぐに枯れた。腕で一払いすると、全て風に吹き攫われて、真っ白な根だけが残った。それらは、びっしり敷き詰められていて、何処にも地肌を覗かせなかった。　起き上がった時に出来た穴も、その根にすっかり埋まってしまったようだ。

その根に足を取られて、動けない。息を詰まらせる冷たい風が降りて来て、胸と背中を凍らせた。その場にしゃがむと、風は、頭の上を掠めるだけになった。草の根と同じ肌の色をした、痩せこけた二本の腕が、目の前に差し出された。その手は、丸い石を持っていて、石には、五つの穴が横に並んでいる。それの上に、息が吹き掛かると、石は、震えて、か細い音を途切れさせなかった。音のしている間なら、同時に、その五つの穴を通って、そこを通り抜けられる。

何かが、五つの穴に入り込むのが見えた。それは、石の奥で、一つに繋がって、地面に叩き付けられるように、波打ちながら転がって遠ざかって行った。何か掴むものが欲しかった。痩せこけた二本の腕を掴むと、その手は、石も何も持っていなくて、ブラブラと揺れた。膝頭が、ツルツルした草の根の上を、前へ前へと滑り出た。痩せこけた腕の持ち主に、引っ張られているに違いない。草の根だけの草地の向こうは、緩やかに左に傾いた石原だった。丸い石が、びっしり敷き詰められて、殆ど地肌は覗かせない。そこだけ傾きの急な一番低い所にだけ、細長く、黒い地肌が現れている。石の大きさは、どれも、余り変わりがなかったが、一つとして同じ大きさではなさそうだ。その中のどれか一個を、探り当てなければならない。それは、穴が五つ開いていて中が空っぽなものかも知れないが、まるでそうでないのかも知れなかった。

一番低い所の、その更に向こうで、痩せこけた腕が、反り返って小さく振られていた。ここで、探り当てなくても、探す振りをして、蹲いて、一番低い所まで転げ落ちて行けば、あの痩せこけた腕が、またその手にした丸い石を、掲げて見せるのではないか。しかし、腕は、直に、力なく折り畳まれ、そこの黒い地肌に横たえられて埋もれた。やはり、石原の端から順に、一個一個、石をひっくり返して行くしかないのか。最初の石に触れると、全ての石が、ガラス玉のように透き通った。その下に見通された黒い地肌の斜面に、大きさの違う

五つの穴が開いていた。その上のガラス玉が崩れて、静かに穴に落ち込むと、体は、五つに張り裂けて、五つの穴にバラバラに投げ込まれた。土の中で、草の根と同じ色の痩せこけた腕が、更に痩せこけて、その五つに裂けた体を抱き留めた。先に土に還ったのは、その五つの体の方で、痩せこけた腕は、斜面が崩れて、五つの穴が塞がれるのを待って朽ち果てた。穴に吹く冷たい風が、幾ら音を鳴らしても、鳥も獣もやって来ない。（二〇〇二年一月五日）

＊

＊

＊

歌

小川を挟んで、そう若くない男と女が、歩きながら、低い声で、歌を歌っている。先に、女が歌うのをやめた。男は、歌いながら、真っ直ぐ立ったままの姿勢で、爪先から川に飛び込んだ。川は、狭い割りに深くて、男の姿は、小さな飛沫の下に消えて、浮かんでこなかった。女は、まだ耳に残っている、男が独りで歌った歌の歌詞を、口の中で転がした。言葉は、粒々と、はっきりした形に感じ取れた。そして、それが、男にとって、長い間、決して欠かせないものだったとも、分かった。女にとっても、多分、そうだったのだろう。言葉が、

はっきりしすぎて、歌にならなくなった。歌を取り返そうと、女は、慌てて、声に出して、上体を左右に揺らして、歌に身を委ねるようにして、歌った。それが、少し下流で、頭だけ水に出した男の耳に入った。声は、穏やかな水の流れの上を通って、冷たく澄んで、はっきり聞き取れているのに、男には、女が歌を歌っているとは分かっても、その歌が何を歌っているのかは、まるで分からなかった。歌詞を、口の中で転がそうとすると、耳の中では、はっきりしていたその形が、水のように溶けてしまう。男は、歌を取り返そうと、声に出して、歌った。女は、小川を一飛びに飛び越えて、男に背を向けた。まだ歌っているのかも知れないが、男の耳には届かなくなった。女の背中を見て、男は、少しだけ、その歌の事を分かったように思えた。男は仰向けになって、また流れに身を任せ、下流の方へ遠ざかりながら、口を突いて出るままの歌を、歌い続けた。それとも、それは、歌などではなくて、分かったように思えた女の歌の積もりで、口をパクパクさせながら、水の音を聞いていただけかも知れない。女は、歌うのをやめて、川の水を掬って、一口飲んだ。それからまた、歌い出した。歌は、直ぐに、滑らかに口から出てきた。しかし、女の耳には、その自分の声が何であるのか、まるで分からなかった。分かろうとして、女は、出来る限り大声で、叫ぶように歌い続けた。その声が、男に届いた。男は、水に飽きて、川を上がって、伸ばした体を陽に当てて、乾かしていた。男には、それ

が、女が歌っている声だとは、分かった。しかし、言葉が、粒々と、はっきりしすぎていて、自らの歌声で、その言葉と言葉の隙間を埋めなければ、男の耳には、歌とは聞こえなかった。喉が渇いて、男が声を途切らすと、歌っているとは分かっていても、女の声は、途端に、歌には聞こえなくなった。直に、女の声はやんだ。男は、自分の声だけで、歌を続けなければならない。女が、小川に身を投げるのが見えた。そこは浅瀬で、横たわった女の体の殆どが、水の上だった。男は背を向け、川沿いに、更に下流に向かって歩いた。男は、自分が、歌を歌おうと、声を出しているとは分かった。ただそれは、耳の中では、声には聞こえなかった。石のような塊に、色々な言葉が貼り付けられて、それが、耳の中で、ゴロゴロと転がっているようだった。それを、いいとも悪いとも思わなかった。足が重くなって、直ぐに、女が追い付いてきた。女は、びしょ濡れで、その水気を振り落とすためでもあるかのように、大股に走ってきた。女に、自分の変な声を聞かせていいものか。男は、声を出すのを、やめるかどうか迷ったが、口の動くに任せている内に、女は、男の横を通って、速度を緩めず、前に出た。その間際の女の横顔を覗き見ると、女の口は動いていなかった。その口の形を真似て、男は、声を出すのをやめた。女は、どんどん先に行って、見失われた。川幅が、大分広くなっていて、幅の狭い木の橋が架かっていた。男は、橋を渡り掛けた。木の硬い履き物を履いていて、橋は、水音が聞

こえなくなる程に、カランカランと、けたたましい音を立てた。それでも、その中に、後ろから聞こえてくる、女の荒い息遣いが聞き取れた。振り返ると、橋の袂で、欄干の端に寄り掛かって、女が、口を開けていた。男に向かって、声を上げているのは、分かったが、聞こえてくるのは、まだ走り続けているような、荒い息遣いだけだった。男は、直ぐにまた向き直って、橋を渡り終えた。そこに別の女が居て、橋の向こうの女に向かって、声を上げていた。多分それは、歌だろうが、途切れ途切れに聞こえた。それが届けば、荒い息遣いもやんで、女と女の声が、橋の上で交わりそうだ。そう思うと、男は、その場に蹲って、口から、黒い石のような塊を幾つも吐いた。そのどれにも、剥げ掛けた言葉が貼り付けられているようで、そこだけキラキラと輝いていた。それらは、橋の脇から、川に転げ落ちて、見失われた。しかし、振り返ると、それと同じような塊が、橋の上を転がって、幾つも往き来しているように、見えた。水音を押し退ける程ではないが、ひどく分かり難い音で、耳障りだった。女の姿は、二つとも消えていた。男は、力を振り絞って、立ち上がった。橋の下の水の流れの真ん中で、二人の女が絡み合い、一つに纏まって、一人になろうとしていた。男は、声を掛けようとした。すると、体がくずおれるようで、その体の動きから、石のような塊が、幾つも剥がれ落ちた。キラキラ輝く言葉は、もう貼り付いていなかった。それらは、次々に川に飛び込み、女の体に打ち当たった。

女の体は、一人になり掛けたまま、水に沈んだ。男は、水辺まで這っていって、水音の中に、女の声を聞き出そうとした。川の水が全て、黒い石のような塊が、ゴロゴロと転がっているように、見えた。掌に掬って、一口飲むと、喉は潤ったが、水の味はしなかった。舌の上を、小さな石のような塊が犇めき合って、ギシギシ音を立てているような味だった。仰向けになって、空を見上げると、空の色は、すっかり抜け落ちていた。そこを渡る風が、黒い礫が飛び過ぎるように、見えた。そこから見渡す限りでは、色はもう、その礫の黒の中にしか、残っていなかった。さっき、女がしたように、もう一人、男を見付けて、水の中で、それと一つになろうとしなければならないのだろうか。それとも、もう手遅れなのか。橋の方を見ると、橋は、まだ架かっているようにも、もう落ちてしまったようにも見えた。それに目を凝らす男の体は、二つが一つになろうとしているようでも、一つが二つになろうとしているようでもあった。もう、誰も探さなくていいのかも知れない。女を見付けた。それは、水に流されているようでも、岸辺に打ち上げられたようでもあったが、女が男を見付けたようでもあった。（二〇〇二年二月七日）

*

*

*

無駄

高い壁に挟まれて人目に付かない、長い鉄の階段を登り切った所に、女が、萎んだように蹲っている。男はそれを、階段の下から見上げたが、その女の声が別の所から聞こえたようで、後ろを振り返った。高い所から落ちてくるその女の一声は、ひどく若く聞こえて、吸い取られるように消えた。何処へ消えたのか。それを追う目は、なだらかに下る黒く濡れた広い砂浜を、真っ直ぐに滑り下りていた。先ずその目に留まったのは、平らな中に、たった一ヶ所、掻き出された黒い砂の一盛りで、それは細長く横たわるようだった。男は、思い出せない程の長い時間を掛けて、そこからここまでやって来たのではないか。その長い時間を、一目で見て取れてしまったようだった。その砂の一盛りの先には何も見えず、ほんの微かな波の音が響き渡って、高い壁のように暗く立ちはだかるようなだけだった。そこでは一度も振り返らなかったので、その波の響きの壁のような暗さを目にするのは初めてかも知れない。それとも、向き合った女の目の中に映し込まれているのを見て取っただろうか。しかしその記憶も、長い時間によって隔てられていた。女の瞳は、もう大分前から暗く沈んで、何も映してはいなかった。尤も、それと知れるのも、今、その見えない先を目にしてしまったからだろう。

　男はまだ、立ち尽くすまま一歩も動いていない。階段の上で女が蹲るなら、男は、それと違う事をしなければならない。女の方へ歩き出せるだろうか。それとも逆に女から離れられるだろうか。黒い砂浜への方が、ずっと離れてはいる。砂浜が何処から始まるのかさえはっきりしないが、そこはもう通って来たのだし、一度通れば、それで済んで、忘れてしまえたのではなかったか。女の声が、ひどく若く聞こえたりしなければ、振り返ったとしても、二度と見ないままにいられた所なのかも知れない。

　それならもう、そこに辿り着いたようなものではないか。そこまで戻れたとしても、見えて来るものに少しも変わりはないだろう。それとも、間近に覗き込めば、掻き出された砂の中に、何が落とし込まれたか、見て取れるのか。しかし、今更それを見てどうなるだろう。遠過ぎて、戻って来られなくなるかも知れない。行き着けるのかも分からない。いや、どうであろうと、一度そこまで行って戻って来ない事には、階段を登って女の方へ行く事など出来そうにない。女が階段の上で何を見て蹲るのか、男には分かっている。階段を登るだけでなく、その女の見るものを片付けて、それから女を背負って、また階段を降りて来なければならないだろう。先ずは、砂浜へと踏み出すしかなかった。

　すると男は、何もない黒い砂浜の真ん中に独りで居て、砂の一盛りは、直ぐ足元にあった。やはり、見ただけで、辿り着いてしまっていたらしい。掻き出

した中を覗き込むには、盛り上げた砂が邪魔だったが、それを退けようにも、一歩も動けない。砂を掻く力も、すっかりなくなっているようだ。砂に着いた手形は、どれも男のものだ。ただ、独りで砂を掻き出せたのは、男の力ではなかった筈だ。掻き出した中に、男が、落とし込んで行ったものの力だったに違いない。その事を知っていただろうか。今やっと、それを知るのか。いずれにしろ、ずっと長い間、何の力も持ち合わせていなかったと思い知らされるしかない。男に力があったのは、その落とし込んで行ったものを見付けるまでだった。それを見付ける事に、全ての力を使い果たしたし、それを見付けてしまえば、後は、それが男の力の代わりとなって、男を先に進ませる事が出来たのだ。

　更に、男は、自らの力のなさから、盛られた砂の陰に隠されている中が空っぽだとも、思い知るしかなかった。それがまだ、そこに落ち込んだままか、それとも、そこを這い出して掻き出した砂を埋めてしまえば、戻って来ずに済んだのだ。そこから這い出しもせず、いきなりそこを空っぽにして居なくなるとは、一体どうした事だ。ただ、空っぽだと分かったからと言って、代わりをそれをまた見付けられる力が湧いてくる訳では、もちろんない。

　男に出来るのは、そこからまた、階段の方に向き直る事だけだ。階段の上の女の、そのまた先に、男の落とし込んで行ったものが、春の乾いた強い風にでも揺れて、ぶら下がっているのだろう。一飛びで、そんな所まで行けたとは、

何という脚力だろう。そんな力があるのなら、先ず、砂から這い出せば良かったろうに。しかし、そんな力を養ってしまったのは、他ならぬ、男だ。男が、それをここに置き去りにして、長いなだらかな道のりを、何事もないまま真っ直ぐに、鉄の階段の下まで歩いてきたりしたからだ。そのせいで、その道のりの果てに、女が先に登った階段を登らなければならなくなった。

　では、もし男が、砂の中に落とし込むものなど始めから見付けないまま、砂を掻き出したりもせずに、遣り過ごしていたらどうだったたろう。男は、独り切りの力を徒に費やして、何も見付けられず、砂に埋もれただろうし、その上を、女が何も気付かずに踏み付けても行っただろう。それならやはり、戻って来なければならなくなったにしても間違ってはいなかった。そして、男は、今また、凄い脚力を見せてそこを空っぽにして行ったものから、微かながらも、力を受け取ったのだ。男は、前に倒れ込んで、盛られた砂にのし掛かった。砂は崩れて、穴を埋めながら男の体をも穴の中に滑り込ませた。男は、半分だけ自分をそこに埋めた。海の方から湿った風が吹き上がってきて、砂は綺麗に均され、全て平らな砂浜になった。埋めなかった残り半分で、男は、向き直って階段を登った。

　階段の上で女に触れて、男は、力を使い果たした。女は、先程よりもっと若い声を、弱々しく洩らした。それから、唸り声を上げながら、棒のようにぎこ

ちなく階段を駆け下り、砂浜の方へと歩み出た。女の目には、男が見たのと同じ、濡れた黒い砂浜の中の砂の一盛りが見えていた。全く初めて目にする。しかし、幾ら歩いても、そこに近付くのさえ出来そうにない。女は、殆ど赤ん坊のような声を張り上げた。男の耳にそれが届くと、男は、そちらを見下ろす事だけは出来た。男はそのまま、女が、一歩一歩、階段から離れて行くのを見詰めていなければならなかった。しかし、それで、後ろを見ずに済んだ。女は、砂浜に足を踏み入れる前に、砂浜を見失って行き惑い、また萎れたように蹲るしかなかった。男は、それ以外のものは、もう見ない事にした。

　男の後ろで、男に似た女が、もう一度跳ね上がって、男が砂を掻いた中まで、一飛びに戻ろうとするようだった。何のためにそんな事をするのか。出来る筈がないと、分からないのか。分からないから、そうするのか。もちろんそれは、男には見えない。女にも見えなかったが、女には、それがそうするのを分かっていた。だから、暫くしてまた立ち上がり、砂浜を目指すのだが、相変わらず、そこに近付けはしない。

　いや、戻ろうとしたのではない。それは、もう一度飛び跳ねて、更に後何度でも飛び跳ねて、もっと高い所に行けるのを、無駄な事とは分かっていても、二人に見せたかっただけだ。そうせずには、いられないのだ。すっと、高い壁のように立ちはだかるものにのし掛かられて、砂の中に隠されていなければな

らなかったのだから。しかし、飛び跳ねるどころか、それは直に、濡れた砂の一掻きと見分けの付かないものになって、そこを見慣れない色で汚した。（二〇〇二年一月九日）

＊　　＊　　＊

涙

ひんやりした板張りの短い廊下の突き当たりのドアを開け、狭く急な階段を降りた。そこは、窓もドアもない真四角な部屋で、壁も床も天井も、目の大きな魚の模様で覆われていた。他に何もない。直ぐに引き返そうと階段を振り返ると、艶々した階段の踏み板は、どれも少し俯いて、うっすらと細かな砂が塗してあり、恐らく足が滑って上れそうにない。壁と同じ模様の、隠し扉か何かの仕掛けがあるのかも知れない。手の届く限り、壁を全て撫でて回った。床も撫でて回ったが、何処も、魚の腹のようにヌルヌルしているだけで、何も見付からなかった。部屋を歩き回って、天井と、壁の手の届かない辺りを、色々な角度から眺めてみた。或る角度から見てだけ、色を変える一隅がある。そこは、階段の裏側の天井に近い壁で、縦に長い楕円に、そこだけが色褪せて灰色掛か

って見える。飛び上がって腕を伸ばせば手が届くだろう。その下の壁際まで行って飛ぼうとしたが、ただでさえヌルヌルしている床が、そこは微かに斜めに膨らんでいて、床を蹴った瞬間に足を滑らせてひっくり返りそうで、飛べなかった。ポケットから、プラスチックの小さな鋏を取り出した。その鋏を、頼まれて、別の部屋へ届けに行こうとしていた。何時もの廊下が、ベニヤの仮設の壁で塞がれていて、その壁に開いた狭いドアを通り抜けてから方向が分からなくなって、直ぐ引き返せば良かったものを、つい、そのまま進んで、こんな所に入り込んでしまったのだ。人の指のように分厚い鋏の刃に触れると、黒く汚れた糊のようなものがこびり付いていて、二枚の刃を開くだけで、かなり力が要った。床の膨らみに刃を当てようとしたが、鋏は、音もなく横に滑るだけだった。

　階段の裏側を見上げると、階段が段ボールで作られているのが、分かった。表側は、木で出来たような色に塗り込められていたが、裏側は、塗り残しの方が多い位だった。試しに鋏を入れてみると、面白いように、刃は、さくさくと段ボールの厚みの中に、埋まっていった。どうせ上れない階段なら、バラバラにして積み上げた方が、まだ役に立ちそうだ。しかし、鋏は、真っ直ぐにしか進まない。切れ目が或る深さになると、鋏を持つ手が突っ掛かって、それより奥へは切れない。そこで鋏を引き戻して、幾つか同じような切れ目を

作って、その間を引き千切るしかない。それを繰り返していると、結局、掌くらいの大きさの紙切れが足元に散らかるだけで、そんなものを積み上げても、足場にはなりそうにない。遂には、階段の真ん中に大きな穴が開いて、また切れ目の端を引っ張ると、その穴より上の階段全体が、頭の上に落ちてきた。紙なので大した衝撃もなく、音さえ立てずに、ふわりと床に着いた。踏み付けると踏み付けただけ凹んで、潰れていった。壁際まで引きずろうと、その端を持って引っ張ると、その持った所だけが簡単に千切れた。それでも、他に何もないからには、それで何とかするしかない。そうしている内に、階段の形は見る影もなくなって、細かな段ボールの切れ端ばかりになってしまった。それを灰色掛かった楕円の下に集めて積み重ね、その上で、足を滑らせずに巧く飛べるかどうか、何度も踏んでみては足の感触を色々確かめた。

　踏む度に、却って滑り易くなる。そんな事なら、いきなり飛んでしまえば良かったが後の祭りだ。段ボールの切れ端は、足元で、粉々に砕けていた。その紙の粉の上で、腰を捻って、ぎこちなく踊りでも踊るように、足を滑らせるしかない。飛べないどころか、踏み出そうとしても踏み出せない。ただ足を滑らせている内に、床に擦り込まれてでもいるのか、その粉の量が少しずつ減って、足元の一ヶ所に集まって来る。そしてそれは、粉のようでもなくなった。では何なのか。右手で摘み上げると、透き通りそうな程薄い生地で出来た袋だった。

その辺りの床が、真っ平らになっていた。躊躇せず、直ぐに飛んだ。腕を振り上げ、左手を、灰色掛かった楕円に叩き付けると、楕円の真ん中の壁が破れて小さな穴が開き、楕円と同じ灰色掛かった砂が、糸のような細い一筋に吹き出てきた。床に零れると、プチプチと弾けるような音を立てて転げ回った。砂が床中に拡がれば、それで足が滑って、全く歩けなくなってしまいそうだ。早速、両手で布袋を拡げて、落ちてくる砂を受けた。袋は、みるみる満たされてゆく。袋の中では、砂は殆ど白く見えた。直に溢れてしまうだろう。砂の更に細かく砕けた粉が、袋から、煙になって舞い上がり、それが目に入って涙が止まらなくなった。その涙が、袋の中に落ちて、砂に混じった。砂は、そのほんの僅かな湿り気で、風船が萎むように、黒っぽくなって縮んでいった。それで砂は、袋から溢れずに済んだ。壁からの砂の筋が途絶えると、袋はちょうど、その黒く濡れた砂で一杯になっていて、袋の口をやっとの事で結ぶ事が出来た。それを床に転がすと、模様の魚が、その袋に食らい付こうと身を捩るように見えた。

袋に受け損なった砂が、床全体に薄く拡がっていて、重心をほんの少し移動させただけでも、転んでしまうかも知れない。丸々と脹れた袋だけが頼りで、その上に身を投げた。そうして、腹這いの恰好で、手と足で床を押しては、腹の下の袋を滑らせ、部屋の中をぐるぐる動き回ってみた。間近に来た模様の魚

達が皆、一旦、向きを変えてから、後を追ってくるようだった。その目の錯覚に追い立てられるように自ずと手足に力が入り、体の動きが速くなって、壁に近付いて曲がり切れず、階段のあった所の向かい側の部屋の隅にぶち当たった。壁は、紙のように薄く、パリパリと音を立てて割れた。

　頭から突っ込んで、壁を突き破った先は、薄暗くて、直ぐ前にまた黴臭い壁があった。腹の下の袋の何ヶ所かが破れて、そこから真っ白な砂が筋になって吹き出ていた。砂は、その狭い空間を直に埋めた。その勢いで、袋に抱き付いたまま部屋に押し戻されるしかなかった。それでもまだ、その壁に開いた穴から、黴臭い砂が部屋に流れ込んでくる。袋の破れ目は更に拡がったようで、袋からの砂も益々勢いを増し、部屋中が砂嵐のようになった。また涙が止まらなくなっているようだったが、それが、何処へ飛ばされて行くのかは分からない。ただ砂は、白いまま降り積もって、もうすっかり床を覆い、四方の壁が、ジリジリと埋まって行くのも見えて、涙の効き目はなさそうだった。天井まで見失われて、完全に砂に埋もれた。それでもまだ、涙は止まらなかった。

　その涙が、一筋の川のように、くねくね曲がって、砂の中を流れて行くのが見えた。その流れの先端を目で追う内に、砂は、透き通っていった。涙の川の中を、砂を全て吐き出しても脹れたままの袋が、殆ど透き通って、魚のように体を拗らせて泳いで行く。袋は直に、流れの先頭に追い付いた。

　その袋の中にすっかり入り込んで、腰を拗らせていた。だから、袋は脹れたままなのだ。模様の魚達が、平面から出て、周りを一緒になって泳いでいるように見えた。誰かが、廊下からドアを開けたかも知れない。それらしい音が聞こえた。振り返ると、開いたドアに人の影が立っていた。暫く、部屋の中を見回すようで、それからドアは閉められた。その間、何も起こらなかった。

　涙は、止まらなかったので、その流れの一筋は、壁など取り払われたかのように、先へ先へと進んだ。その先頭を、袋詰めにされたまま運ばれて行った。魚達も、もう追って来なかった。それでもまだそこは、透明な砂に埋もれた、四角い部屋の中に違いない。

　目を閉じて、目の中に残った砂を全て涙が押し流せば、涙は止まるのではないか。しかし、目を閉じる事は出来なかった。砂の圧力が、それを許さない。袋に詰め込まれたのも、砂に押されたからだろう。いや、果たしてこれは砂だろうか。涙越しに目を凝らすと、透き通る中に、小さな粒が、隙間なくびっしり続いているのが見える。その粒は、砂の形だろうか。涙の一滴一滴が、積み上がって押し詰められ、砂の形に似ただけのようにも見える。川になって流れ続ける涙も、目からではなく、その砂に似た粒から滲み出ているのではないか。この部屋には多分、涙で部屋中を満たし、それでもまだ涙を流し続けなければならない理由がありそうだ。そうして、私を、その涙の中に閉ざし、その溢れ

出る先へと、流し続けるままにしておきたいのだ。（二〇〇二年一月十一日）

＊　　＊　　＊

手形

　通りに面した壁に嵌め込まれた柱時計が取り外され、横に寝かされようとしていた。そうしている間にも、針や文字盤や振り子や歯車やゼンマイまでもを、顔を黒い布で覆った屈強な男達が、乱暴に奪っていった。横にされた時には、ただの古ぼけた箱で、もう誰も見向きもしない。近付くとそれは、かなり大きな、底の浅い正方形の木の箱で、それが時計の外枠だったという形跡はなくなっていた。他の者達が離れて行くのに逆らって、私独り、そこに近付き、その中に、掌から湧き出す白い砂を振り撒いていった。掌の何処から、砂が湧き出すのか。肩に砂の詰まった袋を背負っていて、その中の砂が、肩越しのパイプを通って掌に降り掛かっているらしかった。そんな砂袋を背負っているにしては、重さを感じない。肩越しに背中を覗くと、袋は、規則正しく波打って、絶えず下から上へと盛り上がっている。袋の底が抜けていて、その下から、砂が、勢い良く湧き上がっているとも見える。そうと分かっても、砂は、パイプから

直には蒔かれない。私の掌に乗ってからしか、砂は、袋から出られないようだ。

　木の箱の中が大方砂で埋まると、私は、箱の直ぐ傍らで四つん這いになって、掌を叩き付けては砂の凹凸を均していった。箱の外からでは、腕をいっぱいに伸ばしても、箱の真ん中までは届かなかったが、周りを叩き付ける震動で、自ずとそこも均されるようだった。その日は、それで帰った。

　何日かして、そこを通ると、その木の箱の中が、こぢんまりした綺麗な庭に見えた。側にいる人の話の聞き取れた限りでは、そこは、鋭い目付きの色白の太った初老の女が、ちゃんと設計して、丁寧に時間を掛けて造った庭園と言う事にされていた。その女を、私は子供の頃から良く知っていたが、彼女は、何年か前に死んでいる筈だった。しかし、私は、そこが木枠に囲まれた白い砂の平面にしか見えなくても、その話をすんなり信じた。そうして信じられたからには、私だけは、人目を気にせずに、その中に踏み込めた。

　時計の掛かっていた壁の側から木枠を跨ぐと、その反対側が、丸く脹らんで、ぼやけるようだった。その脹らんで行くのが一段落するのを待って、もう片方の足を踏み入れた。後ろから手渡された椅子を受け取って、そこに腰を下ろし、そこから、庭の脹らんだ奥を見通そうとした。庭の左端に、もう一人、私より脹らみに近い位置に、黒尽くめの痩せた男が、背中を丸めて腰を下ろしていた。私と同じように、脹らんだ方を見ていたが、身を乗り出して腕を突き出し、盛

んに何か指図しているようだった。

「庭はもう、出来上がったんじゃないんですか。」と、私は尋ねたが、声は、届かなかったのかも知れない。私は、椅子ごと腰を浮かし、少し前に出て、男の方を向いてまた同じ事を言った。男は、そっぽを向いたままだった。私の直ぐ前に、そこだけ、小さな正方形に、私の手形の付いていない全く平らな所を見付けた。砂に掌を叩き付けた日、腕を伸ばしても届かなかった庭の真ん中に違いない。そこまで前に出たかったが、余りに綺麗に真っ平らな白い砂を見ていると、足が前に出なかった。私は、椅子を後ろに放って四つん這いになり、その正方形の端まで近付いて、顔を砂スレスレまで降ろして、前を見た。その真っ平らな正方形の向かい側に、男がこちらを向いて、私を見下ろしていた。男は、甲高いが押し殺したような声で、「済んだ」と言って、私との間の小さな正方形の真ん中に、爪先立ちで踏み込み、踵を浮かせたまましゃがんで、その場でゆっくり回りながら、その正方形の中を、掌で隈なく叩いていった。余り間近なので、私は少し後退った。それから男は、そこを後ろに飛び退き、立ち上がって、くるりと後ろを向いて、丸く脹れた方に歩き出した。

真ん中の正方形は、周りとの境目がなくなって、分からなくなってしまったかと見ると、却って際立っていた。その周りの私の手形は、全て外から内に向かっていたが、その中の手形は、どれも内から外に向かっている。決してもう、

真っ平らには直せないだろう。木の枠の中の砂を、外から叩いて回れたら、その震動でまたそこを均せるだろうが、時計が取り外された日に戻れる筈もない。指で均したところで、取り繕った跡まで残して、事態を悪くするだけだ。このまま後退って、庭の外に出たら、私は、或いは私の他の誰であろうと、二度とこの庭に足を踏み入れられないだろう。庭は恐らく、すっかり見失われているに違いない。砂を敷かれただけの通りの一部になって、迷惑がられるだけなのだ。それとも、壊れた庭に塞がれて、ここを通り抜けられなくなっていないだろうか。私は、　庭と通りを台無しにした者にされて、見付かれば、ただでは済まないだろう。

　丸く脹れた方に、まだ男の背中は見て取れる。男と二人で、ここを一から庭に造り直すしかない。男は、私を振り返って言った。

「色々ありますよ。どれにします？」

「別にどれでも。」

「どれか一つに決めて下さい。」

「決められない。」

「知りませんよ。」

「あなたにとっては、もう済んだ事なんでしょう。どうでもいいんでしょう？」

「私にとってはね。でも、あなたにとっては、全てはこれからのようですよ。

それでも、どうでもいいんですか？」と、男の声に段々と力が入ってきた。

「これから？　どうしようもないのに、どう、これからがあるんだろう？どうしようもないなら、どうでもいいでしょう。」と、私は、何とか言い返したが、言葉を交わすのに疲れて頭が回らなくなっていた。

男は、手振りで、丸く脹れた辺りを、幾つかに区切った。私は、その区切られた中に、順に目を凝らしてた。そこから先が、分かれて奥に拡がって、そのそれぞれの中に、正方形に近い木の枠が見えて来た。その、正方形に似てはいるが、正方形でないところなどが、初めはなかなか新鮮にも映ったが、見ている内に、どれも気に入らなくなった。どうでもいいと言っておきながら、どうしても一つには決められなかった。

「分かりますよ。」と、男は言った。「だって、どれも間違ってますからね。いや、間違ってるだけならいいんだが、どれも、直に形を変えて、正方形に似せるのさえ已めてしまうでしょう。それとも、もうお喋りは沢山ですか？」

別に正方形でなくても構わない、と私は思った。どうせ、継ぎ足されるのだ。正方形の脹れた所に正方形を継ぎ足して、正方形になる筈がない。男が手振りで区切った中に、どちらにも属さない隙間を見付けた。私は立ち上がって、逆向きの手形の真ん中の小さな正方形を一っ飛びに飛び越えて、男を追い越し、その隙間に走り込んだ。振り向くと、男は、四つん這いになって、自らが付け

た逆向きの手形に息を吹き掛けて、そこを真っ平らに均していた。私は、足場を失って白い砂の斜面を転げ落ちた。男の示した、正方形に近い木の枠の裏側が、下からずらりと見上げられた。どれも、ぴったり正方形に見えた。上からは、丸く脹れた所と繋がっていて、それで正方形に見えなかっただけか。しかし、あの男独りでは、どうしようもないだろう。砂を撒けるのは、私だけだ。しかし、私は、その砂に埋もれながら、「あの男は、もう砂を撒かなくてもいいのだ。逆向きの手形を消して、そこを元に戻したのだから、男は独りで庭を出て、庭は男独りによって造り直された事になって、初めに庭を造った、鋭い目付きの太った初老の女の事まで、すっかり忘れられてゆくのだ。」と考えた。

ところで、どちらにも属さない隙間だが、あれも、男が示した内の一つに違いない。それに先に気付いていたら、私はどうしただろう。やはりまた、決められずにいただろうか。いや、もう一つあった。私の直ぐ前にあった、逆向きの手形の小さな正方形だ。あそこに飛び込むべきだったのではないか。いや、飛び込まなくても触れるだけでいい。指で均そうなどとしなくても、あの日、背中に背負っていた袋の底から砂が湧き上がったように、あそこから幾らでも砂が湧き上がって、私は、私の庭を何処までも拡げられたのだ。そしてそれを、庭の中心の一番高い所から悠々と見下ろさせたのだ。そうなれば、砂に埋もれるのは男の方だ。違うか？

「違う、違う、あなたがそう出来ないように、逆向きの手形を付けたんですよ。逆向きの手形なんて簡単に付けられますからね。」と、砂を通して、男の声が耳に入ってきた。男が、真っ平らに戻した庭の真ん中の小さな正方形から地面の中を覗き込んで、砂に何処までも埋もれてゆく私の姿を、笑いながら見下ろしているようだった。それなら私は、埋もれているのかも知れないが、砂が湧き上がるかも知れない中心に居るのだ。私の選択は、間違っていなかったのではないか。

「どうしたところで同じ事ですよ。」とまた、男の声が届いたようだった。

「何処からが、同じなんだ？」と、私は、それだけはどうしても知って置くべきだと、何度も聞き返したが、何も返って来なかった。砂の流れる音が急に遠ざかり、それもまた返って来なかった。舌びらの上の、ザラザラした砂の感触だけが、何処までも残るようだったが、それこそ、どうしようもなくて、どうでもいいのでしかない。（二〇〇二年一月十三日）

＊　　＊　　＊

パーティー

ずっと、水を飲んでいない。何時飲んだかも忘れたが、喉は渇かない。だから、飲まずにいられる。体もすっかり軽くて、渦を巻く熱い風の中に、静かに浮いているようだった。

小さな鳥小屋の横の、全く手入れのされていないような薔薇の生け垣を潜ると、蛇口は、直ぐそこにあった。そこは、灰色の屋根の木の家の裏手で、少し朝日が当たるだけの、何時も暗い、誰も立ち入らないような所で、私独りしか居なかった。鎖に繋がれた、尻尾の短い白い小さな犬が、哀れむような目で私を見ている。しかし犬は、私よりずっと長い事、水を口にしていなくて、歩くのはもちろん、しゃがむ事さえ出来ずに、四つ足を突っ張ったままでいるしかないのが、私には分かった。地面の黒土は湿っていて、犬に近付けば、きっと足跡が残るだろう。足跡を付けたくなくて、私は、犬に近付けなかった。犬の見ている前で、私独りが水を飲めば、水の匂いだけを嗅がされる犬は、水に焦がれて、そのまま干涸らびるだろうか。蛇口の直ぐ上の、木の格子の嵌った窓から、台所が覗けた。家に入って、そこの蛇口を捻るのはどうか。しかし、水分を含まない私の吐く息が、家の中の空気を汚すだろう。足跡を残したくないのと同じで、家に入っては行けなかった。

私は、家と犬に背を向けた。それから、そこに跪き、上に向けた口を大きく開き、その中に手を突っ込んで、口の中に蛇口があるかのように、それを捻る

真似をして、そこから噴き出した水を喉の奥に流し込んだ。それから辺りを見回すと、そこは、強い日差しの照り付ける広々とした平らな硬そうな砂地で、私は、その砂地の隅に最近設けられた水飲み場の蛇口を捻って、水を流していた。しかし、眺めるだけで、口を付けようとはしなかった。同じ背格好の日焼けした者達が、歓声を上げながらやってきて、次々に蛇口を銜えて、喉を鳴らして水を飲んだ。蛇口は、全部で七つ並んでいて、初めに水を飲んだ七人の後ろに、一人ずつ順番を待っていたので、私を入れれば十五人がそこに居る。後ろの者達も、直に蛇口を銜えた。私は、彼らの誰より腹一杯飲んだような、飲み過ぎて腹が苦しいような顔をして、水に触る事もなく、真っ先にそこを離れ、砂で滑り易い乾いた長い坂を降りていった。直に、彼らの笑い声も、後ろから聞こえてきて、同じ道を降りてくるのは分かったが、道は、幾つにも分かれて、暫くして振り返ると誰も居なかった。

　私は、小さな船着き場に来ていた。屋形船が入って来て、肘や膝が擦り切れていたり、あちこち綻びの目に付くような服を着た客達が、パラパラと降りた。それで、今日はもう終わりのようだ。客は見向きもせずに通り過ぎたが、そこにも蛇口があった。船を操っていた、青地に灰色の筋の入った同じ服を着た三人が、残った。その内の一人が、蛇口を捻った。水は、細く長く延びて、直に海面に落ちた。誰もそこに口を付けようとも、水を汲もうともしなかった。暫

く流しっぱなしにされて、蛇口は閉められた。三人は、尚も、船の細かな所を点検するようだった。
「この水を飲ませて貰えませんか？」
「今日は、終わりだ。」
私は、勝手に蛇口を捻った。
「なんて事をするんだ。こりゃ、今日は、家に帰れんな。」
彼らは、寄り集まって蛇口を分解し、その先の水道管のバルブまで分解し、暫く相談してから、水道屋を一人、電話で呼び付けた。四人の作業が進む程、大掛かりになって行くようだった。
すっかり夜が更けて、やっと水道は復旧した。蛇口を捻ると、青光りする水が出て、海に落ちると金色に輝いた。水は、細々とだったが出しっぱなしにされた。それは、海に直に流すための水で、決して触れてはいけないのだった。水は、海水に混ざる事なく、海面を薄く拡がっていった。私は服を着たまま海に飛び込み、唇を海面に沿わせて、その水を啜ろうとした。海面は揺れていて、海水ばかり飲んだ。その重みで、体は沈んでいった。
身を切るように冷たい海底では、物好きにも、五人のダイバーが、カクテルパーティーを開いていた。そこは、五人だけの秘密の場所で、電気まで引かれ、井戸も掘られ、蛇口からは真水が出る。彼らは、私が酸素ボンベを背負ってい

ないのを怪しがったが、私が、一人から渡された特殊な容器に入ったカクテルをチューチュー吸うと、すっかり私を仲間に加えたような態度を取った。しかし、そのカクテルと称するものは、私には、ドブ川の匂いのする、ひどく不味い水でしかなかった。

　五人の内、一人だけが女で、私がその女と意気投合すると、男四人は、私を相手にしなくなった。女にドブの水を何杯か飲まされる内に、男達の会話が聞き取れるようになってきたが、聞けば聞く程、全く私の立ち入れない話題と分かるだけだった。直ぐにも彼らのパーティーを終わらせたくて、もう真夜中だと言ったが、何の効き目もなかった。私は、女に、真水を飲みたいので、蛇口を捻っていいかと尋ねた。女が、急に顔を曇らせ、目をキョロキョロさせて私の言った事を男達に告げると、男達は、私の体を押さえ、テーブルの脚に私を縛り付ける積もりで、ロープまで取り出した。しかし、争う内に、男達は、一人また一人と姿を消していった。時間は掛かったが、私は、四人の男を全てやっつけてしまった。彼らの体が、海流に乗って流れ去って行くのが遠くに見えた。女の方に向き直ると、女は、灯りを消した。私は、足が滑って体が浮き上がり、海流に乗って男達の後を追うしかなくなった。喉がカラカラで、ヒリヒリと痛みさえ感じた。ドブの水のせいに決まっている。いや、果たしてあれは水だったのか。乾いた泥の粉でも飲まされたのではないか。男達の姿は見失わ

れ、どちらを向いても真っ暗だった。私は、喉の奥に指を突っ込み、飲まされたものを吐き出した。やはりそれは、灰色の粉で、塊になって口から転げ出た。水の中に吐き出されると、パッと拡がって、キラキラ輝いて昇っていった。それは、細い一筋の道になり、私は、それを辿って、月明かりに照り映える静かな海面に出た。

　私は、海面に唇を沿わせ、上っ面の真水だけを、啜る事が出来た。そうする内に、船着き場が見えて来て、水を出しっぱなしにしている蛇口も見えた。その脇に、青地に灰色の筋の入った服を着た男が、一人だけ居て、私に向かって、何かを指差す仕草を盛んにした。私は、後ろを振り返った。鏡のようだった水面が、ザラザラして見えて、硬い灰色の砂地が続いているようだ。もちろん直ぐに、水を啜るのは已めたが、それ以上何が出来る訳もなく、そのまま何もせずにいると、全身が痺れて意識が遠のいた。

　気が付くと、私は、大きなパーティー会場の真ん中に、両腕を前に突き出して、脚を肩幅に拡げて立っていた。両腕とも、肘の直ぐ先で切断されていて、切り口に蛇口が取り付けられていた。客達は、私の両腕の蛇口を捻っては、右腕から出る水と、左腕から出る水を、好みに合わせてブレンドして飲んでいた。その割合について、意見を述べ合う事はなく、銘々黙って試飲しては、好きな味を作っている。しかし、そう何時までも、真水を供給出来るだろうか。今に

も、私の汚い血が混じりそうで、気が気でない。
「何だか、心配そうな顔をしてますね。大丈夫ですよ。もう、あなたの体には血は流れていませんから。」
私は、自分の体を見た。心臓が透けて見えて、その心臓もガラス容器のように透明だった。そこから、水が送り出されて尽きない。
パーティーが終わり、私は、独り残された。誰かが、私を何処かへ運んで行ってくれない限り、ずっと、ここに居るしかないようだ。腕を曲げて、出来れば両腕の水を飲んでみたくなった。もしも、肘の直ぐ先ではなく、手首にでも蛇口が付いていれば、互いの蛇口を絡ませて巧く蛇口を捻り、出て来た水を飲めただろう。しかし、ギリギリ、蛇口が私の口の届かないように、ちゃんと測って、腕は切断されたようだ。（二〇〇二年一月十五日）

* * *

双子

傾いた太い松の幹の陰に隠れて、私は、真っ暗な草原を窺っていた。背中にずっと冷たい風が当たって、体は冷え切った。草原の奥の方で火が焚かれ、そ

の周りを、四、五人の細長い人影が、素速く動いた。私は、肩の上から弧を描くように右腕を伸ばし、その火を全て、手の中に掴み取った。左腕は、尖った鉄の棒になって、松の幹に突き刺さっていた。直ぐに、真っ暗な草原を全力で駆ける、火を奪われた者達の足音が、迫って来る。私は、手の中の火を、一口に飲み込んで、後ろを振り向いた。足元の石ころが、切り立った崖を転げ落ちる。私は、両腕を振り上げ、踵だけで、その崖を滑り降りた。踵は尖っていて、鉄のように硬く、火花を散らして、崖の岩肌を削り取って行く。

　真っ暗な砂浜に降り立つと、直ぐにそこは、赤く照らされた。振り返ると、崖の途中が一ヶ所、燃え上がっていた。四、五人の人影は、崖の縁に立ち尽くし、白い息を吹いて、それを見下ろしている。その脇の松の幹には、私の鉄の棒の左腕が、まだ突き刺さっていて、そこから、崖の下の私の肩へと繋がっていた。左腕を振り上げたまま、私は、波の音を頼りに、海に向かった。砂浜は、凹凸が激しく、直ぐに砂に足を取られて、何度もつんのめった。左右同時に、両膝の骨が折れる音がして、私は、そこに跪いた。火の明かりが、後を追うように届いてきて、私の真ん前に立ち塞がる大きな岩を照らした。岩の下の方に、小さな穴が開いている。私は、左腕を、崖の上から、その真っ暗な穴に向けて、振り下ろそうとした。左腕は、松の幹から抜き取られ、高い空中で、強い横風に吹き殴られ、軋むような風を切る音を立てて、左右に激しく揺れた。恐らく、

穴には命中しない。力を抜いて、腰を、砂に落とした。左腕が、ずっと高い所で、ブルブルと震えるようだが、放って置くしかない。私は、穴を見据え、唾のような小さな火を、そこに吐き付けた。入れ違いに、穴から、翼を拡げた二羽の小鳥が、飛び出てきた。小鳥は、雌で、双子だった。直ぐにそれを見て取れたのは、私の目玉が、鳥達に狙われているからだ。鳥達は、岩の穴の中で、私の目玉を啄む機会を、ずっと窺っていたに違いない。咄嗟に目を閉じた。私の吐いた穴の中の火が、瞳に映って、鳥達の格好の目標になっていただろう。それから、私は、あらん限りの力を込めて、左腕を震わせた。左腕は、ずっと高い所で、風を掴んだ。その浮力が、私を立ち上がらせた。浮き上がって砂地を離れようとする足が、岩の縁に掛かると、足は、自ずと岩を駆け登った。

　それでも、鳥達は迫っていた。羽ばたく音と共に、耳の直ぐ後ろを鋭く冷たい風が掠め、私は急き立てられた。岩を登り切って、また唾のような火を一つ、岩の先の空中に向けて吐くと、そこから細く白い道が始まり、くねくね曲がりながら下って、波打ち際を左へと逸れていた。その道を下るしかないのか。直ぐに、鳥達に先回りされてしまいそうだ。私は、右へ飛んで、道のない急な下りの岩肌に、硬い踵を突き立てた。折れていた両膝の骨が、岩場に鉄の杭を打ち付けるような音を立てて、繋がった。私は、踏ん張って振り返った。鳥達を打ち払おうとする左腕が、空を切っていた。鳥達は、私の頭の上を、私を追い

越して飛び過ぎた。その後ろ姿は、私の吐く火よりも明るく輝いた。その姿だけを見詰めて、私は後を追った。膝の骨の継ぎ目から、グリグリと力が盛り上がってきて、足は少しも疲れず、鳥達との距離をグングン縮めた。

　鳥達は、ぴったり並んで、四階建ての病院の建物に、正面玄関から飛び込んだ。全ての窓が開き、そこから埃が舞い上がったかと思うと、窓は、鳥と同じ色に一斉に輝いた。私は、つんのめるように立ち止まった。その輝く窓辺に、患者らしき人影が一つずつ現れ、空に向かって赤い四角い紙を翳した。私は、大声で、飛行機を折るようにと叫んだ。彼らは、赤い紙で飛行機を折って、またそれを手に持って空に翳して、次々に窓から飛び降りた。病院は、周りを切り立つ崖に囲まれていて、誰一人、助かる見込みはない。崖のあちこちで、小さな火が、ぽつぽつと燃えた。それ以上に、私の膝が、熱く燃えているようだ。私は、両手で別々に地面を引っ掻き、そうして掘られた二つの穴に、折った膝をこじ入れて、冷たい地面に膝の熱を逃がした。病院の正面玄関から、二羽の鳥が、またぴったり並んで飛び出てきて、真っ直ぐ私の目玉に向かって来る。両膝は、地面に埋まって冷たく固まっている。「目玉を抜き取って、こっちに持って来い」と、崖のあちこちで燃えるままの火の中の者達が、一斉に叫んだようだった。私は、目前の黄色い嘴に向かって、静かに目を閉じ、両腕を拡げた。

私の瞼を突き破った鳥は、私の目玉を嘴に銜えたまま、右目のは右の方に、左目のは左の方に、その飛んで来た勢いで激しく身を捩った。二羽の雌の双子は、その引き延ばされた胴体を、私の左右の腕に蛇のように絡み付かせ、私の両腕を軽い翼に変えた。それを振り立てると、私の体は、真っ直ぐ上に舞い上がった。崖を燃やす火が、少しずつ拡がって、殆ど崖全体を覆い、更に立ち上って、病院の建物を包んだ。直に、どの窓からも、捩れた棒のような長い火が噴きだし、それが全て鎮まるまでを、私は、冷たい空から見下ろした。燻るばかりになると、もう空は白んでいて、私は、綺麗に舗装された真っ青な道に降り立った。そこを歩いて行くと、「目に嘴を生やしてる」と言っているのが聞こえてきた。指でなぞると、両目とも、反り返った炎のような形に、それは突き出していた。私は、立ち止まらずに、何度も何度も、それをなぞった。道は、何処までも続くようだった。（二〇〇二年一月十七日）

＊　＊　＊

地面

ここへ来たのは、ここの地面を掘り返すように命令されたからだ。何処をど

のように掘るかの見取り図の紙を、ポケットの中にまさぐった。紙は、カサコソと音を立てた。それから、肩に担いでいた、誰でも真っ直ぐに溝を掘れる、口を開けた箱のような形の鍬を、足元に下ろした。その鉄器が、地面に触れると、そこの地面が少し赤く見えた。鍬の影のようでもある。鍬を持ち上げてみると、真四角の跡が少し残って、そこから、赤味が、円く滲み出ていた。私は、鍬を担ぎ直し、しゃがみ込んで、その真四角の跡を撫でた。地面は、ツルツルしていた。軽く拳固で叩くと、地面は硬いゴムのようで、拳を微かに跳ね上げた。その下の地面の色は変わらない。表面は、何処か透き通っているようだ。幾ら強く叩いても、拳は、跳ね返されるばかりだろうか。そのために、こんな変な形の鍬を持たされたのだ。しかし、勝手に地面に跡を付けていい筈がない。その跡の付いた所だけが、弾力を失って、なかなか元に戻ってくれそうになかった。

　私は、立ち上がって、ポケットから紙を取り出した。真っ直ぐな細く黒い線が、縦横に何本も垂直に交わっていた。前を見渡すと、ただ半透明な地面が、薄明るい中に、平坦に続いているだけで、目印になるものが何もない。それなら、紙の上の真ん中を、この地面の真ん中辺りに、勝手に定めるしかないのか。よく見ると、地面は、私の足元からずっと、内側に反っているようで、私は、巨大な凹レンズの縁に居るようだった。それなら、その一番凹んだ所が真ん中

で、まだまだ私は、そこまで歩かなければならない。それとも、ここを紙の縁の何処か一点と定めて、ここから、仕事に掛かっても構わないだろうか。この鍬なら、一度地面に突き立てられたら、後は、力は要るだろうが、それをそのまま引っ張って行くだけで、真っ直ぐな溝が掘れるに違いない。曲がろうとしても、曲がらせてくれないだろう。私は、後ろを向いて、凹レンズの鋭利な縁に鍬を振り下ろした。長く延びて甲高く震える音が、響いた。柄を持つ腕が痺れ、鍬の四角い刃が、二ヶ所欠けただけで、そこは、疵一つ見当たらず、綺麗なままだった。

　縁だけが、特別に硬いのだ。やはり、地面の真ん中まで進むしかない。しかし、こんな、緩やかに窪んでいて、ツルツルして弾力のある地面を、どうして歩いて行けるだろう。最初の一歩からして、私は、直ぐにまた、縁に揺り戻されてしまいそうだ。たとえ、そうならない足の運びを身に着けたとしても、決して、真っ直ぐは歩けないだろうし、真ん中に行き着こうとする程、その周りを、グルグル回るばかりだろう。いや、そもそも、誰に命令されたか知らないが、凹レンズとも見紛うこんな綺麗な地面を、なぜ掘り返して回らなければならないのか。このまま眺めていて、どうしていけないのか。

　私は、凹レンズの真ん中辺りから目を離さずに、縁に沿って進んだ。見る位置を変えれば、何か違って見えてくるかも知れない。縁が、緩やかに弧を描い

て行くのは、予想された事で、私は、そこを踏み外さないように、一歩一歩、爪先でそれを探り取るように進まなければならなった。その内に、真ん中の、目を離さずにいる辺りが、円く光って見えてきた。遠くから眺めているからいいようなものだが、もし、あそこに居て、いきなり足元から光が湧き起こって、それに取り囲まれたら、私の体など、光にすっかり溶けて、消えてしまうに違いない。それとも、今からでも遅くないから、歩けないなら腹這いになって滑ってでも、そこに行って、光に呑まれるべきだろうか。担いだ鍬の重みが、改めて肩にのし掛かる。鍬を投げ出せば、滑って行ける。

　しかし、何時か、誰かが見付ける。そうして、それが私に命令した者の耳に届けば、私のやった事は、ひどく憎まれるだろう。何人もの者達が遣わされて、この綺麗な凹レンズは、散々に傷付けられ、ツルツルした半透明の表面など、跡形もなく削り取られるに違いない。光に埋もれた私の体も、同じ目に遭うのだ。

　それで私は、地面に対して、何もしなかったと言えるか。私が災いを齎したようなものだ。いや、私がどうしたところで、どうせ私の後にまた人が送り込まれてきて、いずれは、今見えている姿は、跡形もなくなるに決まっている。つまり、私は、ここに辿り着くべきではなかったのだ。私が、ここを見付けられなければ、次に来る者は、私の踏み迷った足跡に惑わされ、ますますここを

見付けられなくなるだろう。しかし、後の祭りだ。ここに真っ直ぐ辿り着く足跡を、消しに戻る訳にも行かない。消そうにも、消そうとした跡が醜く残るだけだ。

　結局、私は、真ん中の光を見ながら、レンズの縁を先に進むのを、已めなかった。いや、本当に先に進んでいるだろうか。凹レンズの先の、薄暗い景色が、少しも動いていないようだ。それとも、ただ薄暗くしか見えないので、そんな気がするだけか。いや、その更に先の空の形までも、ずっと変わっていない。空の上には、暗く長い影が、庇のように覆い被さっていて、その影の向きも、変わらないままだ。では、私が進んだように思えただけ、凹レンズの地面全体が、逆方向に回ったのか。私は、動いていないのか。

　真ん中の光は、何時の間にか収まって、真ん中は、低く見窄らしく見えた。私は、鍬を、地面と反対側に、出来るだけ遠くへ放った。それから、そこに蹲って、額を、凹レンズの縁に打ち付けた。縁は、やはり回っていた。額が割れて、そこから流れ出た血の半分が、一直線の細い一筋を、地面の真ん中に向かって走らせた。それは、見る間に、地面のぴったり真ん中に行き着いて、止まった。私は、それを、地面スレスレの片方に目で見ていた。

　縁から溢れる方の、もう半分の血を、私は、掌に受けていた。もう片方の目が、それを間近に見て取っていた。もう今にも溢れそうで、どうしたらいいか

分からない内に、血は掌から溢れた。遠くに放った筈の鍬が、直ぐ下で、口を開けて、それをボトボトと受けている。その箱のような形の中は、私の頭より広いので、そこを血が溢れる事はなさそうだ。しかし、もう片方の血が、細い一筋だけで、レンズの真ん中で止まっているのが、救いだ。

　いや、同じ額の割れ目から、ぴったり半分ずつの血を分け合っているのだ。どうして、止まっている事があるだろうか。それは、ただ、地面スレスレから見ているから、止まっているように見えるだけで、鍬の中と同じ量の血を流しているのだ。それでも、それが、滞りも捩れたりもしない一直線に見え続けるなら、それはまだ、地面の凹レンズの一番低い真ん中に、届いていないのだ。まだずっと遠くだろうか。それを見届けるまで、私の頭は、確かなままでいられるだろうか。（二〇〇二年一月十九日）

*　　　*　　　*

鞄

　小さな机を挟んで、二人の女が向かい合っていた。二人とも、机に目を落としたまま、じっとしている。暫くして、年取った方が、ゆっくり立ち上がって

背を向け、そこに書き込まれた文字でも読むように、自分の掌を覗き込んだ。掌は、高い月の光を受けて、少しだけ白く光った。腰掛けたままの若い方の女が、机の上に真っさらな紙を拡げた。立ち上がった女は、掌を見詰めたまま、二、三歩、奥に進んで、その奥の方を向いて、掌を、ゆっくりと耳に近付けた。そうして、奥の方からやって来る音を聞き取るかのようでもあったが、掌の角度は、白く光るままに上に向けられていた。私は、その女と向き合う方へ回り込もうとした。

「その先はありませんよ。」と、女は、私の顔を見て、少し強い調子で言って、直ぐにまた、耳の側の掌に目を戻した。掌は、耳から少し離れていて、横目でなら、何とか女の目に入るようだ。私は、立ち止まって、先を見た。先があるのかないのかは、分からなかった。踏み出してみれば分かるだろうが、もし先がないなら、そこから何もない所に転落するしかない。女は、もう片方の掌を、顔の前に持って行って、何か呟いた。今度は、確かに、そこに書き込まれた文字を読むようだった。垂直に立てた指を揃えていて、その掌はすっかり影になっていた。それから、女は、はっきりした良く通る声を、途切れ途切れに出した。机に向かうままの女が、それを聞いて、紙に書き取るようだった。硬い机を打つ鉛筆の音が、微かにカタカタと聞き取れた。私は、立っている女の後ろに戻って、机の上を見た。紙は、机に覆い被さるようにしている

女の影になって、暗くて、何が書かれているか、とても読めそうにない。私は、自分の掌を月の光に翳してみた。掌は辺りの暗さに、土気色に溶けるままだった。

「よくそんな暗い中で、書けますね。」と、私が言うと、女は顔を上げ、微かに私に頬笑みかけた。その間も、鉛筆の音は、カタカタと鳴り続けた。立っている女の声が途切れた。鉛筆の音は、暫く続いてから止まった。すると、女の声でも鉛筆の音でもない、途切れ途切れの籠もったような響きが、聞き取れた。それは、私が足を止めた奥の方からのようだった。また、女が声を上げ、鉛筆の音が始まると、その響きは、それらに遮られて、全く聞き取れなくなった。私は、耳の底に残ったその響きを、頭の中で反復させた。聞き取れた通りを、頭の中に響かせる事が出来たと思えた。すると、その響きは、聞き取れたりて、幾つかに刻み分けられ、それから更に研ぎ澄まされる一方で、紙より薄い小さな刃が、音も立てずに軽やかに、頭の中をクルクル回っているようになった。

少しでも頭を動かせば、その刃は、頭蓋の内側を、紙よりも薄く、しかも何の痛みも齎さずに、削り取るのではないか。

女の声が途切れ、鉛筆の音が、暫く続いて止まった。するとまた、籠もった

響きが、途切れ途切れに、耳に届いた。しかしそれは、耳の中で、ナマの音のまま、一瞬の内に研ぎ澄まされた。それでもう、私は、両耳の奥深くまでを、抉り取られたかも知れなかった。それきり、音は途絶えた。また、女の声が始まって、鉛筆の音が鳴った。それが聞き取れるなら、耳は無事だろうか。私は、右手にぶら下げている薄っぺらな黒い革の鞄に気付き、私には私の用件があり、そのために、二人の仕事が終わるのを待たされているのを思い出した。

「まだ、大分掛かりそうですか。」と、私は、声を上げている女の、細かく脹れたり萎んだりする、厚みのある小さな背中に向かって聞いた。書いている方の女が、顔を上げて、私を見た。やはり、微かに頬笑んでいるようだったが、じっと私と目を合わせている間に、その微笑みは消えて行くようで、それと一緒に、女の若さも消えて行った。声を上げていた女が、口を結んで振り返った。口元は、微かに頬笑んでいたかも知れない。机の女と私とを交互に見てから、クリッとした目で、悪戯っぽい表情を作った。それは、少し若く見せた。二人の女の歳は、似たようなものかも知れない。鉛筆の音が、暫く続いてから止まった。それから、声を上げていた女が、机の方に近付いて来た。それで初めて気付いたが、女には、耳朶がなくなっていた。そして、耳には、女の拳なら入りそうな程の穴が開いていて、近くで覗き込むと、その奥深くまで抉り取られているようだった。

「それ程でもなかったでしょう。」と、女は言った。
「待った時間ですか？」と、咄嗟に、私は聞いた。
「ええ。」と、女はごく普通に答えた。それなら、私の声も、女には普通に聞こえているのだ。机の女が、嬉しそうに、背筋を伸びながら立ち上がった。背は、もう一人より高かったが、すらりと痩せていて、殆ど子供のような体付きだった。耳を抉られた女の方が、ずっとずんぐりしていた。二人には、親子程の歳の違いがあるように見えてきた。その娘の方が、勢い良く笑い声を弾ませながら、机の上の紙を取って、私に差し出した。私が、それを受け取ると、もう一人の女の姿は、私が来た道を下って、もう小さくなっていた。若い方もそれに続き、直ぐに追い付いて、当たり前のように何かお喋りを始めた。その声と足音だけが、私の耳に入った。
　私は、紙に書かれたものを見た。それは、それを書く時にカタカタと鳴った鉛筆の音を、書き写したもののように見えた。それなら、若い方は、ずっと仕事をする振りをしていただけか。もう一人は、何のために声を出していたのか。私は、紙を持ったまま、女が立っていた所まで進んで、その奥を見遣った。やはりその先は、何もないようにしか見えない。真後ろから緩い風が吹いてきて、足場が悪いのか、それだけでも、前に押されるようで、少し踏ん張らなければならなかった。紙が風に揺れて、震えるように波打って、ピリピリと鳴った。

私は、慌てて鞄の口を開け、紙を中に仕舞った。それは、測ったようにぴったり収まって、私は、鞄の口を締めた。その締める音が終わると、後ろの下の方から届いていた、女の声と足音が、已んでいるのも分かった。

　すると、紙に書かれたものの形が、隅々まで満遍なく、コツコツと刻み付けられるように、頭の中に浮いて出た。それに気を取られる内に、風に背中を押され、私は、女に先がないと言われた方へと、一歩、踏み出してしまっていた。

　いきなり、初めから研ぎ澄まされた音が、紙より薄い刃のような姿で、私の前に、そそり立った。当然、それは、耳の中で軽やかに回ったのとは比べものにならない程、大きかったが、同じものだった。そして、それは、紙のように巻かれていった。私の耳を狙っているのは、明らかだ。頭の中に浮き出たままの形が、鉛筆の音ではなくなった。鉛筆の音でなどある筈がない。どうして、そんな風に見えたのか分からない。それは、音になるのを待っていた。紙のように巻かれたものの先端が、耳に切り込んできた。私は、途切れ途切れに、ギリギリまで張られた声を、奥に向かって、ピストルの弾のように、打ち出さなければならなかった。一時でもそれを已めれば、頭の中に浮き出た形は破裂して、私の頭を、吹き飛ばすだろう。頭の中と同じ形が、端から順に、私の何処までも届きそうな声によって、書き付けられ、私の前にそそり立って行く。その書き終えられた時が、私の最期なのだ。月の光は見失われていたし、掌は何

の役にも立たなかった。（二〇〇二年一月二十三日）

*　*　*

抜け殻

急に食べ物を扱う事になったので、手を洗うために、独りだけで部屋を出た。両側に高い壁があり、ずっと上の方に屋根が突き出てはいたが、外の冷たい風を顔に真面に受けて、涙が滲んだ。水が、右側の壁の一ヶ所の高い所から、その下のコンクリートで出来た古い大きな生け簀に、凄い音を立てて、勢いよく落ちてくる。その直ぐ先の石段の手前に、水道の蛇口が、ひょろりと地面から突き出ていて、先に、女が手を洗っていた。近付くと、女は、水を出しっ放しにして場所を譲った。そこはちょうど日陰と日向の境目で、二、三歩下がった女は、いきなり高い陽を受けて、その丸みを帯びた輪郭は、暖かく燃え立つようだ。辺りはずっと黒っぽい地面で、水浸しで更に黒くなっていて、輝く女の全身だけを、そこに浮かび上がらせる。笑顔で頬が丸く盛り上がり、三日月型の濃い影が二つ、鼻の両側に出来て、顔を切り裂くようだった。

私は、前屈みになって、水に手をやった。水は日陰なので、目が慣れるまで、

水は暗かった。目が慣れると、水を当てて揉み合わせている両手の下に、真上を向いて口を開けた、女の顔があった。余りに大口を開け過ぎて、顔はクシャクシャだった。そこまでがギリギリ日向で、女の顔は、真上から陽を受けるままだ。水は、私の手でバラバラに撥ねて、女の顔には、飛沫一つ掛からない。寧ろ、しゃがみ込んだ姿勢で無理に伸び上がった、細い背中の方が先に濡れて、みるみる服の色を濁らせた。そうして見直すと、女の顔はどちらかと言うと浅黒くて、唇も歯茎も口の中も黒っぽくて、綺麗に並んだ歯だけが、今にも零れそうに、真っ白に輝いている。私は、食べ物を扱うためではなく、この女の歯に触るために、手を洗いに来たのかも知れない。それなら手は、食べ物を扱うより、ずっと念入りに洗うべきだ。

　そうしていると、女が、自らの人差し指を、上の前歯に当てた。すると、その歯は、陽の当たる黒い地面の方に、大きく跳ね飛んだ。指が、順に歯をなぞると、上の歯は、次々に口から飛び出して行った。歯茎を剥き出して、下の歯にも素速く指を這わせ、歯は、見る限りでは、すっかりなくなった。口の奥の方は、影になって見えないので、或いは、奥歯だけは、上下左右に、一本ずつくらいなら残っているだろうか。

　それでもまだ、女は、大口を拡げて、私にクシャクシャの顔を向けるままだった。そこに私が手を突っ込んでも、邪魔にならないように、女は、歯を取り

去ったのだ。それなら私は、女の口の中に手を突っ込むために、手を洗いに来たのだ。それには、まだまだ私の手は汚れているようで、揉み合わせる手に力が込もった。女はもう、びしょ濡れで、体中から止め処なく雫が垂れている。反り返った喉元までヌラリと濡れていたが、顔だけは、乾いたままだった。ただ、風のせいか、真上から来る陽の光のせいか、目尻だけは、涙の雫が溜まって、今にも筋を引きそうだった。その顔を、女は、細かく左右に揺らした。溜まった涙を、そこから顔の外に、一遍に振り落とそうとするらしい。びしょ濡れの手では、涙は拭えないようだ。しかし、目論見は外れて、涙は、こめかみを伝って、両方の耳の方へと零れ出た。その涙の筋が、肌を溶かすように、そこに深い溝を刻み、それは更に、じわじわと拡がり出した。涙どころか、それに続いて目玉まで、耳の方に流れ出そうだ。まだ、顔をクシャクシャにして、頬の肉が目の方に迫り上がっているからいいようなものを、口を閉じて、皺が伸びてしまえば、忽ち目玉は、転げ出てしまうに違いない。

　女はまた、指を口に持って行って、歯の抜けたばかりの窪んだ所を、指先でなぞった。すると、そこに、ぽつぽつと小さな白い点が浮かんで、また、歯が生えて来そうだった。それらは、見る間に盛り上がってきた。私は慌てて、両手の甲と甲を素速く合わせ、指を揃えて、女の口に手を差し込んだ。冷たく柔らかい女の舌ビラが、私の右手の指の腹に、ぺたりと張り付いた。左手の指先

は、口蓋の硬さを感じ取った。両方の指の根元に、尖った物が当たる。もう次の歯は、はっきりその形を示している。

　真っ直ぐ一筋に戻った水が、私の手の甲と甲が合わさる所に当たった。水はそこで撥ねて、女の顔に掛かり始めた。私は、それ以上、水が女の顔に掛からないようにと、力任せに、その合わさった両手の間を拡げようとした。すると、もう開く筈のない女の口が、顎でも外れるように更に開いて、手の甲と甲の間に出来た隙間に、水を落とし込む事が出来た。水は、真っ直ぐ、暗い女の喉の奥に溜まっていった。

　拡がった女の口は、それで留まらずに、何とはなしに更に開いた。私は、手を、女の口から外そうとしたが、歯が邪魔になって出来なかった。水がごぼごぼと音を立てている口の奥から、何かを吸いたがっているような、尖った小さな唇が、クルクル回りながら上ってきた。陽に当たると、それだけが、ピンク色をしていた。

　女の顔は、すっかり上と下に裂けていた。それはもう顔と言うより、皺寄せされた皮膚でしかなかった。そして、女の歯は、私の指の根元に食い込み、私の両手の鉤型に曲げた指と、女の上顎下顎が、ぴったり組み合わさって、どうにもそこから手を放す事は出来そうにない。私はそのまま腕を引きずられ、両手は地面に着いた。女の喉の奥が脹らんで、その深い水の中から、尖ったピン

クの唇の持ち主の、裸の全身が、伸び上がった。真っ白な薄い胸が反り返り、陽の光を浴びて、私の直ぐ目の前で恐ろしい程に輝いた。私は、両腕を斜めに地面に突っ立てて、目をグリグリと見開いて、それを見上げるしかなかった。目を閉じようにも、その胸を輝かせる日差しの熱で、瞼は焼き焦げていたのかも知れない。

　それもまた、女に違いなかった。それは、黒い濡れた地面を、私に背を向けて、すらりと伸びた脚を、しなやかな動きで前に送って、先へと進んで行った。急に日が傾き、日向と日陰の境目が、その女の後を追った。境目は直ぐ追い付いて、女の足元に留まった。女は、更に先へ先へと動いて行く日向へ踏み出して、まるで、陽の光を攫って、私からそれを、何処までも遠ざけて行くようではないか。

　蛇口の水は、何時の間にか、涸れていた。私の周りの黒い土もすっかり乾いて、表面に白っぽい粉を吹くようだった。両手でしっかり押さえ付けている、女の脱け殻の中でも、水は、今にも干上がってしまいそうだった。その喉だった窪みの底に、少しだけ水が溜まっている。私は、乾いた唇を押し付けて、その水を啜った。気味の悪い程冷たくて、錆びた鉄の味がして、舌ビラをピリピリさせた。振り返ると、壁から落ちる水も、生け簀の水も涸れていた。日向は遥かに遠ざかって、高い陽を受けた女の小さな尻は、もう点にしか見えなくて、

揺れる事もなかった。

　冷たい風にずっと晒されていた私の腰は、すっかり固まってしまったようで、全く動かせない。抜けた女の歯が、風で目の前をコロコロと転がって行く。それによって、地面の表面の微かに削られた所からだけ、僅かに水が滲み出すようだった。一方、私の両手の肉に食い込んでいる歯は、私の腕を、土の下へと引っ張り込もうとしている。女の脱け殻が道連れなら、何かの慰めにでもなるのか。しかしそれも、乾き果てて、薄く剥がれながら、端から順に細かく破れて、ハラハラと、転がる歯の後を追って行ってしまった。遥か先の女の後ろ姿が、右か左かどちらかに向きを変えたようで、それから直ぐ、それは日向と共に消えて、もう何処もかも真っ暗だった。（二〇〇二年一月二十五日）

*　　　*　　　*

音

　真上から強い陽が照り付け、足元は傾いていて焼けるように熱く、石ころがゴロゴロしていた。遠くに見える黄色い禿げ山に向かって、私は、鉄パイプで出来たベッドを引きずっていた。しかしもう、疲れて先に進めない。そんな時

のために、わざわざベッドを引きずっているのではないか。私は、さっさとベッドに横になって、毛布を被った。頭を禿げ山の方に向けていて、そちらから、ガリガリと硬いものが、乾き切った地面を引きずられる音が聞こえるが、疲れと比べたら、そんなものはどうでもいい。その音が間近に迫ったかと思うと、私の頭の直ぐ上で、金属同士のぶち当たる鋭い音が唸りを上げた。それでもなお、その音よりも日差しの明るさを嫌って、私は、両手で目を覆うままだったので、遮るものもなく、丸ごと、音は耳から入って、頭の中で回り続けた。それが収まっても、尖った金属片が、頭の中に入り込んだままのような感じは残った。

暫くして、毛布の上から肩を軽くつつかれた。私は、目から手を放し、そっと瞼を持ち上げたが、毛布越しの日差しにも目が眩んだ。肩ではなく、今度はその目に向かってつつかれた。私は、また目を閉じて、体の左側を下に向けて、毛布からそっと顔を出した。押さえ付けられた心臓だけが、鉄のように重くなった。肋骨を突き破り、ベッドさえ突き抜けて、地面に落ちて、そこにめり込むのではないか。

するとは誰かの手が、後ろから、その心臓の下に差し込まれた。私は、外に食み出た心臓を掴まれるようにして、上体を起こされた。毛布を引き寄せたが、隙間から思い掛けず冷たい風が吹き込んで、汗ばんだ体を一瞬激しく震わせた。

急いで毛布を体に巻き付けて、私を起こした誰かと反対側に、ベッドから降りた。振り返ると、ボサボサの髪を靡かせた奴が、大分くたびれた毛布を、私と同じように体に巻き付けて立っていた。毛布の間から股間が覗いていて、男だった。そいつは早速ベッドに乗り、横になって毛布を被ってしまった。仕方なく、私は、その男が引きずってきたもう一基のベッドに乗った。しかし、もう疲れは取れていて、横になる気もしなかったので、毛布を剥いで、ベッドを降りた。それから、そのベッドを禿げ山の方に引きずると、先程まで私が寝ていて、今は男が寝ているベッドも、一緒に引きずらなければならなくなっていた。直ぐに疲れて、私はまた、禿げ山の方に頭を向けて、ベッドに倒れ込んだ。

　またガリガリという音が近付いて来た。今度は、耳に指を突っ込んだ。しかし、閉じた目が余りに眩しくて、我慢出来なくなって、また手で目を塞いでしまった。そこへまた、金属音が唸りを上げた。それは暫く、頭の中をグルグル回って、同じ形と大きさの金属片が、また頭の中に埋め込まれた。どちらが古いか新しいか分からなくなって、二つの金属片は、右と左に綺麗に平行に並んだ。独りで身を起こしてベッドから降りようと思うが、体が動かない。結局また、ボロ毛布を纏った次の男に起こされてから、ベッドを降りた。そして、縦に繋がった三基のベッドとそこに寝ている二人の男を、引きずる羽目になった。

　もう幾ら疲れても、ベッドで寝るのは已めよう。どうにも疲れたら、立った

まま寝てやる。そうは思っていても、もう倒れないではいられない。地面は、幾ら何でも熱すぎる。それなら、最後の力を振り絞り、空のベッドを縦にして、そこに寄り掛かって寝てやろう。そうしたら、今度は、天からベッドが降って来て、私は、ベッドと一緒にぺちゃんこに潰れるだろうか。しかし、そのベッドだけを持ち上げる事は出来なかった。持ち上げるなら、三基一緒でなければならないのだ。とてもそんな力はない。二人の男に手伝って貰おう。毛布の上から、先ず真ん中のベッドに寝ている奴の体を揺すった。毛布は、凍ったように冷たくて硬かった。毛布を捲ろうとしても、そいつの、横向きに体を丸めて寝ている形が浮いて出たまま、毛布はビクともしなかった。もう一つのベッドも全く同じようだった。冷たい風のせいだ。二人は、私の代わりに冷たくなってくれた。

　見回しても、斜面に石ころが転がっているだけだった。私は、ベッドと男を捨てて、残る力を使い果たすまで、禿げ山に少しでも近付こうと思った。しかし、二、三歩でもう、動けなくなって、禿げ山の方を向いて、前に倒れ込んだ。熱が額を打って、全身が焦げるようだった。頭の中で、金属同士のぶち当たる鋭い音が唸りを上げた。平行に並んでいた二つの金属片が、罰点の形に交わり、その音に便乗するように、金属は厚みを増して行くようだった。その交わる金属片が、擦れ合い迫り合って、音は、少しも衰えずに唸り続けた。そのせいで、

目も見えなくなった。音はもう、私の頭を突き破って、金属片は、頭に突き刺さって突き抜けた二本の刃物のようになって、十字を作っているのではないか。それなら、その突き抜けた先端が、地面に突き刺さっている筈だ。それは、私の背丈よりもずっと長くなって、私の体を地面から引き離して行く。全身が強い冷たい風に晒されるのが分かって、私は目を見開いた。地面が遠ざかって行くなら、真下はどうやら、禿げ山の頂上のようだった。

いや、そんな筈はない。私はただ、音の中に幻を見ているだけだ。首を激しく振った。その甲斐あって、地面が間近に見直された。私は、ノロノロと立ち上がった。禿げ山は、まだずっと先の遠くに見えるままだった。胸に、ナイフが二本突き刺さっていた。背中に手を回すと、刃先は背中まで突き抜けていた。私の体の中心で、二本の刃物は十字に交わっている。振り返ると、ベッドも男も消えていた。振り返った弾みで、体はそのまま刃物の遠心力に従って、その場で、独楽のようにクルクルと回り始めた。

そうして、禿げ山が忙しく見えたり見えなくなったりを繰り返す内に、その姿は次第に低くなって行くようだった。今度こそ、私の体は地面を離れ、宙に舞い上がっているのか。ビュンビュンと、十字の刃が風を切る音だけが、斜面を響き渡って行くようだった。試しにその斜面の傾く方向に体を傾けてみようか。私の体は、回転しながら、その斜面の低い方へと流れて行く。それなら、

禿げ山の方に体を傾ければ、そちらに近付けるのだ。しかし、一度傾いた体は元に戻らず、私は、何処までも低い方へと降りて行った。禿げ山はもう殆ど見えなくなり、ただ斜面だけが先へ先へと現れてくる。

　辛うじて、禿げ山の方向を見て取れるなら、まだ間に合うのではないか。私は、胸の前の刃を一本ずつ手に握り締めて、力を込めて引き抜いた。禿げ山が、十字に裂けて崩れて行くのが、見えたようだった。そうして、長すぎるナイフを引き抜けたかどうかは分からなかったが、地面に向かって急降下しているのは、全身で感じ取れた。それでも、もし、私の体もまた十字に裂けているなら、禿げ山の十字に裂けた真上に向かって、真っ直ぐ落ちて行っているようにも、望みを抱いてしまうのだった。ナイフだけが、私の手を離れ、十字になって、先に落ちて行くのが見えた。その行く先に、禿げ山は見当たらない。

　もう、別に何処へ落ちて行かなくても構わないのだ。落ちて行くのは、あの音だけでいい。（二〇〇二年一月二十七日）

*　　*　　*

汚れ

暗い廊下は、左へ左へと弧を描いて曲がり、ほぼ半円を描いた辺りで行き止まりになっていた。いや、そこは、殆ど真っ暗なので、行き止まりに見えてしまうが、そうでないのかも知れない。腕を前に伸ばしてゆっくり進み、そこが壁で塞がっているかどうか、はっきりさせなければ気が済まなかった。掌が、冷たい壁らしきものに触れた。そこが間違いなく一面の壁であると確かめるには、壁を塗るように、そこに掌を這わせて回るしかないが、そこまでする必要もないだろう。そこで振り返り、掌が壁であると感じ取った辺りに、背中をそっと押し付けた。

両側の壁に、ドアが幾つも見えた。ここから眺めてみて、初めてそれに気が付いた。ただ暗い床に目を落とし、その曲がっている通りに、左へ左へと足の向きを変えてゆくのに精一杯で、その床の材質が何であるかさえ、分からず仕舞いだった程だ。ドアは、少しずつ間を開けて、どれも一対に向き合っているらしい。廊下は、どうやら、今居る行き止まった所が幅が広くて、先へ行くに連れて狭くなり、廊下の半円の真ん中辺りが一番狭くて、そこからまた奥へ拡がるようだった。つまり、左右の壁が描く二つの半円は、同心円ではなくて、円の内側に当たる右側の壁の方が、曲がりが急なのだ。目が暗さに慣れたのか、そこが幾らか明るくなったのか、曲がりの緩やかな左側の壁の表面が、黒っぽい岩肌をゴツゴツと剥き出しているように見えてきた。それと比べると、右側

の壁の表面は、ずっと肌理が細かく、白っぽいというより何処か半透明のようでもあり、平らだった。

廊下の真ん中の一番狭い辺りの、左側の壁のドアが、少しだけ開いた。向こう側へ開いたので、こちらからは、それを開けた者の姿は見えない。暫くして、ドアの縁から、片方の細い脚が、そろそろと踏み出された。膝から下しか見えなかったが、爪先の尖った少しだけ踵の高い靴を、履いている。薄い脹ら脛の肉が、ドアの縁に擦り付けられて、脚もドアも、それきり動きを止めた。胸の中を洗い清めるような匂いが、微かに届いた。それまで全くしなかった匂いだ。すると、廊下の見えない向こうから、床を引きずるらしい足音が、ぼんやりと響き渡ってくる。ドアは直ぐに、音を立てずに閉まった。匂いはそのままだった。

廊下の反対側から、こちらに向かって、誰かが歩いてくる。ところで、ここに入り込むについては、何の許可も取っていない。私は、日が暮れてから道に迷ってしまって、急な上り坂ばかりを、長い間、歩き続けていた。来た道を引き返そうとしてさえ、その振り返った先に、見知らぬ上り坂が見上げられてしまう。元の知った道に少しでも近付くには、下り坂を見付るしかないのに、何処をどう行っても上りばかりでは、ただ徒に、愈愈遠ざかると分かり切った道を行くだけだ。歩く程に焦りが募り、そこへ横殴りの冷たい雨が降って来て、

足元もひどく滑り易くなった。私は、ただ立ち止まり、坂を見上げる気力も、後ろを振り向く気力も失せていた。全身の関節がガタガタ鳴って、体がバラバラになりそうだったので、持っていた太くて柔らかいロープで、自分の体を縛った。ロープは雨の水を吸って、次第に細く硬く締まって、私の体を締め付けた。それで、バラバラにならずに済んだが、体はきつく締め付けられるばかりで、反り返って、立っていられなくなった。横向きに倒れ込んで、地面スレスレから眺めると、その先はずっと、真っ直ぐな下り坂だった。雨水が川のようになって道に流れ込み、私の体は、横になったまま、その下り坂を流れ落ちていった。そして、その下り坂が、緩やかな弧を描いて、左へ左へと曲がっているのが分かると、私は、その流れ落ちてゆく私を、丸い小さな窓から眺めていて、その流れて落ちてゆく私の姿が、水に沈んで見失われると、咄嗟に私は立ち上がって、その後を追うような積もりで、左に曲がる弧を描くようにして、早足で歩き出していた。そこから、この暗い廊下で、そのまま、足を止める事を思い付きもせず、突き当たりまで辿り着いてしまったのだ。改めて、床を見直すと、汚物を撤いて踏み付けたかのように、汚れていた。全て、私が汚したものに違いない。

　足音は、少しずつはっきりしてきた。直ぐにも、歩いてくる人の姿が、廊下の曲がった先から現れそうだった。私は、周りに漂う香りを、全て体の中に収

める積もりで、廊下をじっと見詰めながら、立て続けに深呼吸をした。そして、人の姿が現れた時には、真っ暗な壁の中に、すっかり全身を沈み込ませていた。廊下全体もまた、私がそこを歩いてきた時と同じように、暗くなった。それでも、その近付いて来る者が誰かは、見て取れた。尤も、見覚えのある誰かに似ていると分かっただけだ。その歩き方に特徴があって、思い出せたが、もし、立ち止まられたら、忽ち見知らぬ誰かになってしまいそうでもあった。

　その者は、私の間近まで来て立ち止まり、そこに壁があるかどうかを確かめるように、蝋燭の炎のように細長い掌を差し出した。案の定、その暗い中に朧に浮かぶ顔は、見知らぬものだったが、またそれが動き出す事があれば、きっとまた、見覚えのある顔に戻るのも確かな事のように思えて、それ程気にはならなかった。掌が、私の顔を撫でた。指が、まだ雨に濡れるままの冷たい私の唇をなぞると、その者は、小さな声を立てて、素速く後退った。忽ちその姿は、闇に呑まれた。私は、胸の中に溜め込んだ息を、出来る限り少しずつ、吐き出していった。それが届いたのか、少しずつまた、その人の姿が、浮かび出てきた。それは、床に蹲って、手探りで、静かに何かを探しているようだった。私は、自ずと、その動き回る指先を強く見詰めた。その辺りだけが、少し明るさを取り戻した。そして、その指先が触れたのは、床に横たわる白く太く長いものだった。人の姿は、その端を掴んで立ち上がった。すると、その長いものが、

廊下の床を、くねくね曲がりながら、ずっと先に向かって続いているのが見えた。床だけが、鈍く輝いた。人の姿が、その白いものを手繰り寄せて、自らの体に巻き付けてゆく。白いものが床を引きずられる度に、床の汚れが消えて行った。それらを見詰めながらも、私はまだ、ずっと、少しずつ息を吐くのを怠らなかった。

白いものを全て巻き付けると、人の姿は、白いロープで雁字搦めにされたようで、苦しそうに身を捩った。床は、ゆるゆると輝きを増して、塵一つ見当たらなかったが、見て取れるのは床だけで、壁は相変わらず、殆ど真っ暗なままだ。

腹筋が引き絞られ、胸の底の息も、残り少なくなっているのが分かった。臍の下に両手を重ねてあてがい、最後の息を吐き出すと、人の姿は、みるみる黒ずんで痩せ細っていった。その体を締め付けていたロープが、崩れるようにハラハラと、その足元に落ちて重なった。私は、壁際から一歩前に踏み出そうと思うが、体は壁に埋まったままだった。（二〇〇二年一月二十九日）

*　　　*　　　*

把手

　少し傾いた地面には、石ころばかりが転がっている。そのどれか一つを取り上げようとしても、ビクともしない。どの石も、両側から、他の石に挟み付けられているからだ。そこを歩くには、ずっと足元に注意を向けていなければならない。必ず、石の上に足を乗せて進むべきだ。もし、石から足を滑らせて、砂地に足を取られて転んだりしたら、ビクともしない石が梃子の支点になって、簡単に足の骨を折るだろう。それなら逆に石を避けて、砂地の上を歩いて行けば良さそうだが、砂を踏むと、踏み付けた下の砂が、小さな渦を描いて沈み込み、途端に、そこだけ石と石の間が狭まって、足首を捻ったまま、足は抜けなくなってしまう。そのまま、もう片方の足を、直ぐ先の石と石の間の砂地に踏み出せば、狭まっていた石が向きを変えて、抜けなかった足が抜けたにしても、今度は、踏み出した方が抜けなくなる。そんな事をやっていたら、直に、踝も脛もボロボロになってしまうだろう。

　その中に、赤茶けた枯れ木が、ポツンと一本生えていて、その殆ど一本しか残っていない下を向いた太い枝に、お婆さんが、逆さまにしがみついている。長い事、歩いてきて、すっかり疲れ果てて、石と砂地を一々見分けながら進もうにも、目が回ってしまうのかも知れない。そうでないなら、もう石の上に足を置いておくのさえ、ウンザリなのだろう。それでも石と砂ばかりでは、石の

上に乗っかっているしかないが、そこへ枯れ木が見付かって、さぞ嬉しかったに違いない。それで、さっそく木に登って、その枝が折れて、頭を石にぶち当てて死ぬ時を、ただ待っているようでもある。それとも、巧く砂地に頭を突っ込んで、そこの砂が渦を描いて沈み込み、頭の皮から順に、全身の皺だらけの皮膚だけが、砂の中へ引っ張り込まれていったなら、彼女は、若返ってしまうだろうか。しかし、その腰から下は、枯れ枝の木の皮の下にすっかり埋まっていて、ツルリと皮が剥けるとしても、腰から上だけになりそうだ。そんな、みっともない事にならないために、彼女は、必ず石の上に頭が落ちるように、絶えず狙いを定めているのかも知れない。黒ずんだ顔の中で、目付きだけは、ギラギラしていた。

　小さな女の子が、ずっと俯いて、ちゃんと足元に注意を払いながら、石の上を飛び跳ねるようにして、枯れ木に近付いて来た。ギラギラしていたお婆さんの目は、すっかり落ち窪んで、小さな点になった。どうやら、ギラギラさせていたのは、誰か近付いてくるのを見付けるためだったらしい。女の子が、側まで行って見上げると、お婆さんは、腕を伸ばし、直ぐそこの一ヶ所を指差した。女の子は、その指差された方に行って、お婆さんの顔を見上げては、石を指差していった。首を横に振っていたお婆さんが、首を縦に振ると、女の子は、しゃがみ込み、最後に指差した石に手を掛けた。その石だけは、女の子の力でも、

簡単に転がった。石の下は、乾いた砂地である筈が、濡れて黒ずんでいた。そこに胴を光らせたミミズのようなものが、くねくねと這っている。見上げると、お婆さんは、開けっ放しの口から涎が糸を引いて、そのまま動かなくなっていた。

　腕を伸ばせば、何とか、その黒っぽい口に、手が届くかも知れない。そのミミズを取り上げて、お婆さんの口に入れれば、お婆さんはまた、びっくりして動き出すのではないか。女の子が、ミミズの端を指でつまんで持ち上げると、それは、糸のように長く延びて、指の間で、端からクルクルと渦を巻くようにして、丸く固まっていった。それを持ったまま立ち上がると、地面が少しだけ小さく見えた。それで、女の子は、自分の脚が少しだけ長くなったのが分かった。光る長いものは、手の中で丸い塊を作って、そこから真っ直ぐ、地面に伸びていたが、それきり動かなくなった。仕方なく、指をクルクル回して、それを丸い塊へと巻き取ってゆくと、それは、途切れる事なく、次々に地中から引っ張り出されて来る。

　そうして、女の子の手の中に、真ん丸い赤い鞠が出来上がっていった。やや黒ずんでいて、光ってはいない。手を止めて、その色をじっと見詰めると、逆に、幾らでも光を吸い取るようではないか。自分の目の中の光まで吸い取られそうで、女の子は、慌てて目を逸らした。止めた指先には、もう、巻き取るた

めの光る糸は絡んでいなかった。お婆さんの口に入れるには、鞠は大きすぎる。それに、鞠を手にしたからには、もうお婆さんなど、どうでもいい。しかし、ここで鞠を突いても、石ころに当たって、思わぬ跳ね方をするに決まっている。女の子は、周りをぐるりと見回そうとして、その拍子に石ころから足を滑らせ、前につんのめった。鞠は手を放れ、石ころに当たってジグザグに跳ねながら、低い方へと転がっていった。

　私はそれを、短い草が青く綺麗に生え揃った川縁で見付けた。しかし、直ぐにそれを拾い上げる訳にもいかないのだ。地面から重そうな大きな鉄の把手が生えていて、私は、先ずは、それを回さなければならなかった。両腕を突っ張り、腰を折ったり伸ばしたりしながら、私は、ウンウンと唸り声さえ上げて、力を込めて重い把手を回した。背中に暖かい陽を受けていて、直に体中が汗ばんだ。目の前の川は、右から左に真っ直ぐ流れていて、流れが速い割りに殆ど波立たず、青々としていて、深そうではあったが、幅はそんなに広くはなかった。把手を回している内に、川の左右が、奥の方に曲がり出した。正面に見渡せる地平線の方から陽が陰って来て、川の左端が、更に急角度に回り込んで、尖った尻尾のように宙を跳ねたかと思うと、向こう岸の更にその先の赤茶けた地面が剥き出した平地に、静かに叩き付けられた。そこを中心に、川は、ゴロゴロと唸りを上げて、私の目の前で渦を巻きだした。把手を回す手に力が入っ

た。把手を回しているから、何とか川を操っていられるが、もし手が滑りでもしたら、幾ら深くて重い川の水も、思わぬ方向に風のように身を翻し、私を呑み込んでしまうかも知れない。その渦の中心が、少しずつ遠ざかりながら、どんどん低く沈んで行く。色も、中心程、深みを加えて行く。その形だけ見ればもう、真ん丸い湖に違いなかったが、水の色の差で、その流れの筋が幾重にも渦を巻く水面によって、それがまだ、川の流れであるのを表していた。

　川の右端が急に細くなって途切れた。そこが源流かどうかは分からないが、途切れたからには、そこが最上流だ。その最上流も、直ぐに巨大な水の渦に巻き込まれて、時計回りに、私から遠ざかって行く。それを眺めながら、やっと私は、手の力を緩め、把手を回すのを已めた。陽が、後ろから地平線の方に走って、また、川全体が明るく輝いた。渦になった川は、麗らかに流れて、その形のままに収まるようだった。鞠は、まだ足元に転がっていた。早速それを拾ってはみたが、草地では鞠は突けない。渦の中心が、小さく白く波立つのが見えた。私は、仕事の総仕上げでもする積もりで、鞠を、水の渦の中心目掛けて、思い切り投げた。それは、渦の中心までは届かなかったが、流れに沿って、ゆっくり回りながら、やがて中心に行き着いた。

　すらりとした長い脚の女の子が、草を蹴り付けながらやって来て、鞠を知らないかと言う。私は、水の渦の中心をじっと見詰めたまま、知らないと答えた。

私の答えなど聞こえなかったかのように、女の子は、服を脱いで、水に入っていった。頭だけが水の上に出て、湖の縁を時計回りに先ず一周し、それから更に何周もして、少しずつ渦の中心に近付いて行く。そんなものを、何時までも立ち尽くして見ていたところで、どうしようもないのだ。私は、立ち去ろうと思った。女の子の頭が流れ過ぎたばかりの水の表面が、突然鋭い角度の小さな溝を彫って、そこだけが、陽の光を激しく照り返した。私は、掌を翳して、その眩しい煌めきを遮った。それで、右手の指に、光る糸が絡んでいるのを見付けた。もちろん、そんなものを見付けてしまった事を後悔はしたが、手遅れだ。その糸を手繰り寄せては、巻き取ってゆくしかなかったが、それは、何時まで経っても、私の手の中で、縮むように消えて、決して鞠にならなかった。

　女の子の頭が渦の中心に届いたのか、一ヶ所に留まって、何時までも動かなかった。照り返しをギラつかせた溝は、疾っくに跡形もない。筋を作って見せていた水の色も、もう殆ど差はなかった。陽の傾きさえ止まって、糸を巻く私の手だけが、何時までも動いていた。（二〇〇二年二月一日）

*

*

*

指

　木の踏み台に乗って、枝に生った林檎を一個、右手でもいだ。その真っ二つになった半分だけが、私の手にあって、残りの半分は、果汁の滲む綺麗な切り口を見せて、枝に生ったまま縦に８の字に揺れている。林檎を掴む右手の指は、どれも果物ナイフのような形で、その指先が、林檎に突き刺さっている。その動きの取れない五本の指が、ステンレスの刃のように煌めいて、ズキズキと痛み出した。林檎を右手から左手に持ち替えようとすると、林檎は、右手の指に細かく切り分けられ、パラパラと右手から零れ落ちた。それに混じって、林檎よりずっと柔らかい左手の指も、細切れにされて、パラパラと落ちて行った。仕方なく、私は、枝に残ったもう半分に手を掛けた。それはまだ揺れていて、巧く掴めない。すると、それも、そこに生ったまま、右手の指に切り分けられ、私の左手の指よりもっと細かくなって、地面に落ちて行った。

　見渡しても、林檎は、それ一個切りだった。私は、踏み台を降りるしかなかった。地面は暗すぎて、幾ら目を凝らしても、林檎の欠片は見付かりそうにない。或いは、自分の左手の指諸共、踏み付けてしまっているのかも知れない。地面を撫でてみれば、見付かるかも知れないが、左の指はなくなっているし、右手の指も、鋭すぎて、不用意に硬い石ころにでも打ち当てたら、欠けてしまうかも知れない。私は、諦めて、踏み台を左腕に抱えて、先に進むしかなかっ

た。

踏み台は、角張った分厚い板で出来ていて、湿っぽくてずっしりと重かった。その重みのせいで、私は、最初の一歩でもう、仰け反って宙を蹴り、体は左に倒れて行った。左腕は塞がっているので、素速く右腕を左に突き出した。五本の指が、硬い地面に打ち当った。高い金属音を伸び上がらせて、五本の指は、細かく震動し、暫くしてから、呆気なく私の手を放れた。それらは、そこから扇形に拡がって、傾いた地面を緩いカーブを描いて滑って行った。踏み台は、私の体の下で潰れていた。

地面に手を突けば、指をなくした傷口から、どうしても黴菌が入るだろう。手を使わずに起き上がりたいが、私はただ、腰を捻ったり脚を組んだり振り上げたりして、同じ所をグルグル転げ回るだけだった。どうしても地面に手を突くしかなさそうで、私は諦めて、俯せになって、肘を地面に立てて、這って進んだ。私の肘は、尖った鉄のようで、地面に打ち付けられる度に、辺り一面をブルブル震わせた。その震えと震えが、何処かでぶつかり合って、地面にヒビが入ると、地面はそこから細かく砕けて崩れ落ち、その下に埋まっていた古い時代の石段が姿を現した。私は、尚も肘で地面を打って、その石段の方に這って行こうとした。途中からは、私の体は、俯せのまま、崩れて行く地面に流されるばかりで、止まった時には、私の顎が、その石段の一番下の段の上に乗っ

ていた。

　私は、先ず思い切り歯を食いしばり、それから、背中を反らせ脚を振り立てた反動で、腰を前に跳ね上げた。私の顎が、ギリギリ、二段目の石段の縁に乗った。同じ事を繰り返して、石段に体を乗せていった。石段は、見た目よりずっと急だった。それでも、爪先が一番下の段に乗って、もう無理に背中を反らせなくて済むようになってからは、また肘が使えた。石段は、幾ら肘で打っても、そう簡単には崩れそうにない。そうして、私は、胸から下を石段の角に擦り付けながら、そこを登っていった。

　石段の角度が、急に緩やかになって石段は終わった。私はまた、その上の平坦な地面に腹這いになってゆく。顎の骨と歯が、ボロボロになっているのが分かった。林檎など囓ったら、顎の方が、林檎にくっついたまま、もげてしまうだろう。私は、地面スレスレから、暗い前を見詰めた。ここからは慎重にやるべきだ。ここでまた、地面に肘鉄を喰らわせて、地面が砕けたりしたら、その粉々の地面と一緒に石段を転げ落ちて、生き埋めになるのがオチだ。

　先ず、ちらちらと赤く光るものが見えた。何かが燃えている。それに照らされた周りは、艶々と黒っぽかった。そこはどうやら、円錐形の窪地で、その半分程まで、黒い水が溜まっているようだった。火は、その黒い池の表面の真ん中に、小さく乗っていた。それを私は、円錐形の窪地の一番上の縁から、見下

ろしているのだ。池の表面を、その火よりも、もっとずっと小さな白く光るものが、幾つか、ピチピチと跳ね上がった。初め、魚に見えたが、直に、私の右手の指だと分かった。果物ナイフの形のものが、水の上でクルクル回った。胸を反らして、顎を前に突き出すだけで、水に撥ねて、私は、窪地の斜面を、黒い池に向かって滑り降りて行けた。

直ぐに、不快な匂いが鼻を襲った。池に溜まった黒い水は、汚物に違いない。それが腐って出たガスが、燃えているのだ。私がそこへ近付いて行くせいなのか、火は、みるみる拡がった。私が池の縁に達した時には、水面は、全て火に覆われていた。私の体は、斜面を滑り降りた勢いのまま、池の中へと進んだが、まるまる水の上に浮いて、ぴたりと止まった。

私は、そこに手を付いて立ち上がり、急いで、両手の、指をなくした傷口に着いた汚物を、綺麗に舐めた。特に味はなかった。或いは、汚物など少しも着いていなかったのかも知れない。それから、跳ね返る五本の指を集めて回り、それをまた、右手に差し込んだ。火は、少しずつ収まってゆくようだった。火のお陰で、水の上を歩けるのかも知れない。私は急いで、池の中心に行き、そこを右手で引っ掻いた。ドロドロと黒いものが跳ね上がり、穴が開いた。私は、そこを夢中で掘り続けた。中は柔らかかったので、片手だけでも、どんどん掘り進めた。池の底はやはり、円錐の尖った先の形に窪んでいた。そこに小さな

壺が横になっていて、それを右手で取り上げて覗き込むと、林檎の甘い匂いがした。

見上げると、穴の上の縁の、輪になっていた火が、みるみる細くなって消えた。そうして、真っ暗になると、林檎の匂いは、更に甘酸っぱく匂い立ち、私は、息が苦しくなって、噎せて、目に涙が溜まった。涙の一滴が、そこに落ちたからなのか、足元の一点が、微かに光った。そこに火が着くかも知れないのを恐れて、私は、直ぐにそれを踏み付けた。それから手探りで、壺を抱えたまま、自分の掘った穴を登っていった。穴から頭を出すと、直ぐ目の前に別の顔があって、目が合った。私の直ぐ隣で、そいつも、池に穴を掘っていて、そこから頭だけ出しているようだ。

「随分、忙しそうだな。何か見付かったかね？」と、そいつは聞いてきた。

「何時から、ここに居るんですか？」と、私は聞き返した。私よりずっと前からここに居るに違いない。

「あんたの後を追ってきたんだ。尤も、キラキラ光る指のお陰で、石段は登らずに済んだがね。」と、そいつは言って、私に歯を見せて笑った。歯は、綺麗に並んで、ナイフの色をしていた。一方、私の歯は、ボロボロなのだ。私は、少し俯いて口を噤んだ。その私の顔が可笑しいのか、そいつは、声を立てて笑った。すると、そいつは少し伸び上がって、肩の辺りまで穴の上に出た。それ

と呼応するかのように、私の頭は、穴の中に沈んだ。そいつの笑い声が穴の上で響くと、ズルズルとまた、穴の底に向かって逆戻りして行くのをどうにも出来なかった。ただ、私はずっと、上を向いていたし、そいつは、私の穴を覗き込んだので、私達は、顔を見合わせたままではいた。但し、そいつに、暗い穴の中を見通すだけの視力があったらの話だ。

「何処へ行く積もりだ。穴は底なしだぞ。」と、叫ぶような声が落ちてきた。

底なしの中で、私は、手探りで、右手を壺の中に突っ込んだ。手応えを感じたので、それを指で掻き出して、匂いを嗅いだが、何も匂わない。指をしゃぶると、やっと微かに林檎の味を味わえた。ナイフのようだった指が、トロトロと溶けた。私は、それを五本とも食いちぎって、よく噛んだ。私の歯が、穴の上の奴と同じように、綺麗に並んで、ナイフのようになって行くのが分かった。もっと早くこうしておけば、奴に対抗出来たのだ。

「お前は、林檎の味を知らないだろう。」と、私は、自信を込めて、穴の上に向かって喚いた。それから、硬い歯で、壺をガリガリと囓った。

「お前は、林檎の味を知らないだろう。」と、同じ言葉が落ちてきた。それが、私の声なのか、穴の上の奴の声なのかは、分からなかったが、私の体を通り過ぎて、私より深く、穴の中に落ちて行った。

壺が壊れると、穴は、林檎の匂いで埋まった。私は、喉が潰れる程の大声で、

誰かの名前を呼んだ。私自身の名前かも知れなかったし、林檎に似た誰かの名前かも知れなかった。喉が火を噴いて、林檎の匂いに燃え移り、私諸共、焼き尽くせばいいと思った。誰も見る者が居なくても、そのちらちらと揺れる小さな火は、池の真ん中で、その周りの、艶々と黒っぽい水の表面を照らして、燃え続けるだろう。（二〇〇二年二月三日）

＊　　＊　　＊

罠

見回すと、多少の凹凸はあるが、遮るものは何もない。空はすっかり暗かったが、岩盤が剥き出したような硬そうな地面が、微かに明るい地平線まで続いていて、ここから、何処へでも行けるように見える。しかし、何処に何が潜んでいるか、分からない。どちらへ向かうにしても、その危険は見えないままだ。先ずは、足元が確かかどうか、はっきりさせなければならない。私は、その場にしゃがみ込んで、鑿と鎚で足元を削りに掛かった。硬い地面が、みるみる砕けて、その角張った破片は、風に吹き払われるように飛び散った。肌では感じ取れなかったが、風が吹いているなら、その向きを確かめようと、転がって行

く破片を目で追った。どうやらそれは、私の周りを回っているようだった。
　削れる限りのものがすっかり削り取られると、足元は、平らで円かった。円いテーブルの上に、乗っかっているようなものだ。その円い中だけは、硬くて、鑿でも歯が立たないのだ。削れたのは、その外側だけだ。私は立ち上がって、その円い縁から先に目をやった。岩盤を剥き出したような地面は、何処にも見当たらなかった。地平線だけが、ぐるりと糸のように細く輝いていて、そこから、足場の円いテーブルまでは、空の暗い色とすっかり一つに溶けて、何もないようにしか見えない。ここを動かずに鑿を打ち付けただけで、私は、地平線までの岩盤を、全て砕いてしまったのだろうか。そして、その砕いた下は、たとえば真っ黒な泥の海で、空を映して、何もないように見えてしまうのだろうか。それなら、砕けた破片は、全てその泥に埋まってしまったのか。
　大工でもないのに、どうして鑿と鎚を手にしていたのかが、分からない。そんなものを持ち合わせていなければ、私は、何処へでも歩いて行けたのではないか。見渡す限り、岩盤が剥き出したような地面なら、そこに何の危険があるだろう。あるにしても、そこへ行って、それを避ける手立てを講ずれば良いではないか。他に、どうしようもないだろう。いや、それはこうなってみて思う事で、その地平線まで続いていた岩盤も、それに比べれば遥かに小さい、この円いテーブルも、私をここから一歩も先に進めない事に於いては、同じなので

はないか。実際、もし一歩でも踏み出してみたら、早速その足元が砕けて岩盤に穴が開き、私はその下の泥の海に落ちて、二度と浮かび上がれなかったかも知れない。何の手立てを講ずる間もない。地平線まであった岩盤を全て沈めた泥の海と分かっていて、今からそこへ飛び込むのと、どう違うのか。

　重心を少し移しただけで、円テーブルが、傾いた。円くて平べったい石が、泥の上に浮かんでいるだけなのか。私は、体の重心を戻しながら、そっと腰を屈め、そこに腹這いになった。頭を縁に持って行っても、脚は、テーブルから半分はみ出した。それから、少し前に身を乗り出して、何も見えない中に、片腕を振り下ろした。幾つか手に当たるものを感じたので、泥の中に落ちたものを掻き出すようにして、それらをテーブルの上に、纏めて引き揚げてみた。それが何だか確かめたくても、その前に、そちらへテーブルは大きく傾いた。私は、上体だけ起こして、直ぐに、それを掴んで力任せに放り投げた。

　水の上を跳ねるような音がして、そこだけが光った。確かにそこは水面のようだったが、その光が届く限り、その水の中は透き通っていた。そこには、罠が仕掛けられてあって、細い柵で出来た檻の中で、鼠が何匹も這い回っていた。しかし、檻は破れていて、そこを抜ければ、その向こうに逃げられるのだ。鼠達がそうしないのは、その向こうに、もっとひどい罠が仕掛けられているのを警戒するからだろうか。その向こうは、少し小高くなっている。その小高いも

のが全て食い物であるかのように、そこに群がる、とても鼠とは思えない、でかい獣達の真ん丸く太った尻が、プリプリと振られているのが一瞬見えて、光は消えた。

　風が後ろから来た。風の向かう先を見ると、光る糸の地平線が、そこだけ途切れていて、黒々と小山が盛り上がっている。その山裾に、丸々と太った人の姿が、横に一列に並んで、白っぽく浮かんだ。小山が全て食い物であるかのように、そいつらは、そこにしがみついて、競って、それを喰らっているようだった。私は、ひどい空腹を感じて、テーブルの縁を握り締め、体を前後左右に激しく揺すった。テーブルは、私の力では、決して転覆しないようだった。風が後ろから来るからと言って、そちらに流れて行けるとも思えない。

　しかし、小山が食い物であっても、そこには毒が含まれていて、いずれ奴らは死ぬだろう。それもまた罠なのだ。そう思う間に、奴らは、丸ごと小山を食い尽くし、腹を突きだし苦しそうに身を捩りながらも、肩を寄せ合ってヨチヨチと先に進んだ。そこには、一回り大きな小山が、奴らに食われるのを待っていた。

　私はまた、腹這いになって、片腕で掻き出したものを、テーブルに乗せた。テーブルは、大きく傾いたが、転覆はしなかった。私は、それを、何だか確かめないまま、遠い小山目掛けて、力任せに投げ付けた。水の上を跳ねるような

音がして、そこだけが光り、その光は、風に押されるのか、水の上を跳ね続け、奴らの足元にまで届き、その内の一人のほっそりした脹ら脛に突き刺さった。そいつは、太った体にしては素速くそれを引き抜いて、私に向けて投げ返してきた。水の上を跳ねる事もなく、真っ直ぐ私の方に飛んで来たが、その間、それはずっと光っていて、私の間近で、急に光は失せた。私は、それが自分に突き刺さるようで、思わず声を上げていた。光が消えると共に、それは、何処へともなく消えたように見えて、私が叫んだ口の中に、吸い込まれたに違いない。

　それを体から取り出そうと、私は、鑿と鎚で、胸を削っていった。削れるものがすっかり削り取られると、円いテーブルのような形だけが残った。それは、私が嵌った罠に違いなかった。小山は、食い尽くされては脹れながらまた現れて、私から遠ざかり、はち切れんばかりに太り果てた奴らと共に、遂には、地平線の向こうに消えた。奴らのガツガツと山を喰らう音だけが、私を嘲笑うように耳に残る。（二〇〇二年二月五日）

*　　　*　　　*

慰め

　時間を掛けて、冷たく長い一息を吐いた筈だった。そして、何時の間にか、薄い氷の上を這ってゆくその息を、立ち尽くしたまま、当てもなく目で探し回っていた。しかし、息もしないでそうしていたなら、初めからもう、吐く息など少しも残っていなかったのか。水から目を離し、その先を眺めたまま、胸が苦しくなって身を捩るしかなくなるのを待った。三方を水に囲まれた、片方だけの翼の形をした小さな庭に、私は居た。庭は、平らな地面は見当たらず、何処も急勾配で凹凸が不規則に入り組んでいて、私の背より高い錐のような尖った小山が、窮屈そうに幾つも突っ立っていた。殆どそれだけで、足元には草の姿も見て取れたが、どれも黒ずんで腐っているようだった。

　私の直ぐ脇に切り立つ黒い地肌に、そっと右の頬を擦り寄せた。冷たかったが、頬がその冷たさの中に溶けてゆくなら、その冷たさに、自らを委ねたくもなる。右目だけが、凍るように冷えて、涙が溢れた。その温かさが、私の頬と地肌を分け隔てた。頬は、頬だけで固まって、地肌から浮くようだった。

　まだ巡っているらしい血が、頬の冷たさを、ゆっくりと全身に伝えてゆくのが分かった。涙が、ほんの一筋、頬を落ちて枯れてしまえば、地肌の冷たさは、止め処なく頬に移されて来る。私は、全身を預け、右腕を回して、尖った黒い小山の腹を抱いた。それから、獲物でも狙うつもりで、暗い空を鳥が掠めすぎてゆくのを待った。暫くそうしていて、小山が脆い砂で出来ていると気付いた

直後、それはすっかり崩れて、私の足を脹ら脛の辺りまで埋めていた。私は、前に倒れ掛かったが、足は抜けず、背中をいっぱいに曲げ、腕を突っ張って、両手を何とか地面に着いた。砂がギシギシと音を立てて、手もまた、手首の上まで砂に埋まった。首も俯くしかないが、それでも眉を跳ね上げるようにして、何とか空に目を届かせていた。

　右隣の小山も、裾の方からサラサラと砂が崩れていて、木が切り倒されるように、私の方に倒れ掛かってきた。脚は、膝の辺りまで埋まった。両手両足からも、砂の冷たさが、染み込んでくる。こんな風になるには、この庭に足らないものがあるのだ。それは何だろうか。ここからは、鳥の姿が見えないからか。昨日の昼過ぎから夜遅くまで、私は、鳥の鳴き声に悩まされていたのではなかったか。いや、私が聞き取ったのは、空の向こうに飛び過ぎて行った鳥の鳴き声を聞いたという、人の話に過ぎなかった。その人伝ての遠い鳴き声が、微かに耳の中で鳴り続け、私は、それに苦しめられただけだ。

　もう視界の外だったが、また右隣の小山が崩れるのが、音で分かった。同じ音が庭のあちこちで起こって、砂は、前に倒れたままの私の胸の下まで来た。胸からも、直に、砂の冷たさが伝わると、ずっと砂に埋もれたままの手足の先が、却って暖かく感じられるようでもある。しかしそれは、手足の先から、砂に溶けてゆくようでもないだろうか。もう腕も脚もすっかり埋まっていて、そ

こまでが溶けて砂になるなら、私は、胴体だけで、砂の上を滑って行ける筈だ。そうするつもりで、更に俯いて、頭を前に突き出すと、雪の上を滑る橇のように、体は前に流れ出した。しかし、胴体だけでなくて、埋まっていた腕と脚も、砂から引っ張り出されて付いて来る。

　しかし、どうも、脚についてはよく分からない。先の方は、砂に溶けて、もう大分短くなってしまったようでもある。それに引き替え、腕は、ズルズルと砂から引き出されながらも、愈愈重くなって、両肩は、ミシミシと骨が軋むような音さえ立てて、押さえ付けられた。上体が少しずつ起きてきたが、斜め四五度くらいで、その動きは止まって、それからは、微かに体が沈んで行くようでもある。短くなったかも知れない脚がまた長くなって、地中深くへと延びて行くようだった。

　突然、両腕が、物凄い音と共に持ち上がった。庭の砂ごと、持ち上げてしまったのか。上体は、一気に、真っ直ぐ上に向かって振り立てられた。両腕は、私の背丈の三倍はある、巨大な黒い翼になっていた。私は、それを更に振り上げた。足元がミシミシと音を立てた。その音で、私は、私の脚がそこに根を張ってしまったのが分かった。地中から脚を引き抜くために、何度も翼を振り立てた。後は、翼と根っこの力比べで、どちらが優れているにしろ、私の出る幕はない。

後ろへ引っ張られるように、上体が仰け反った。翼だったものが、その先端からまた、砂に戻って、サラサラと崩れて行くのが見えた。砂は、薄い氷を潰して、水の中にドボドボと落ちて行く。翼の全てが砂に戻るより先に、骨が抜き取られるように、私の細い腕の殆どが、砂の中から姿を現した。すると、翼は、そこに翼のまま黒く横たわり、もう砂には戻らないようだ。ただ、腕は、全て引き抜かれた訳ではない。手首から先はまだ砂の中で、まるで指先から根が生えたように、動かせなくなっている。そのまま私は、頭の重みに、痛い程に背中を反らせて、頭の天辺から後ろに倒れ込んだ。それきり頭は、頭の後ろから根が生えたように、動かせなくなった。

翼が翼だけで、飛び立とうとするようだった。私の体を引き剥がせたなら、翼だけの方がずっと身軽だ。しかし、翼は、私が振り立てたようには羽ばたけてはいない。ただ、砂に塗れて身悶えしているだけのようではないか。私は、翼を助ける積もりで、更に頭を低く下ろし、後ろに向かって、砂の上を流れて行くようにしてみた。頭は少しは低くなったが、腰の方が、大分浮き上がってしまった。腰は、後ろに退けるどころか、翼の方に押し出されていないだろうか。もし今、翼が飛び立てるとしたら、私の下半身を引きちぎって、それごと持ち上がるのでなければならないだろう。

私の胴体は、こんな時だけ、鉄のように硬いのだ。何しろ私はもう、息をし

なくて済んでいる。息は砂がしていて、その冷たさと一緒に、苦い味でもしそうな酸素の幾らかを、私の体に送り込んでいるに違いない。それなら、私の体は、いずれは錆びて朽ち果てるだろうか。それまで翼が、翼だけで生きていられれば良いのだが、恐らくは、もたないだろう。今にも息絶えそうな震え方をしていないだろうか。

　耳の中に砂が流れ込んで来る音が、地平線の向こうに飛び過ぎようとする鳥の、最後に届く鳴き声のように、聞こえてくる。私は、首を振れる限り、振り続けた。砂は、耳から流れ出たり、また流れ込んだりする。そうする事で、私は、鳥の鳴き声をより鮮明に耳に響かせようとしているのか。それとも、その響きを振り払おうと藻掻いているのか。自分でも分からない。そのどちらかではあるだろう。他に、ここで首を振る意味はない。いや、大いにある。首を振って、頭の後ろに生えた根を引きちぎるのだ。首だけではない。肩も左右に揺すって、腕を完全に砂から引き抜くのだ。

　鳥の鳴き声が、少しずつ小さくなってなっているようでもあるが、小さく聞こえる事で、逆にそれは、大きくなっているようにも感じられた。そして、大きくなりながら遠ざかるようでも、それで却って、大きくなりながら近付いて来るようでもある。私は、首や肩を揺する事が出来て、それが、せめてもの慰めになっていた。しかしそう思うと、慰めは、途端に砂の中に崩れ去って、鳥

の鳴き声が、愈愈深く、私の耳に根を下ろして来るようで、それから逃れたくて、首を振っているのかも知れなくなっていた。そうしている内にも、私の頭が丸ごと砂になって溶けていってくれれば、それで一応のケリは着く。それとも、そんな事になったら、鳥の鳴き声もまた、砂に溶けて、それは暗い地中で愈愈遠ざかりながら、また近付いて、私の中に根を張るだろうか。しかし、それは、砂に溶けた私としては、望まれるべき事ではないか。その響きが砂の中をたゆたっている間は、この庭はまだ、捨てたものではない。しかし、辺りは水浸しだった。砂が、水面より深くまで崩れて、そこから水が導かれてくるようだ。水の流れは、砂より黒く凍って、あちらこちらで血管のように浮き上がった。鳥の鳴き声は、その、空を隅々まで映し取る艶々した氷の中に吸い取られて、完全な静寂が、私の耳に襲い掛かった。それでも砂の音がしているのは分かったが、分かるだけで、まるで耳に入っては来られない。或いは、鳥の鳴き声だったものは、実は、この静寂だったのだろうか。庭の形はもう、翼のようではなくて、枝を張り巡らした大木の倒れた姿のようだった。私は、その根の形をした辺りに目を凝らすのを、已められなくなっていた。なぜなら、はっきりした根の形が、見当たらないからだ。その内に、大木は私から離れて、水に流れて行くようだったが、直ぐに、流れて行くのは、私の体だと思い直した。二枚のまだ巨大な翼は、その間で引き裂かれると見えて、捩れながら水を押し

て、素速く水に潜り、私の後ろに回り込んで、私を包み込むような動きを、水の中でするようだった。私の後ろに回り込んで、私を包み込むような動きを、水の中でするようだった。

て、素速く水に潜り、私の後ろに回り込んで、私を包み込むような動きを、水の中でするようだった。庭だった所が全て水に浸され、すっかり沈んだ黒い影だけが、水の色に映っていた。それで水の流れが変わったのか、私の体は、ゆっくりと、そちらへと引き戻されて行く。
　動かなくなったところを見ると、翼はもう死んだようだ。（二〇〇二年二月七日）

＊　＊　＊

ねぐら

　歩いていると、冷たい風が吹いてきて、自分がひどく薄着なのに気付いた。何処か、風を避けられる所が欲しかった。風は益々強くなって、風を背に受けて、風の吹いてゆく方にしか、足を向けられなくなった。そこは、緩やかな下りの斜面で、少しでも風向きに逆らえば、足が縺れて、転んでしまうだろう。特に行く当てもない私は、風とぴったり同じ向きに進む事だけを心掛けた。真っ直ぐ先に土が盛られていて、そこに穴が開いているのが見えた。このまま行けば、その穴に入る事が出来そうだ。やっと、風を避けられる。

足元の地面の色が変わるように思えた。その変わり目を跨ぐと、その直ぐ先の地面が、飛び退くように、私の足から離れた。そこから先の景色が、みるみる私から遠ざかって行く。盛り土も穴も、丸ごと持ち去られた。私は、その場に立ち止まって、それを眺めるだけだったが、風は相変わらす背中を圧している筈なのに、どうしてそこで立ち止まれたのか。風はもう、已んでいたのか。それとも、私の背中は、余りに長く風を受け続けて、風を感じなくなってしまったのか。そしてどうやら、その感じられない風は、私の体の中を吹き抜けて行くらしい。

風の心配から解き放たれて、私は、盛り土と穴があった辺りに、じっくり目を凝らした。そこが、地面でなくなっているなら、私は、断崖の縁に居て、風が吹き過ぎるだけの空中に、今にも落ちて行きそうなのだろう。それとも、私から遠ざかってもう跡形もない景色は、ほんの上っ面だけのもので、その薄皮が一枚、私から見えなくなる所まで、滑るように剥けていっただけで、地面は、そのままなのか。見上げると、私の真上から先の空は、そこで引きちぎられたかのように、なくなってしまっていないだろうか。そう見えるのは、ただ色が、そこで急に変わっているだけか。それとも、空もまた、薄皮が剥けるように、巨大な半球ごと、地平線の向こうに、ずり落ちて行ったのか。では、私が見ているのは、何なのか。ただ、景色としては見る事の出来ないものが、空に替わ

ってそこにあると分かるだけだ。しかし、それは、そのように見えているから、そうと分かるのか。見えていなくて、そうと分かるのか。それとも、地面と違って、空は丸ごと、私から持ち去られたのか。そこまで昇って行かない限り、分かりそうにない。

　空ばかりに気を取られて、気付かなかったが、何時の間にか、私の足にしがみついている者が居る。いや、しがみつくのではなく、腹這いに横たわり、両腕で輪を作って、私の足元を取り囲むようにしている。腰から下は、地面が剥がれて何もないように見える辺りを、ゆらゆらと揺れている。私が、軽く飛び退いて、その腕の輪の外へ出れば、それは、そのまま何処かに流れて行ってしまいそうだ。しかし、その姿には、何処か見覚えがあったし、それが、剥がれて消えた景色の方から遣って来たなら、早速助け起こして、抱き締めて然るべきものかも知れず、少なくとも、軽はずみに、それと離れ離れになるような事は、先ずは控えるべきだ。

　私は、しゃがみ込んで、そいつの頭に手を差し伸べた。そのひんやりした髪は、濡れてはいなかったが、しっとりとしていて、直ぐに指に馴染んだ。それを触っていると、また、私の背中を圧す風の力が、グングン戻って来た。私は、前に転げそうになって、そいつの背中に手を着きそうになった。すると、そいつは、寝返りを打って身を躱し、跳ねるように立ち上がった。私は、支えを失

って前に倒れ込み、そのまま私の体は、消えた景色の後を追うしかないのかと思ったら、そいつに釣られるように、ふわりと立ち上がっていた。
「ずっとあの連中と一緒だったんだ。見掛けによらず、とても楽しい奴らだ。それであんたを呼びに来たんだ。」と、そいつは、声を弾ませた。
「いきなり、現れるなんて、また、どんな仕掛けを使ったんですか。でも、あなたが居たとしたら、あの盛り土の穴の中じゃないですか。他に隠れる所なんてないでしょう。」と、私は、穴があった辺りを見詰めて言った。
「じゃなくて、本当は、もう休みたい。あんたが連中と別れたのは、正しかった。ずっと歩き回っていたような気がする。何時から歩いているのかな。おい、こっちを見てくれよ。」
「穴の居心地はどうでした？」
「寝る場所が欲しいんだ。眠くて気が狂いそうだ。」と、そいつは大声を張り上げた。
「私があの穴を見付けたから、景色は、私を嫌って、行ってしまったんだろうか。もし、あの穴に入りたいなんて思わなければ、たとえあれが真正面に来ても、私は、何もなかったかのように、易々とあれを踏み越えて、先に進めただろうか。みんな行ってしまったのに、あなただけが残って、私の側に来て相手をしてくれているとすると、あなただけは、どうやら私を嫌っていないらし

い。」

「まだ眠くないんだろ。あんたが眠くなるまで、あんたのねぐらを借りても、何も差し障りはない訳だ。」

「でも、あなたが、あの穴に身を隠していたなら、決して、私の事など知らないままだったろう。あなたはただ、私と同じように、穴から嫌われただけかも知れない。きっとそれは、眠気を我慢していたにしても、あの穴の中で、あなたが眠らなかったからだ。だって、私は、大分前から、もう眠くならないんだ。だから、昔寝ていた所も、物置みたいになって自ずとなくなってしまった。そんな私だから、嫌われるんだな。他に理由は思い付かない。でも、あの穴の中に入れば、やっと風の音を聞かずに済んで、眠気が戻って来てくれたかも知れない。」

「じゃあ、寝かせて貰う。」と、そいつは言って、私の足元に蹲り、直ぐに眠り込んで、私の左足の甲に冷たい涎を零した。私は、景色のなくなった所へ踏み出したくなったが、そのためには、涎を垂らしている顔を、蹴っ飛ばして行かなければならない。それなら蹴っ飛ばせば良いではないか。多分、目を醒ます事もないだろう。すると、私の目論見を見透かすかのように、そいつは寝返りを打って、私から、少し離れた。これでもう邪魔者はいない。早速、私は、足を踏み出そうと思うが、足の出し方を忘れてしまっている。薄皮一枚かも知

れないが、景色のなくなった所を目の当たりにしていれば、それまで当たり前にやっていた事を忘れるのも、無理はない。

身動き取れずにいると、そいつはまた寝返りを打って、私の後ろに回り込んだ。その時だけは、私も、その動きに合わせて、そいつの方を振り返る事は出来た。そうして見ると、その横になった全身は、景色のある側に、すっかり収まっていて、逆に、私は、何もない側に立っていた。立っていられるなら、やはり、そこに地面があるのだろうか。しかし、その私の側と景色のある側の地面との間に、それまでは見えなかった裂け目が、はっきり見える。裂け目は、私が見れば見ただけ、拡がって行くようだったが、そうと分かっても、そこから目を離せない。その裂け目の中こそ、もう本当に地面はなくて、真下には奈落が口を開けているだろうか。しかし見る限り、少なくとも、奴が寝ている下には、断崖絶壁は切り立っていない。裂け目も、そこでは塞がっているようだ。それでも、風を真面に受けているせいか、私は、そこから隔たるばかりだ。私の側でだけは、裂け目は口を開けたままなのか。

しかし、そうして隔たってゆくばかりにしては、寝ている者の姿は、それ程小さくならなかった。寧ろ、その寝ている体の向きが変わってゆくのが目に付く。そして、少しずつ、その体の見えなかった側が見えて来て、そこから延びているぐにゃりと延びた影の形が、露わになってくる。それなら私は、弧を描

きながら、それから遠ざかっているのだ。ぐるりと一回りすれば、元に戻れるかも知れない。その内に、景色のある側とない側が、私の前に二つ並ぶように見えて来て、二つは、私に分からないように、裏で溶け合ってゆくようだった。もう、境目もはっきりしない。ただ寝ている姿だけがその境目の目安だが、それも、そいつがずっと同じ所に居ればであって、私のように、そいつも風に圧されて、地面の上を滑っていないとも限らない。

　そうして、二つがすっかり一つになってしまうと、私だけが、その外に居るようだった。そこに、何もない景色が見えているのか、景色にならない何かが見えているのか、それとも、そのどちらも見えていなくて、ただ見えない事だけを見せ付けられているのか。どうやって、そんな中に入って行けるだろう。それでもまだ、私は、弧を描いて滑って行くようで、そうだとしたら、その一つに溶けたものの周りを、星のように回っているのだ。寝ている者の延びるばかりだった影が、縮みだして、急に色を濃くした。その濃い色は、直ぐそこにあった。私は、影に向かって、頭から飛び込んだ。

　影は穴だった。私は、穴の中に収まった。風の音が途絶えた。影のない大きな白い獣の姿が、寝ている者を起こしに来た。私は、寝ている者の裏側からそれを見た。直に、睦み合うように人と獣が一つに溶け合って、転げ回るたびに、子供でも産むように、硬そうな真ん丸い影を、その一つの体から、コロコロと

次々に弾き出した。その一つ一つが、何処かに通じる穴に違いない。そして、それらも含めて、私の周りの全てのものが、穴の中の私を中心に回り始めたようだった。もちろん、私は、何にも触れられそうにないし、穴からも出られないだろう。ただ、それら全てが、私の穴を少しずつ削っている音は、聞き取れた。音は、少しずつ高く短くなる。穴は削られ程、狭くなって行く。

　穴がすっかり塞がれば、私は、薄皮のほんの欠片となって、何処か、誰にも見えない方向にでも、剥がれ落ちて行くだろうか。そうして、その剥がれた私の後に残された私は、何と溶け合うだろうか。それとも、そうなる前に、穴から転げ出て、また別の穴のある景色へと、送り込まれて行くだろうか。それとも逆に、全てのものが、私から剥がれて滑り落ち、私だけが、私とぴったり同じ大きさの穴の中に、取り残されてしまっているだろうか。（二〇〇二年二月九日）

＊　　＊　　＊

紙

小さな紙の束を片手に持って、人通りの多い四つ辻に、西を向いて、朝から

彼女は立っていた。紙は、濡れた黒い地面に置くと、人の形の透かしが浮かび出る。人の形は、必ず何処かが欠けている。頭の半分が欠けていたり、手足のどれか一本が欠けていたり、喉や胸や腹や股に穴が開いていたりする。彼女は、一言も口を利かないし、無表情だったし痩せていたので、大抵の者は、ほんの少しだけ身を躱していて、ぶつかる事もなく、彼女の前を素通り出来る。しかし、何の気なしにそこで立ち止まり、彼女の差し出す紙を一枚、受け取ってしまう者もいて、その者は、慌てて懐を探り、取り出した別の紙を彼女に渡す。彼女は、それを西日に晒し、燃えたようにそれが真っ黒になると、爪先立ちでくるりと回ってから、或る方向を指差す。それを示された者は、彼女から受け取った紙をしっかり握り締めて、黙ってそちらに向かう事になる。誰も居なくなる所まで歩き続け、濡れた黒い地面を見付けると、そこに紙を置く。そこに浮かび出た透かしを覗き込むと、その者はもう、その何処か欠けた人の形に、なってしまっている。

　紙を全て配り終えて、彼女は、真っ黒な紙の束を掴んで、西へ行く道と北へ行く道の間の崖をよじ登って、その上のまるで道のなさそうな茂みに入って行く。暫く進んで、茂みの中から、白い二本の腕が水平に伸びているのに出会うと、彼女は、立ち止まってそれと向き合い、すっかり捲り上げた同じように白い腕を、同じように伸ばして、その指に自らの指を絡ませる。真っ黒な紙の束

は、四つの手の中で、揉みくちゃにされ、微かに灰色の煙さえ立ち上らせる。紙の束は、それで千切れて細切れになるような事はなく、一塊りに固まって、揉めば揉む程、その塊は脹らむようだった。朝からずっと、表情さえ変えなかった彼女が、その甲高い声を立てて笑った。私は、その隙を逃さなかった。素速く駆け寄り、その塊の中に飛び込んだ。彼女が、私に気付いたかどうかは分からないが、何かが起こった事には気付いて、笑うのを已め、少し口を尖らせて、小さな目で、その黒い塊を見詰めた。形や大きさより、先ずは、それが急に重くなったのが、分かったのではないか。それから、ただの紙より、ずっと硬くもなっただろうし、ゴツゴツして、更に幾らか脹らんだ筈だ。

　茂みから伸びる手に、急に力がなくなって、彼女は、黒い塊を独りで持った。それは、もう形も大きさも変わらない、ただの真ん丸い石ころだった。それを抱えて、また茂みの中を進んだ。ちょうど日の暮れる頃に、茂みを抜けて、ザラザラした灰色の土の撒かれた空き地に出た。そこでやっと彼女は、黒い塊のないのに気付いた。茂みの何処かに、落として来てしまったのだが、茂みを抜けたなら、あれはもう殆ど用済みで、捨てる手間が省けたようなものだ。彼女は、手が真っ黒なので、手を洗える所を探した。空き地の片側だけに、コンクリートの汚れた長い壁が、ずっと奥に向かって真っ直ぐ続いていた。その壁際の地面から、水道管が一本伸びて出て蛇口が付いているのを見付けたが、そこ

までは大分ある。彼女はそこまで歩いて行く自信がなくて、茂みの方を振り返った。丸い石が、空き地との境目の直ぐ奥の茂みの中に、ポツンと黒く見えたので、彼女は、それを取りに戻った。拾い上げると、それは、片手の掌に楽々と乗せられて、彼女は、それを、暫く掌の上でコロコロと回した。その内にそれは、石と思えない程、軽くなった。彼女は、それをまた落としてしまって、どうするかあれこれ考えるのも面倒なので、一口に呑み込んだ。彼女は、力が湧いてきて、強く地面を蹴って、蛇口まで辿り着き、両手を素速く揉み合わせて、手を洗った。

　水が真っ黒くなって、汚れはどんどん落ちている筈だが、手は黒いままだった。ひょっとして、肉や骨の中までも真っ黒で、汚れを全て落としたら丸ごと手がなくなっていた、なんて事になるかも知れない。それ程、洗っても洗っても、手は黒いままで、真っ黒な水が、灰色の地面に、染みて拡がって行くばかりだ。その水の冷たさが、足から伝わって腰まで来ると、彼女は腹が痛くて、どうにも我慢出来ず、その場に横になるのがやっとだった。水は、直ぐ前に出しっ放しで、彼女は、腕を伸ばして、そこに手を差し伸べる事は出来たが、そうして黒くなった水が、体に掛かって、益々体を冷やしてゆくのは、どうにも出来なかった。そのまま、彼女は、ブルブル震えながら、夜の間中、手を水に晒したり、その冷え切った手で腹を押さえたりし続けた。

　夜明け頃になると、空き地は何処までも水浸しで、灰色だった土も、すっかり黒くドロドロになり、心臓の側を下にした横向きの彼女の半身が、埋まってしまう程だった。その半分埋まった股の間から、真ん丸い黒い塊が出て来た。全てではないが、その塊の幾分かは、確かに私だ。彼女は、寒さで震えは止まらなかったが、腹の中が全くの空っぽになったように、痛みは収まった。びしょ濡れの泥塗れの体を起こして、両手を見ると、真っ黒ではなかった。濃い灰色くらいか。その手でやっと、蛇口を閉めた。

　彼女が、一歩踏み出すと、足元の泥が鋭い角度で波立って、黒い塊を跳ね上げた。黒い塊は、そのまま、開いた彼女の股の中に収まった。しかし、次の一歩で、それはまた、彼女の股から地面に落ちた。次の一歩が、また黒い塊を跳ね上げて、彼女の股が、黒い塊をまた、するりと呑み込んだ。彼女から紙を受け取って、体の一部をなくした者達が、壁の向こう側から、壁に幾つも開いた穴を通して、その彼女の姿を覗いている。彼女は気付かないだろうが、私には分かる。

　体の中に私を出たり入ったりさせながら、彼女は、壁に沿って進んだ。壁の向こうの者達も、それに合わせて、覗き穴を次々に変えながら、付いて来た。彼らは、盛んに、小声で、彼女に何か言っていた。彼女に気付かれないままに、伝えたい言葉を、彼女の耳に入れようとしているようだった。そしてそれが、

私に係わる事であるのは、想像が付いた。そうしてどうやら、彼らの囁きは、功を奏したようだった。彼女は、フラフラと声の方に身を寄せて、壁に寄り掛かった。そうして、壁に片方の肩を擦り付けながら、尚も進んだ。私は、泥の中に落ちたまま、取り残された。壁に寄り掛かりながら、腿と腿を擦り合わせ、脚を引きずるように歩かれたのでは、股は閉じ合わされたままだし、泥を波打たせる事も出来ない。みんな行ってしまった。

　それから、空き地に溜まった黒い水は、何日も掛けてゆっくりと捌けていって、乾いて灰色に戻るまでは、また何日か掛かった。それからやっと、人が通り掛かって、私に話し掛けてきた。

「これからどうする積もりかね。」

「壁を伝って、女の後を追いたい。」

「壁は、直ぐそこで終わりだよ。その先には何もない。茂みに帰って、また白い手で揉んでもらえば、硬い石に戻れるんじゃないか。それから、もっとずっと揉まれていれば、胸か脚か何処かは分からないが、人の体の一部にも戻れるかも知れない。女がまた、あそこに立ち寄る事は、まず、ないだろうが。」

「気乗りしないな。それに、どうやって茂みに戻る？　あなたが戻してくれるのか？」

「それはそうだ。じゃあな。」

黒い塊は、それからまた何日も陽に晒されて、上から順に紙が剥がれて、跡形もなくなった。空き地を風に舞う黒い紙の行く先は、どれも茂みの縁で、草の根元に引っ掛かって、灰色の土に埋もれた。（二〇〇二年二月十一日）

*　　*　　*

高台

高台に居た。紫の薄い煙が、二、三本の筋になって棚引いて来るのを見付けただけで、私は、逃げ道を探すのに必死になった。高台から、何処へでも駆け下りれば済むような事ではない。煙が何処から来て、どれ程の速さで、何処へ流れて行くかを、見極めねばならない。一方、彼は、その煙を喜んで、はしゃぎながら飛び上がって、その煙を掴み取ろうとしている。そんな彼の姿をぼんやり眺めていたのが、命取りだった。後退って、高台の縁までは辿り着いたが、そこでもう、体が痺れて殆ど動けない。草の上に仰向けに身を横たえるのが、やっとだ。空が、どんどん高く狭くなって行く。それでもまだ、私は、高台からの霞掛かった景色をぐるりと思い浮かべて、一番正しい逃げ道を導き出そうと、無益に、頭を働かせてはいられた。狭い空が愈愈暗くなってきたので、思

わず私は、顔を背けた。釣られて、肩が草の上を滑って、体が横を向くようだった。すると、まるで背中に目があるように、高台の様子が、澄み渡った空気の中に見て取れた。

　彼はもう、煙をズタズタにしていた。風が止まって、そのズタズタのまま、煙は高台に留まっている。煙は薄いのに、その影は、真っ黒だった。その影が落ちた草地の色も全て打ち消して、影が移動しても、草は、黒焦げになったように見える。彼は、それを面白がって、盛んに煙を動かしていたのかも知れない。そうして、高台の草地が、悉く黒く塗り潰されると、彼の手の届かない高さに、高台にすっかり覆い被さるように、平べったい真っ黒な丸屋根が出来ている。草地の影は全て、その丸屋根の影だ。それを見上げる彼の体が、黒い影の中にストンと落ちて、消えた。そこはもう、黒焦げの草地ではなく、ただ影であるだけで、その下に、大きな穴が口を開けているに違いない。もちろん暗くて、穴の底に居るらしい彼の姿など、まるで見えない。

　シャーシャーと小さな音が聞こえる。平べったい丸屋根の何処かに、穴が開いていて、そこから、砂が零れ落ちてくるようだ。高台ごとすっぽり掘られたような穴の筈なのに、直ぐにそこは砂に埋もれて、そこからまた、彼の姿が浮かび上がってきた。先程までよりずっと大きくなっていて、丸屋根の裏側に易々と手が届く。彼はそこを、下から拳固で突き上げて回った。忽ち、丸屋根は

穴だらけになって、とてももう、屋根には見えない。どの穴からも、砂が零れ落ちてくる。高台の穴の影は全て埋まり、一面、砂が溢れて白く輝いた。彼は、奇声を上げて、その上を飛び回った。ただ、降り掛かる砂は、全て弾かれて、彼の姿だけは、真っ黒なままだった。

　その彼の体から、同じ真っ黒な長い影が、高台の裾野を越えてゆくまで、くねくねと一本の細長い帯のように延びた。いや、それは一本ではなく、タコの脚のように何本も延びていないだろうか。それともそれは、私の目の錯覚で、一本が、物凄い速さで、八方に動き回っているのか。いずれにしろ、その影に比べれば、彼の姿など、ほんのちっぽけなもので、その力を漲らせて蠢く巨大な影に、彼は、すっかり操られて、踊りたくもない踊りを踊らされているのではないか。

　そんな彼の姿が、私には、蝶のように見えて来た。人の姿の彼は、砂を弾いたが、蝶の羽は、砂がいっぱいこびり付いて、直に羽はボロボロになり、彼は、砂地の上を転げ回るしかなかった。その姿が真っ白になって、すっかり砂に埋まると、当然、その影も消えた。

　静けさに耐えかねたように、穴だらけの丸屋根が、真ん中から真っ二つに裂けて、高台を真ん中から二つに仕切るように落ち掛かって来た。畳み掛けた二枚の蝶の羽のようではないか。もし、彼にもそう見えたなら、喜んだだろう。

しかし、彼はもう、その屋根の下敷きになって、どうにかなってしまった。と、思っていると、彼は、下から、その二枚に裂けて、二つの半円になった屋根を持ち上げて、蝶の羽ばたくように、それを動かし始めた。

　砂が、その羽の上からも、高台の地面からも吹き上がって、辺りは、砂埃で真っ白になった。するとまた、その白さを裂くように、彼の体と彼の体から生えたように見える巨大な半円の羽から、くねくねと長い一本の帯のような影が、高台の裾野まで、滑り降りていった。先程とは比べものにならない程、更に巨大で、無尽蔵の力を漲らせているようだ。その影が少し揺れただけで、穴だらけの丸屋根の蝶は、砂埃を吹き散らかして、空へ昇って行く。もちろん彼も一緒だ。それは、空全体を暗くした。砂埃に白く覆われてはいても、高台はまた、真っ暗な穴の影だけになった。

　丸屋根の蝶の影も、高台を離れ、くねりながら裾野の先にまで流れて行く。それが、一本でなく、八方に、タコの脚のように何本も延びるのが、はっきり分かった。彼は、暗い空の更に上に、その影を作っている、八個の光源を見付けた。或いは、光源は一つで、八角形を作る八つの点の上を、目にも留まらぬ速さで、飛び回っているのかも見知れない。彼は、丸屋根を羽ばたかせて、そこまで昇り、その光源を全て打ち壊した。

　今度こそ、地上は何処も真っ暗だったが、空の、打ち壊された光源より更に

高い所だけは、青く輝いていた。彼は、蝶のように羽ばたいて、そこまでも近付いて行った。見上げると、輝く部分は、すっかり丸屋根の羽に隠れて、その穴からだけ、光の筋が洩れて来る。その影が、何処かに落ちているに違いない。それは、地上までは届いていなくて、空中の何処かを螺旋でも描いて回っていないだろうか。それもまた、タコの脚のようだろうか。いずれにしろ、彼はまた、その影に踊らされているのだ。

　そこで彼は、裂けた丸屋根に拳固を突き上げ、それを形がなくなるまで壊した。破片は舞って、散り散りになった。彼の姿だけが、残った。人でも蝶でもなく、煙のように見えた。その影が、真っ直ぐ高台の穴の中まで落ちて来ているのが分かった。私は、残る力を振り絞って、穴の影の中に転がり込んだ。影の中には、遙か高みの輝きが届いていて、明るかった。私の体の何処にも、影はなかった。（二〇〇二年二月十三日）

* * *

紐

ギリギリその日の内の済ませなければならない用件で、外に出た。歩きなが

ら、なくしたものの事を考えていた。何処で何をなくしたのか。しかし、考えようとする程、ただなくした事だけが、胸に迫って、何も考えられなくなってしまう。立ち止まってでも、初めから順序立てて、事の次第を追ってみるべきだ。立ち止まる所を求めて、愈愈早足で歩き回った。陽の当たらない、タイル張りの高い壁の脇を、風に逆らって進んだ。人通りも疎らだし、誰にも邪魔されないだろう。立ち止まるだけなら、出来そうだが、何のために立ち止まったか、忽ち、忘れてしまいそうだ。それを忘れないで立ち止まれなければダメだ。しかし、そう確信出来る所に辿り着いて、実際、立ち止まって、考えなければならない事で、頭が一杯になったとして、果たして、それを持ち堪えられるだろうか。恐らくは、頭を一杯にしたまま、何が頭を一杯にしているのか、忘れようとしてしまうだろう。それなら、何処ででも立ち止まって、全て忘れてしまったらどうか。しかし、それも出来ないのだ。その後に、もっとひどい思いも掛けなかった事が、起こりそうな気がするからかも知れない。

　タイル張りの高い壁が終わると、自ずと人の流れに呑まれた。いや、それは、人の流れだったろうか。人と人の間は、随分と開いていて、しかも、それぞれ違う方向に歩き回っていた。人の流れに呑まれたのではなくて、そこで人を動かしている建物の力に、呑まれたようだった。私は、周りの人間がやっているように、辺りをキョロキョロと見回して、見えてくるものの色形を慎重に見極

め、そこを通り過ぎても後で困った事になるような材料がないのを確かめながら、フラフラと進んで行った。

それから、蛍光灯ばかりで照らされた眩しい所を過ぎて、私を呑み込んでいた力が、私を解き放ったようだった。私は、開いたままになっている誰も居ないエレベーターに急いで、そこが何階かも確かめず、一番上の階のボタンを押した。その上の階で、エレベーターの扉が開くと、その先にまた扉があって、それが勝手に開いた。その先にまた扉があって、それもまた近付くと開いた。そうして、私は、ただ扉を見付けては、歩き回っていた。他に、周りには、見るべきものなど何一つなかった。

男と女が、向き合った長椅子に掛けて、体を前に倒し、互いの息が直に掛かる程に顔を近付けて、綾取りをしている。そこは、コンクリートだけで出来た、殆ど壁のない巨大な建物の最上階で、その全く壁のない南側の縁に、二人は居た。直ぐ脇を覗き込めば、遥か下の地面が目に入るに違いない。仕切も何もなくて、立ち上がって、ほんの二、三歩、つい、そちらへよろめけば、真っ逆様に、地面に叩き付けられるだろう。ただ、陽が当たるのは、その南側の縁だけで、二人は、陽に当たっていたくて、そのギリギリの所に居るのかも知れない。一方、私は、北側の一番奥の暗く湿っぽい所に居て、小さな空のカートを押していた。北側には、壁にも見える太くて白い柱と、下の階へ降りる通路があり、

真下に地面を見下ろせるような所はない。その、トラックでも登って来られそうな程、やたらと広い通路から、冷たい風が大きな塊になって、のべつ吹き上がってきて、私を前に押し出す。それでも、風の音はしない。カートの車の音だけが、足元で鳴っていた。二人の方へ近付いてはいるが、建物の端と端で、まだまだずっと離れていた。

　陽が陰り、二人の姿が、薄っぺらな影になった。その向こうは、ただ白っぽい空だけだった。私の居る辺りもそれだけ暗くなった筈だか、明暗の差は均されて、却って目が慣れた。空っぽだと思っていたカートに、何か乗っている。丸っこくて、油紙に包まれて、紐で縛られている。それは、左に寄っていて、その重みで、カートも私も、左へ左へ逸れて行った。私は、カートを手放した。乗っていた包みが、コンクリートの床に転げ落ち、カートだけが、独りでに進んで、その先の鉄柵にぶつかって止まった。コンクリートの床は、平らではなかった。包みは、私の前を、暫くジグザグに転がり続け、それから、意を決したかのように南側に向かった。床は、大きく南に傾いている。その発見を弾みに、私も、包みの後を追った。

　包みは、まるでコンクリートの中に溶けて消えたように、見失われた。私は、急いでその見失われた辺りに行き、床を見詰めながら、そこを、クルクルと歩き回った。まだ、大分あると思っていたが、回っている内に、私は、建物の南

側のギリギリの所に足を掛けていた。遥か下の地面が、殆ど真下に見えた。その場で足を滑らせれば、真っ逆様だ。何とか、そこを乗り切って、慌てて足を暗い方に向けた。もう回るのは已めて、兎に角、その落ちそうになった縁から離れる事だけを考えた。

床に何か落ちている。大きさからして、見失った包みに見えたが、白い布にくるまれた赤ん坊だった。赤ん坊は、綾取りする男女の直ぐ足元に転がされていた。近付く私と目が合うと、赤ん坊は、ゆっくりと顔を皺だらけしてから、高くかすれた声で、真っ赤になって泣き出した。私は、二人の手元を見詰めて、綾取りで、何の形を作っているのか、見て取ろうとした。しかし、彼らの指には、糸も何も絡んでいなかった。彼らは、ずっと、指と指を絡めていたのだ。指先は真っ赤で、擦り剥けて血が滲んでさえいた。それでも、指と指は忙しく擦れ合った。指に盛んに息を吐き掛けては、痛みを和らげているようでもある。

私は、ずっと、その様子を、後退りしながら見ていた。ただ、左手は、白い布を掴んでいて、そこから、赤ん坊のしゃくり上げる声が洩れてくる。私は、建物の真ん真ん中まで後退って、足を止めた。そこが真ん中であるのは、床に東西南北に十文字に引かれた白い線の交わるので、そうと分かった。私は、布にくるまれた赤ん坊を、その線の交わる上に置こうとした。赤ん坊が、体を揺すって、声がかすれて何も聞こえない程、激しく泣き出した。私は、布だけ

強く握って、横に向け、赤ん坊の体の揺れるに任せて、赤ん坊だけを、裸でそこに押し出そうとした。赤ん坊の体は、今にも布から滑り落ちそうだが、ギリギリのところで、赤ん坊も必死に布を掴むらしかった。

　私は、なくしたものについて考えようとしていた事を、思い出した。布を揺すって、赤ん坊を振り落とそうとしながらなら、それで頭が一杯になっても、それを持ち堪えて、それについて考えられそうだった。白い線の交わる所を見据えると、正にそこで、何かをなくしたように思えてきた。その白い十字をさえ、見据えていれば、何時か必ず、なくしたものの姿が、そこにまた、戻って来そうだった。

　力尽きたのか、赤ん坊が、布から滑り落ちて白い十字の上に、頭から落ちて、ゴツンと音がした。綾取りしていた二人が、直ぐ側に来ていて、二人して、足元の赤ん坊を、辿々しい手付きで、逆さまに拾い上げた。私は、白い布を全て細く裂いて、それらを一本に結び合わせて、紐を作って、二人に渡した。二人は、それで赤ん坊をグルグル巻きに縛って、また、南側の縁の長椅子に、赤ん坊を間に挟んで、向かい合って腰を下ろし、赤ん坊の体をクルクルと回しだした。

　陽がまたサッと差して、白い紐でグルグル巻きの赤ん坊の姿が、抜けるように輝いた。私はまた、後退りしながら、それを見ていた。白い線を探したが、

床は、凹凸の激しいザラザラした黒っぽいコンクリートだけだった。私は、建物の中の自分の位置を見失って、足が縺れて、転びそうになった。硬いものに躓くと、油紙に包まれて紐で縛られた、丸っこいものだった。紙が破れて、中が覗いたが、空っぽに見えた。破れ目を掴んで、千切れるだけ、紙を引き千切った。殆ど紐だけ残って、紐は、ただ丸っこいだけの空っぽな中味を縛り付けていた。

　私は、それを二人に見せに、南側の長椅子に大股で向かった。床の凹凸のせいか、体が激しく揺れて、目の前に見えているものも、その形が全て流れて入り交じる程に、大きく揺れた。長椅子まで来て足を止めれば、流れる形は、全て元に収まった。長椅子には誰も居なかった。長椅子と長椅子の間に、赤ん坊が、裸で転がされていた。白い紐は、床の縁の小さな出っ張りに縛り付けられていて、そこから下に垂らされていた。二人は、そこから下に降りて行ったに違いない。それとも、そう見せ掛けているのか。手に持っている丸っこいものの紐も、すっかり解けて、足元でこんがらがっていたが、もうボロボロで使い物にならないようだった。私は、ただ空っぽなものを、手に持っている筈だった。それは、全く透き通っていて、重みもなかった。掌を或る角度に向けた時だけ、微かなザラリとした手触りが伝わるようだった。私は、腰の辺りに疲れを覚えて、長椅子に仰け反って掛け、その透明な物体を何時までも捏ね回して

いた。そうしていられる間は、なくしたものの事を考えずに済みそうだった。

　北側を見ると、男と女が、向き合って歩き回りながら、綾取りをしている。弾みで、腰と腰がぶつかったりすると、女が歓声を上げた。彼らの足元には、白い十字が引かれていて、暫く歩き回って、足が縺れたりすると、必ずその十字に戻って、体勢を立て直した。私は、出っ張りに引っ掛かっている白い紐を取り上げて、それで、空っぽなものをグルグル巻きに縛って、白い線に乗って、真っ直ぐ彼らの方に近付いた。足取りはどんどん重くなって、時間が掛かったが、何とか十字の真ん中まで来ると、私は、手ぶらで、独りで綾取りをしていた。二人の姿もなかった。

　それから、私は、北の通路を通って、突風に髪を振り立てながら、綾取りを続けたまま、喉を嗄らして、建物から降りた。見上げると、最上階から赤ん坊の泣き声が聞こえるようだった。私は、耳を塞いだ。なくしたものの事が、頭の中に溢れてきた。そのまま建物の周りを何周もしたが、壁ばかりで、何処からも、中に入る事は出来なかった。北側の一番風の当たる冷たい場所に蹲って、私は、綾取りの紐で自らの体をグルグル巻きに縛って、すっかり赤ん坊になった。寒さで意識を失い掛けると、救急車のサイレンの音が遠くに聞こえる。赤ん坊が建物の最上階から落ちて、助かる見込みはなさそうだと、早速集まった野次馬の一人が囁いていた。その声を聞き取れて、少しは慰められたような気

になれたのかも知れない。（二〇〇二年二月十五日）

＊　＊　＊

畝

　手元の紙を見ると、黒丸が三つ縦に並んでいる。その横にシミのように見えるのは、文字に違いないが、読み取れない。読み取れれば、完璧に何の間違いもなく、事を済ませられるに違いないが、完璧に巧くゆくのは、何処かおかしなところがあるからではないか。完璧は、そのおかしさが混じり込んで、却って、完璧でないものより劣るかも知れない。完璧を、何処かおかしいとしか感じられない者の、僻目か。

　兎に角、その紙に書かれている通りにするのが、目下の私の仕事だ。そのためには、真っ先に、灯りを点さなければならない。昼間なのに、そこだけが真っ暗だった。そこだけ何かで覆われているからだろうが、それが、黒い布でなのか、分厚い石の壁でなのか、見当も付かない。その覆っているものも、また何かに覆われている。その紙だけ持って、暗い中に入って行くしかなかった。

　男達の、声と足音が聞こえた。彼らとぶつかっても何処かに転げ落ちたりし

ないように、その場にしゃがみ込んだ。それから、自分がここに居るのを、男達に伝えようと思った。どうやら声は出ないようなので、地面を引っ掻いて、音を立てようとした。指先に、砂利が幾つか引っ掛かって、それらが擦れ合ったようだが、それにしては、音は出なかった。替わりに、土の匂いが鼻を付いて、目に涙が滲む程だ。男達は、その匂いで私に気付いてくれたのか、足音がぴたりと已んだ。

「火があれば、貸して貰えませんか？」と、私は、言ったようだった。しかし、声は出ないのではなかったか。

「俺達は、もう大分来た。そろそろ、食いもんにありつけても、いい頃だ。」と、一人が、隣に囁くように言うのが聞こえた。

「いいや、まだまだ、歩き出したばっかりじゃないか。」と、その後ろから、上擦ったような乾いた大声が、被さってきた。その後ろから、私の声が、掻き消されるのが分かった。その後ろの男が、火を持っていた。その男に向かって、初めに囁いた男が、振り返りざま飛び掛かっていった。火を持った男は、黙り込んだまま、崖の斜面を転げ落ちて行くようだった。もちろん、それらしい音から推測するだけだ。火は、斜めに遠ざかって、赤味を増した。

「火が落ちて行く。」と、私は、呟いた。その声は、男達に忽ちに伝わるらしく、ざわめきが起こると、何人かの汗臭い体が、私を囲んで、擦り寄ってく

る。

「土を被せたいんだが、手伝ってくれるか？」と、一人が、私の耳元で、囁いた。ギリギリの小声を出すために、力み返っているのが、肌から伝わる。私は、手元の紙を見たかったが、真っ暗ではどうしようもない。それに、私には真っ暗だか、彼らには、そうでもないのかも知れない。紙の中味が、私にだけ読めず、彼らに読まれてしまうのは、危ないようでもあるが、ここは、彼らにも見えるように紙を翳して、彼らから、書かれている中味を聞き出すのも、一つの方法かも知れない。しかし、私の両腕は、押さえ付けられているようで、全く動かせない。何時までも、黙っている訳にもいかない。

「その前に、火を拾って来るべきでしょう。」と、私は、力む事もなく、男の一人より、もっと小さな声で反論した。擦り寄せられた体が、強張るのが分かった。私は、彼らの体を易々と擦り抜けて、斜め下に見えている火の方に向かおうとした。その方向に、私の影が、長く延びた。後ろからの灯りが、作った影だ。振り返ると、男達は、手に手に、火を掲げ持っていた。

「土を被せたいんだ。手伝ってくれ。手伝わないんなら、これをどうにかしてくれよ。」と、男達は、大きな穴の中の白木の箱を指差した。その少し先の、朧に照らされている辺りに、一人だけ離れて、男が、鍬を振って、畝を盛っているようだった。まだ、始めたばかりで、その辺りの黒い地面は、概ね平らだ

った。私は、紙の、三つ並んだ内の初めの黒丸の意味が、分かったように思えた。私は、全員で私を見詰める男達を避けて、そちらに向かった。

「これから、畑を作る訳じゃないんですよね。何が出るんですか？」と、私は、声を掛けた。男は、黙って、鍬の先で土を弄るような動きを続けた。私は、その中に輝くものを見付け、腕を木の枝のように撓らせて、それを素速く掴み取った。見ると、掴み取ったのでなく、指先で、それを突き刺していた。それは、死んだ魚のようだった。

「ここは、昔、海だったんでしょう。」と、私は、得意になって言って、すっかりしなやかな木の枝のようになった腕を振るっては、次々に、魚の腹を突いて、それを、男達の取り囲んでいる箱の中に、放り込んでいった。腕は、風を切って、鞭のように、ビュンビュン鳴って、その度に、男達の火が、同じように震えた。箱は、蓋が少しだけずれて、そこに狭い隙間があるだけだったが、私の腕は、正確にそこに魚達を滑り込ませているのだった。男が、鍬の先で土を弄れば、魚は、幾らでも掘り出されるようだ。単なる勘だが、そろそろ、箱の中は、魚で一杯ではないだろうか。私は、背伸びして、箱の中を隙間から覗こうとした。箱の白い形は辛うじて見えたが、その辺りは、殆ど真っ暗だった。私の腕が震わせた空気で、男達の火が、どれも消え掛けているのではないか。私は、慌てて、そちらに戻った。男達は、穴から離れて、彼らだけで内向きに

固まって、何かごそごそやってから、一斉に私の方を向いた。
「箱と火をやるよ。お前のものだ。」と、一人が言って、私に、明るい火を差し出した。火は、それ一つ切りだった。消えそうな火を集めたに違いない。
「箱はどうしたらいいんですか？」
「持って帰れ。」
「穴の中なのに。」
男達はもう、遠い赤い火に向かって、一列になって歩き出していた。火は、彼らの先頭の男の手にあった。私は、箱だけを押し付けられたのか。しかし、彼らが遠ざかっても、私の居る辺りは明るいままだった。私は、穴に跨って、腰を落とし、箱を持ち上げようとしてみた。持ち上がる筈がない。
「穴の中に降りろよ。そうしたら、俺が上から土を掛けてやる。」と、穴の脇に立って私を見詰める、鍬を持った男が言った。私は、言われた通り、穴に降りた。上から冷たい土が降ってきたので、私は、頭を押さえて、箱の脇に蹲った。二つ目の黒丸の意味が分かったように思えた。男の声が聞こえたような、ので、上を向くと、土が目に入って、何も見えなくなった。私は、また蹲って、涙が、目の中の土を押し流すのを待った。その間にも、土は背中に降り掛かって、その度に、私の背中は、ぶるりと震えて、自ずと小さく丸まっていった。遂に、頭は、穴の底に着いて、片方の耳が、箱の側面の下の端に押し付けられ

た。
　その耳に、箱の中の話し声が、聞こえてきた。耳を澄ますと、それが主に女の声で、もう一つの男の声は、ただ相づちを打っているだけであるらしいのが、何とか分かった。それが、最後の黒丸とどう係わるのか。それが私に知れるには、これから何が起こらなければならないのか。
「他にも、聞こえるだろう。」と、男の声が、土と一緒に上から落ちてきた。
「いや、何も。」
「じゃあ、やめだ。」と言う声と共に、土は落ちて来なくなった。私は顔を上げた。涙が、弾力を持って、最後の土を目から押し出した。私は、首を振り立てて、光の方を向いた。手にしている紙の縁に、火が着いていた。ここを照らすただ一つの灯りだ。火は、紙のそこだけで燃えて、それより広がらないようだ。穴は、すっかり黒い土で埋まっていて、その上に、私と白木の箱が乗っていた。私は、立ち上がって、少し顔を上げ、出来るだけ遠くに向かって、耳を澄ませた。何かの音が聞こえた。男の言う、他にも聞こえるものとは、この音に違いない。見回すと、男の姿はなかったが、彼が盛った畝が、一本、目に付いた。
　私は、箱を取るか、畝を取るか、迷った。答えは、紙に書いてある筈だ。間近の火のせいか、黒丸の横のシミのように、ぼやけていた文字が、はっきりして

来た。頭に、完璧という事が浮かんだ。文字を読み取れば、その通りにするしかない。そうしてそれを完璧にこなせば、自らを終わらせる事になるように思えた。私は、そっと文字から目をずらして、直ぐ上の小さなる火を、じっと見詰めた。辺りが、ズンズン暗くなるのが分かった。炎の形だけが、何処までも深く延びる闇の中に、くっきりと浮かび出た。私の体も紙もそこに書かれたものも、闇に呑まれた。私は、分かったように思えていた筈の、二つ目の黒丸の意味が分からなくなった。それは、一つ目の黒丸にも及んだ。一つも二つも同じか。

　それから、私は、炎の輪郭を、最後の拠り所のようにして、じっと見据え、そろそろと先に進んだ。箱の方なのか、畝の方なのかは、分からない。後ろで、ゴトリと音がして、そこから男と女の話し声が、耳に飛び込んできた。それは、はっきりとはしていたが、表面がツルツルで、放って置けば、また耳から流れ落ちて行くのではないか。そうなるのを確かめから、また私は進んだ。遠くの何かの音が、近付いてくる。その音に、何時の間にか、手元の炎は掻き消されていた。他に火を消すものはない。辺りは真っ暗な筈だったが、足取りはしっかりしていた。足を踏み出すたびに、そこだけ地面は、照らされるのではないか。もう、紙も持っていなかった。或いは、すっかり燃えてしまったのか。しかし、紙をなくしたのは、何とも心細い。足が止まった。

　近付いてくるばかりだった何かの音も、ぴたりと止まった。それから、最後のトドメのように、ドーンと大きく一つ響いて、音は、すっかり已んだ。周りが、ゆっくりゆっくり明るくなって、私はまた、昼間の光に囲まれた。手元の紙は、まるで重みがなく、真っ白だったが、それは、燃えて灰になって、真っ白なのだ。直ぐにそれは、ハラハラと、風に溶けた。傍らの白木の箱を開けると、中は紙で一杯で、どれにも、黒丸が縦に三つ並んでいた。それとも、そう見えるだけで、実は、全て真っ白なのかも知れない。何枚かを掴み取って、通行人に見せて回って、それを確かめようとしたが、誰も目を背けて、紙を見ようともしない。私は、やるべき事を、やり損なったに違いない。

　私は、そんな私から目を背けたくなった。急いで、箱の中に入り、横になって、中から蓋をした。それでも、薄い白木の板を通して、外の光が染み通り、中は明るかった。紙には、黒丸ではなくて、ただ文字だけが、びっしり並んでいた。男と女が何年にも亘って交わした細々した会話が、一々書き込まれている。目を背けても背けても、その文字が目に入って来る。それで、私はやっと、三つ並んだ黒丸の意味を分かったのだろうか。（二〇〇二年二月十七日）

*

*

*

骨

彼らは、硬い地面を、石の細い棒でコツコツ打っては、背中を丸めて歩き回る。埋められた骨を探し出すために、交代で次々に人が派遣されているようだ。次々に交代するのは、同じ人間が、そんな事ばかりしていては、怪しまれるからだ。その一人が、暗い中庭を歩き回っているのを、男が、窓から眺めている。男は、剃刀を研いでいた。部屋の端から、熱い蒸気が吹き上がると、それが合図のように、男は、剃刀を振り立て、紙細工を作り始めた。庭を歩き回っていた者が、窓の横のドアを開けて入って来る。

男の身の丈程の幅のある白い紙が、分厚いロール状になっていて、男はそれを引っ張り出しては、剃刀で切り刻んでゆく。のべつ、紙を裂く音が、窓ガラスを震わせて、部屋中に響き渡った。それでも紙細工は、なかなか大きくならない。使われるのは、細長く歪な形に切り取られたほんの一部で、その他のいらない紙が、床に投げ捨てられて折り重なり、みるみる床は、それらの紙で埋まった。石の棒を持った者が、その紙の上を叩いて回っても、紙がビュルビュルと震える音がするだけで、顔付きばかりが険しくなる。

そうして、時間は掛かったが、紙細工が、もう直ぐ完成する。それは、頭が天井に着くくらいの、大きな人の姿をしていた。歪な形の大きな紙の切り屑が、

部屋中で跳ね上がり、白い巨人を取り囲む、嵐の海を象るかのようだ。その大波の逆巻く中で、石の棒を持った者は、ふらつきながら、尚も苦闘を続けている。白髪混じりで、深い皺の土気色の顔から脂汗を滲ませ、明らかにもう年輩だった。その顔を、最後の紙を裂きながら男がちらっと見ると、その者は、慌てて帽子を被り、大きなマスクで目だけ出して顔を覆った。

　くねくねと細長く撚られた紙が、人の形の腰に巻き付けられて、紙細工は出来上がった。男は、その人の姿の太腿に、胸を押し付け、体を預けたまま、剃刀の刃に溜まった紙の細かな滓を、指で摘み取っていった。その滓が粗方剥がれて、刃がまた剥き出しになると、人の姿の腹が独りでに大きく割れて、中から、小さな人の形の紙細工が、飛び出てきた。それは、床に散らかった紙を踏み潰し、硬い物が硬い床に落ちたような、ゴツンと言う重い音を立てて、床に立った。それから、まるで生き物のように、足を交互に出して、紙の荒波を押し分けて進み出した。男は、それがそのように歩き出すように計算して、裂いた紙を床に配置したに違いない。ただ、要らない紙を投げ捨てていた訳ではなかったのだ。男は、タバコの煙をくゆらせ、目を細めて、それを眺めていた。

　石の棒を持った者が、荒い息を吐き、その歩く紙細工に後ろから近付いて、石の棒を振り下ろした。殆ど、金属音とも聞こえるような、高い音が突き上がり、四方の壁を跳ね返って、暫く部屋の中で響き続けた。相手は、紙細工なの

に、どうしてそんな音が出るのか。紙に見えたのは、紙そっくりの薄い金属か、セラミックか何かだろうか。その小さな白い人の形は、ドアを開けて、中庭に出た。

　石の棒を持った者が後を追おうとすると、突然、男が、剃刀を振り立てて飛び上がり、腹の割けた大きい方の人の形の左腕を、スッパリと切り落とした。それもまた、硬い物が硬い床に落ちるゴツンと重い音がした。石の棒を持った男は、足を止めた。しかし、男が、その白い腕を拾い上げ、それに頬擦りしながら、ドアの方に向かうのを見て、ドアに急いだ。

　小さな人の形は、庭に出ても、歩き続けた。そこに敷き詰めてある石の凹凸が、それを歩かせるように配置されているに違いない。石の棒を持った者は、そこに踏み出すなり、石の出っ張りに躓いて、前に倒れ込んだ。石の棒は、杖の役目を果たすどころか、その者の腹を激しく突いた。それでも、直ぐに立ち上がって、次の一歩を踏み出すと、また前につんのめって、全身が、石畳に叩き付けられた。先程は、普通に歩けたのに、どうしてそうなるのか。前を行く人の形を見ながら、歩こうとするからだろう。他に理由は見当たらない。しかし、そうと分かっても、恐らく膝の皿が割れたか何かで、立ち上がろうにも、足が動かない。そのまま後ろを振り返ると、ドアは閉まっていて、窓から男の顔だけが覗いている。

　小さな人の形は、そのまま、真っ直ぐ進んで、庭の真ん中に掘られた、もう使われていない涸れた井戸に落ちた。それが井戸の底に落ちる、硬い物同士がぶち当たるような音がして、石畳までをも微かに震わせた。それが、膝に伝わって、膝の皿が元に戻ったのか、石の棒を持った者は、難なく立ち上がれた。腹をさすると、破れてはいないが、ミミズ腫れのような筋が、臍の下から縦に一本引かれていた。石の棒が、真ん中で割れて二本になっている。それを両手に一本ずつ持って、井戸に急いだ。もう、躓かなかったし、石の凹凸が気になって歩き難い事さえなかった。その代わり、足を止める事も出来なかった。後に続いて、頭から井戸に落ちた。二本の石の棒だけが、井戸の縁に当たって手から放れて大きく弾け飛び、石畳に落ちて転がって、カラカラと乾いた音を立てた。

　井戸の底では、ミミズ腫れに沿って腹が縦に裂けて、その中に小さな人の形がすっぽり入り込んでいた。しかし、小さいにしても、そんなに小さかっただろうか。当然、腹の中は、異常に重くて、腹の肉が、膝の直ぐ上辺りまで垂れた。暗い中、井戸の側面の出っ張りを探り当てては、そこに手を掛けて、そこを登ってゆくしかなかった。そうしているのは、私だった。黙っているのも気詰まりなので、私は、腹の中に向かって語り掛けた。

「どうして、登ろうとするんですか？」

「全くだ。どうして、登ろうとするのか？」と、腹の中から答えが返ってきた。
「誰が、登ろうとしているんですか？」
「全くだ。誰が、登ろうとしているのか？」
「私は、答えを聞きたくて、あなたに尋ねているんですか？」
「少なくとも、自分は、聞きたい。但し、お前にではない。」
「では、誰に？」
「全くだ。では、誰に？」
　暫くして、私は、井戸から首だけ出していた。二本の石の棒が、風に吹かれて、石畳の上を転がっていた。遠くて、転がる音は聞こえなかった。私は、骨を探しに来たのだ。骨の音を、聞き出そうとしていたのだ。私は、そこで宙返りをして、また頭から井戸の底に落ちて行った。頭が、硬い井戸の底に打ち付けられると、硬い物同士がぶち当たる、ゴーンと鈍く重い音がして、暫く井戸の中を響き渡った。それが、収まり掛ける頃、井戸の底で、何かが擦れ合って軋み合うような音が、聞こえてきた。私は、逆様のまま、その音の辺りを、掌で撫で回した。何かを掴んだ。手探りだったが、私は、その音に触れているように感じた。それが、骨でなくて何だろう。私は、その一本を掴み上げた。真上の空が、井戸の穴の形に円く切り取られて、小さく見上げられる。掴み上げ

たものをそこに翳すと、骨の形の輪郭が浮き出るようだった。
　それを両手で掴んで、真っ二つに折った。その左右の折れ目から、別々の二つの声が、吹き出すようだった。その声のせいで、井戸の底に、つむじ風が起こった。私の体は、逆様のまま、すっかり硬直したように揺れて、井戸の側面に打ち当たった。それでも、次の骨を拾い上げて折ると、また、同じ二つの声が吹き出して、つむじ風を、更に強くした。私の体は、独楽のように周りながら、浮き上がっているように感じられた。腹が割けたに違いない。白いものが、体から飛び出して行くのが見えた。
　すると、風がやみ、体の回転も止まった。もう逆様ではいられなかった。私の体は、紙のようにグニャリと曲がって、狭い中で、何とか身を起こした。白い人の形は、細かく砕けていた。そのどれを取り上げても、骨の欠片のようだった。井戸の側面の出っ張りに手を掛けたが、握力が落ちたのか、それを掴みきれなかった。もう先程のように、登っては行けないのだ。白い一欠片を、二つに割ってみたが、声もしなければ風も起きない。私は、白い欠片を掻き分けて、井戸の底の、何かが擦れ合って軋み合うような音を見つけ出そうとした。カラカラと小さな音が幾つもするのは、私の腕が白い骨になって、白い欠片と打ち合うからからか。
　ようやっと、それらしい物に、指先が触れた。掴み上げると、それは、私の

膝の割れた皿のようだった。もう一つ見付けたので、両手に一つずつ持って、打ち合わせると、その衝撃は、私の頭に直に響いて、私の頭の骨を砕くようだった。耳の底に残っていた、先程の折った骨から吹き出した二つの声が、頭の奥から漏れて出た。二つとも女の声で、一つは、濡れていて温かく、もう一つは、乾いていて冷たかった。乾いている方が、濡れている方をも乾かして、二つは、私の直ぐ鼻先で一つになった。それをパクリと銜え、顎をカタカタ鳴らして、私は、その声を噛み砕いた。顎の砕ける音が、直ぐに続いた。どうやら、井戸の中を響き渡って突き上がる甲高い声が、骨になった私の全身を、粉々に砕いているらしかった。（二〇〇二年二月十九日）

*　　*　　*

肉食

　鳥のような顔の痩せた小さな男が、部屋の中で、眠り込んでいる。その獣臭い匂いからして、男は、肉食に違いない。部屋は、私と男だけで、鳥も獣も虫もいない。目を覚ませば、私を食おうとするだろう。それに備えて、籠の中に、肉を用意してある筈だったが、見当たらない。男が目を覚ます前に、部屋の外

に出さなければならない。掴まえようと近付くと、気配を察して、男は目を覚まし、素速く私の手から身を躱し、カーテンの後ろに逃げ込んだ。部屋には、角を何本も生やしたように見える、尖った形の家具ばかりが、幾つも所狭しと置かれてあって、カーテンの真ん前にも、でかいのが一つ居座っている。私の体は大きすぎて、とてもカーテンの後ろには入って行けない。カーテンを引っ張って、その下を覗き込んでも、男の姿を見る事も出来ない。ただ、ゴソゴソと、狭い中で体勢を変えているらしい音は聞こえる。

　私は、もう寝る時間だった。何が何でも、男を外に出してからでなければ、寝られない。寝ている間に、体を囓られてしまう。棒を見付けてきて、それでカーテンの後ろをつついた。棒の先をカーテンに打ち付けても、襞がパタパタと音を立てるだけで、男はどうなっているのか、まるで分からない。カーテンの前の、角を生やした家具を退けるしかないのか。夜も遅く、研ぎ澄まされるような静けさだ。家具を動かせば、床を引きずる音が、隣近所に響き渡るだろう。揉め事は鬱陶しい。いや、その前に、角に引っ掛けられた重たい物を一々取り外すだけでも、大仕事だ。一晩、掛かってしまうかも知れない。何を遣っているか分からない。ギリギリ家具に体を擦り寄せ、棒を思い切り差し込んで、カーテンを捲り上げた。床に、鳥のように細く短い、黒く汚れた男の片足の脛が見えたが、どうする事も出来ない。

　私は、棒をそこに置きっぱなしにして諦めた風を装い、空の篭を持って、その中を軽く引っ掻いたり、手の甲を擦り付けたりして、さもそこから肉を取り出すかのような音を、ゴソゴソと立てた。前にもこんな事があったが、その時は、それで男をまんまとおびき出し、男の方から篭に飛び込んで来たところを、とっ捕まえる事が出来たのだ。しかし、同じ遣り方は、二度は通用しないらしい。カーテンの後ろは、静まり返ったままだ。音だけではダメで、やはり生肉の匂いが必要なのか。外に出て、何か生き物を捕まえて来るしかないのか。私は、軽い朝食を摂ってから、一日中、溜まった仕事にずっと掛かりきりで、やっとそれを済ませたところだった。疲れ果てて、全身の節々は強張っていた。真っ暗な中で、獲物を追い回す事など出来る訳がない。しかし、他にどうしたらいいかも思い浮かばない。小さな懐中電灯があるので、兎に角、外に出れば、運良く直ぐに獣の死骸でも見付かるかも知れない。

　外に出ると、直ぐに、土を固めただけの階段が、闇の中を降りて行く。そこを、懐中電灯で照らしながら下って行くと、地面の冷たさが足から伝わって、腹まですっかり冷えた。階段を下り切ると、腹が痛み出し、全身が熱っぽくなって、悪寒がした。しかし、横になるのはもちろん、しゃがみ込む事も出来ない。先ずは、少しでも地面の冷たさから逃れて、体を温めなければならない。当てもなく、辺りをよろよろ歩きながら、懐中電灯を照らして回った。

そこは、小さな公園の隅っこなのか、ブランコやら何やらの貧相な遊具が一列に並んでいて、その先に、錆びてあちこち赤くなった、大きな鉄の箱を見付けた。何かの機械だった物が、要らなくなって、子供の遊び道具にでもなればと、置き捨てられた物だろう。中に入れば、自分の体温で中を温められそうだ。側面に一つだけ開いた、地面スレスレの小さな四角い穴を潜ると、中は殆ど空っぽだった。しかし、上が、覆いも何もない。これでは、熱は逃げる。しかも、下も、底が抜けていて、外よりずっとじめじめした地面から、もっとひどい冷たさが伝わってくる。いや、足踏みして直ぐ分かったが、じめじめしているどころか、まるで泥濘ではないか。足元を照らすと、泥の表面が、テカテカと光った。

その中に、更に鋭く光る小さな点々が幾つも見られた。何かが映っているのだ。見上げると、何もなく見えた所に、鳥のような顔の小さな男達が、箱の上をすっかり覆わんばかりに、鈴生りに吊り下がっていて、じっと、泥濘を見下ろしている。その姿は、懐中電灯を向けなくても、見て取れる。泥濘が、懐中電灯の明かりを吸い取って、自ら光りだし、それに照らされたとしか、考えようがない。その泥濘の表面が、緩やかに波打つようだった。ただの光りの効果でもなさそうだ。男達は、それをじっと見詰めている。そこに何か居るのだ。その波打つ中に、私の影が巻き込まれてしまっているのは、間違いない。ただ、

巻き込まれている中の影は、それを見下ろす私より、ずっと厚みを帯びて、肉のようではないか。見下ろしている方が、余程、影のようだ。そして、それに絡み付いて離れないもう一つの体が、光る泥濘の表面の直ぐ下で、決して表面に出ないように、巧みに身を捩って、狭い中を泳ぎ回るようだ。

　影とは言え、勝手に絡み付かれるのも、面白くない。私は、両腕を振り上げ、背筋を反り返らせて、影を泥濘から引き上げるような動きをした。そのせいかどうか、私の影に絡んでいる体の、丸みを帯びた一部が、泥濘の表面に白く浮いて出た。上の男達が、一斉にボトボトと泥の上に落ちて来て、その白い肉目掛けて、競って襲い掛かった。彼らの好物に違いない。襲われる方も、艶めかしい全身を泥の上に振り立てて、男達に立ち向かった。私は私で、そんな争いの中から、自分の影を引っ張り上げようと、体を何度も振り立てるのに懸命だった。私の影がどうなっているかは、さっぱり分からないが、その丸みを帯びた白い体は、粗方、食い付くされたようだ。愈愈、次は私の影だろうか。しかし男達は、どいつも、泥塗れでその場に力なく横たわるようだった。そして、食われた白い体に仕返しされるかのように、彼らの体は、泥になって沈んで行った。また、元の静かな泥濘に戻り掛かると、私の影が浮かび上がってきた。私は少し安心したが、男達の体の分だけ泥濘は、盛り上がってしまっていて、たった一つの出入り口である、小さな四角い穴が、すっかり泥に埋まってしま

っている。
　食われた筈の白い体が、また泥を波打たせ、今度は初めから、丸みを帯びた体の線を、泥の上にすっかり晒して、私の影に絡み付いてきた。（二〇〇二年二月二十三日）

＊　　　＊　　　＊

呼吸法

　火が、右の脇腹に入って来た。見回したが、火の気はない。ただ、腹が痛くて、掌で押さえていただけだ。それなら、その掌の火が移って、腹は燃えているのだ。では、掌は、何処から火を運んできたのか。手の甲に、コードが繋がっている。そこから電気が来れば、掌が電熱器になる。掌をそっと、オデコに当ててみる。頭の中が燃え出しそうで、慌てて掌を離した。
　しかし、掌が電熱器であるのは、分かっていた筈だ。なぜかは忘れたが、自分から誰かにそうして貰ったのだ。その時に、掌が熱いのを決して忘れてはならないと、確か、念を押された。しかし、それを忘れてしまってから、どれだけ日が経っただろう。その間、掌に触れたものの中に、次々に火を入れていた

事になる。いや、そうとも限らない。コードの先のコンセントが抜けていたような気もする。

　それはそうと、今問題なのは、腹の中で燃えている火だ。どうやって消すのか。巧く消えたにしても、胃や腸が黒焦げでは、もう物を食えない。コードの繋がっていない方の手を近付けてみるが、腹全体が熱くて、とても触れられない。痛みの事は、考えないようにしてきた。それとも、痛みなど通り越していて、考えずに済んでしまうのか。

「火を分けて貰えませんか？」と、一人が、話し掛けて来た。後ろには、同じ年恰好の男女が、ゾロゾロ控えている。

「構いませんが。でも、どうやって？」と、咄嗟に答えてしまったが、もっと勿体を付けるべきだったかも知れない。彼らの身なりは、見窄らしくて、目付きも、何処か切羽詰まっているようだったから。

「何人か居ますし、色々試せるでしょう。それにしても、色と言い、勢いと言い、惚れ惚れしますね。熔鉱炉の中を覗かせて貰っているようです。」

「喉が渇いて、兎に角、水が欲しいんですが、熔鉱炉にいきなり水を掛けたんじゃ、ぶっ壊れてしまうでしょうか。」

　何も答えず、初めの一人は、急に暗い顔になって押し黙ったまま、面と向かって抱き付いてきた。腹と腹が、ぴったり合わさる。何も感じないが、目の前

の顔は、じっと熱いのを堪えている風だ。しかし、汗ばんだりはしていない。熱くて触る事も出来ない所へ、いきなり腹を押し付けて、呻き声一つ上げないのだから、忍耐力には敬服する。それとも、そんなには熱くないのか。

　一人目は、男だったが、彼は息を一つ吐いてゆっくり離れ、後の者達の方を振り向きもせず、一人で立ち去った。火を待ち侘びている彼の家族か仲間の所に、帰るのだろうか。

　二人目が、また首に腕を回し、黙って抱き付いてくる。同じように顔を顰めて暫くじっとしていて、息を一つ吐いて離れ、何処かへ立ち去った。三人目も、同じようにした。

「色々試すんじゃなかったんですか？」

　四人目は、その問いから逃れるかのように、急いで抱き付いてきて、また同じように離れて行った。しかし、離れ際に、うっとりした表情になって「あぁ、気持ちいい」と、言ったように聞こえた。

　五人目は、男だったが、流石に後ろめたいのか、目を伏せたまま、暫く固まっていた。それでもやはり暗い顔で怖ず怖ずと同じ事をしようとして、手の甲のコードにふと目が行くと、直ぐさま晴れやかな顔になった。それから、電熱器の掌をそっと持ち上げて、自らの腹に押し当てた。初めから、顎を反らせ気味にして、うっとりとした表情を隠そうとしなかった。掌の熱を、思う存分満

喫したかの風情で、彼は、フラフラと立ち去った。何人か、同じ事をして、大人達の後ろに隠れていたらしい、子供が一人現れた。背丈と同じ程の木の棒を持っていて、それを熱い掌に握らせて、暫くじっと押さえている。棒の色は変わらないが、唾を付けた子供の指が、棒の表面に触れると、唾は直ぐ小さな湯気になった。子供は、棒の片端を指で摘んで持ち、それを引きずって立ち去った。残りは一人で、女だった。いきなり、目の中を覗き込んできた。

「瞳の中にも火が入って来た。」と、女は言った。

「ハハ、そんなデタラメには、騙されません。」

「もう、体中に火が回っているらしい。処置なし、かな。」

「そんな事を言うあんたの頭こそ、汚いハラワタから湧いた毒が回っている。間違いない。燃えているのは、腹だけだ。」

オデコとオデコを擦り合わせ、ギョロリと目を見開いた女は、瞳から瞳へその火を移す積もりらしい。女の額は張りがなくて、その弛んだ肌が吸い付いてきて、額の上で薄い生肉をこねくり回されているような感じだった。女の二つの瞳の中に、小さな炎が点った。しかしそれは、女が、独りで点したものかも知れない。炎は、瞳の中で見る見る拡がり、女は、目を輝かせてぐるりと辺りを見回し、時々両腕を翼のように延ばしたりしながら、嬉しそうに何処かへ走

り去った。
　相変わらず、腹は燃えている。元のままだ。いや、何か違う。初めの男が、腹を押し付けてきた時の感触が、今頃になって甦るのか。そして、その感触が、腹の中に切り込んでくると、それは、猛烈な痛みになり、獣のような喚き声を上げ続けなければ、とても遣り過ごせるものではない。その感触が、熔鉱炉の中で、渦を巻きながら、ゆっくりゆっくり燃えてゆくのが分かった。そして、それがそこで燃え尽きない限り、痛みも収まらないのも見当が付いた。その最後の燃え滓が、やっと火の中に見失われようとする時、もう、二人目に押し付けられた腹の感触が、待ち構えていた。そうして、それがまた入って来て、その齎す痛みを全て受け取るしかなかった。待ちかねた五人目の感触が甦っても、何も変わらなかった。奴が、電熱器の掌を自らの腹に押し当てた感触が、そっくり切り込んできて、その燃え尽きるまで、全く同じ痛みに襲われた。それからやっと、子供の番が来て、その時だけは、痛みはうっすらとは引いてゆくようだったが、直に最後の女の額の感触が来ると、額から、体中のあちらこちらに向かって、同じひどさの痛みが飛び散った。それが終わると、また一人目の感触が、燃える前の状態で現れて、同じ事を始めた。そんな事を繰り返していたのだから、恐らく顔付きも、別人のようになってしまっていただろう。
　私は、家路を急いでいた。腹の中には、火が入っていた。闇の中を駆ける私

の姿は、私を待つ者達の目に、星のように輝いた筈だ。家に着き、早速彼らに囲まれると、彼らの顔が、私の腹からの光りに、一斉に浮かび出る。直ぐに順番が決まる。争うような事はない。一人目が、腹を押し付けてくる。頬が火照り、何とも言いようのない気持ちよさそうな顔を、私に向ける。そうして次々に、私の持ち帰った火は伝えられる。何時もは湿っぽい闇夜が、大騒ぎになる。騒ぎの果てに、夜が白み掛ける頃、私達は溶けるように眠り込んだ。目を覚ますともう陽が高くて、私達は木陰に身を寄せたが、ただ腹の痛みに身動き取れなくなるだけで、誰も、腹の火を取り出して、利用出来る者はなかった。私は一人目の男だった。私は、殆どありもしない望みを二人目に託して、燃え尽きるしかなかった。周りの者達も、私に続くしかないだろう。

　二人目の私も、同じ結末に身悶えするしかなかった。その二人目の私が、ありもしない望みを託した三人目も、更に四人目も、五人目も、六人目も、ずっとずっと、同じ事になった。それからやっと、私は、木の棒を引きずる子供だった。待っていた大人達は、熱い棒を裂いて、火種を見付けた。それ程嬉しがらないところを見ると、彼らには、その使い途がよく分からないのだろうか。辺りのひどい湿気にやられて、直に火は絶えてしまった。そんなものだろうと、がっかりする者もなかった。子供の私は、蹲って凍えながら、もう動けなくなって、微かな望みを最後の女に繋いだ。

そして、私は、その女だった。特に、行く当てはない。通りすがりの者に、瞳の中の炎を見せて回った。大抵は、目を逸らされたが、乗ってくる者も居た。全て男で、面白がって、私のオデコにオデコを擦り付けてくる。それで火は伝わりはしたが、それらは、男達の体の中をグルグル回るだけで、外に出る事はなかった。それどころか、火を取り出してくれと大仰に言い立ててくる男も居て、私の立場は、段々悪くなった。ただ、何の実害もないのだから、私自身、それを取り出す必要は感じない。時の経つ内に、私は、誰からも忘れられて、誰も知らないような所に去っていったらしい。

　それでまた、独りで、腹を燃やすだけになった。一人目の男から、最後の女までの、腹と額の感触と、その一人一人の私の末路の記憶が、何度でも甦り、それらは順々に、腹の熔鉱炉に放り込まれては、燃え尽きるまで居座るのだから、そのひどい痛みが続くしかない。喚いてばかりでは、喉が壊れる。吃驚するような速さの呼吸法が、自ずと身に付く。（二〇〇二年二月二十五日）

*　　*　　*

浮き彫り

遠くの、そこだけ飛び抜けて高い所で、次から次に、火がポタポタと落ちて来ているのは、くっきりと見えていた。その更に上には、色のない暗い空しかない。おかしな景色には違いないが、取り立てて、そのおかしさに拘ったところで、何かが手に入る訳でもなさそうなので、遣り過ごしていた。その遣り過ごしていたのが拙かったのか、それともどうしたところでどうなるものでもなかったのか、その火の一つが、いきなり私の前に立ち現れた。逃れようもない。遠くの高い所を見ると、火が、黒い急斜面を、順々に転げ落ちている。今更そんなものを見付けても、どうにもならないかも知れないが、行き先は気になる。それを目で追おうとする内に、間近の火にすっかり包まれてしまった。ただ、少しも熱くない。これは火か。火に見せ掛けた別のものだ。中味は、空っぽだ。

いや、それが、私を包んでいるのではなく、私が、それを包んでいる。それは、私の中に入り込んで、出口はない。あるかも知れないが、それ自らで、勝手に塞いでいるらしい。私は、それのための、ただの容れ物でしかない。私の表面が、顔も何処も、みるみる、火を象った浮き彫りで埋められてゆく。本当の火とは、寧ろ隔たっていて、その火は、私をずっと遠巻きに取り囲んでいないだろうか。急斜面を落ちて行った火は、私の見えない所を通って拡がり、巨大な輪を描いて、その輪でもう、私をすっかり閉ざしているに違いない。しかし、見える訳でもないのに、どうしてそう思えるのか。私の表面の火を象った

浮き彫りが、私を動けなくさせ、浮き彫りを動く炎のように見せる、揺らめき続ける光りが、ずっと遠くから来るようだ。その光りが、火の燃える輝きでなくて何だろう。私は、その輝きに照らされて表面を揺らめかせてだけ、自らの位置と姿を確かめられる。

　その遠い火に向かって呼び掛けようと、喉の奥を震わせた。唇にも浮き彫りは乗り上げて、既に貝のように硬かったが、それが幸いするのか、私の声は、笛のように伸びやかに、空高くまで響き渡るようだった。そして、その声が、輪を描いて拡がってゆくのが分かって、それが遠くからの暖かそうな光りを受けて、その表面にうっすらと、火を象った浮き彫りが描かれてゆくのが、見て取れた。すると、声は、そこで凍り付いたように、それきり先へ進めなくなった。また喉の奥を震わすと、同じ声が伸び上がったが、それは、動きを止めた初めの声の輪の中で行き止まり、浮き彫りで覆われて、輪の内側を狭くするだけだった。

　その遠くで固まった声の輪を吹き払えないものかと、貝の唇から、声ではなく、息を吹き出した。息が、そこまで届くと、その息を受けた表面の浮き彫りだけが、音は聞こえないが、まるでカラカラと軽く乾いた音を立てるかのように、剥がれて風に舞い、暫く空中を漂ってから地面に落ちていった。その剥がれた跡は、何もないようだったが、そこだけを見詰めていると、そこを照らし

ている、遠くの見えない筈の火が、そこがプリズムのような働きをして、見えてくるようだった。

　その見えてくる火は、しかし、少しも火のような姿ではなく、更に遠い方に向かって撓る骨の一繋がりのようだった。それを眺める内、その撓り方を真似て、私は身を捩らせていた。それとぴったり同じ姿勢を取れば、私の中に入り込んだ物を、火とそっくりにして、吐き出せるのではないか。ただ、その骨のような火の全てが見えた訳ではない。ほんの一部だ。もっともっと息を吹き付けて、声の輪の表面の浮き彫りを、剥がさなければならないが、そんな遠くまでも届く強い息は、二度と出せなかった。それどころか、声の表面の浮き彫りは少しずつ修復され、また火を描き出し、剥がれた跡はすっかり塞がって、もうどうしようもなかった。しかし、遠くを見過ぎたかも知れない。足元から遣り直そう。

　足元では、上から下に、かなり強く水が流れ落ちていた。元を辿ると、どうやら全て、私の表面の火を象った浮き彫りから噴き出ているようだった。これ程の勢いで水分を吐き出していては、私の体が空っぽに干上がるのも、もう直ぐだ。水は、足元に叩き付けられると、静かに水平に八方へと流れ拡がってゆく。その水で、周りはもう、すっかり池になっていた。ただその表面は、鏡のように輝いて、色のない空だけを映すので、深さは少しも分からない。或いは、

深さなどなくて、なぜなら人一人の体から出る水分など知れているのだから、ただ表面だけが拡がって行くのかも知れない。私は、その水に触れて、確かめてみたくなった。すると、硬い体の中で、片腕だけが、触手のように柔らかく伸びて、水に近付いて行くようだ。そして、その先が水面に届くと、それは、そこで沈まずに、水の上を水平に流れて、滑るように私から遠ざかって行く。やはり、深さはなかった。硬くて、恐らくは紙のように薄い水面が、私から、八方に向かって拡がっているだけらしい。片腕は、ゴムのように伸びて、やがて切れてしまうだろうか。

それなら、私の足も、その水面の上に乗っているのか。その拡がり続ける中心に乗っているので、動けないが、少しでも片腕が伸びてゆく方に、足をずらす事が出来れば、そのまま腕と一緒に、水面の上を滑って行けるだろうか。それとも、足から流れ落ちる水が、その水面を作るなら、足だけは、ちゃんと地面を踏むままだろうか。しかし、片腕は、もう伸びすぎて、透き通ってさえゆくようで、明らかに限界ではないか。

突然、足元が盛り上がった。姿は見えないが、私は、大きな魚の背中に乗っているに違いない。それが、ぐらりと傾いて、水の鏡を砕きながら、私の片腕の方に進み出した。そして、その魚は、その私の片腕の先を口に銜えているようだ。だから、私は、その荒っぽい泳ぎ方にも、振り落とされずに済んでいる

のだ。右に左に揺れる度に、私は、私の中で、虚ろな響きがクルクル回りながら唸りを上げるのを聞き取っていた。私の中が、すっかり空っぽになっているのが分かった。水も火に見せ掛けたものも、失われていた。替わりに、もうそこから水が迸る事もない、火を象った浮き彫りだけが、表面に残された。

　魚は、私のために、火を探しに行くのだ。いや、火でなくても、私の表面の浮き彫りを、火のように輝かせる光りだけでも構わない。火は、私をぐるりと遠巻きにしている筈だから、真っ直ぐ進んでさえいれば、必ず、その火に近付いている筈だ。後は、魚の泳ぐ力に任せていればいいのだ。

　しかし、鏡の池は、そこでお仕舞いだった。私は投げ出された。片腕は千切れたか。しかし、いきなり触手のように現れたりして、元々腕ではなかったのかも知れない。私は、硬くなったまま、コロコロと転がった。もう、虚ろな響きさえ聞き取れなかった。空っぽな私の表面に浮き彫りがされているのではなくて、火を象った浮き彫りが、人の形をしているだけのものが、私の全てのようだった。その私が、鏡の池の円い縁に沿って、回っているらしかった。それでは、何時まで経っても、火には近付けないではないか。いや、今更火に近付けたところで、何を取り返せるものか。こうしてずっと転がっていられるなら、それでいいではないか。

　それでも、遠くの高い所で、次から次に、火がポタポタと落ちているのは、

くっきりと見えた。あの火が、水を鏡にし、私を転がしているに違いない。浮き彫りに象られた火の形が磨り減らない限り、私は、火と繋がっている。尤も、それが磨り減れば、私は、跡形もない訳だが。（二〇〇二年二月二十七日）

風、その他

著者　u_

© 2002 u_　但シ死後ノ著作権ハ放棄スル。

Independently published